
ガールズ&パンツァー
GIRLS und PANZER
著 ひびき遊
原作 ガールズ&パンツァー製作委員会
VOL. 3
MF文庫J


GIRLS und PANZER
VOL. 3
ガールズ&パンツァー
GIRLS und PANZER


優勝！大洗 女子学園！


五十鈴華
Isuzu Hana
武部沙織
Takebe Saori
冷泉麻子
Reizei Mako
西住みほ
Nishizumi Miho
秋山優花里
Akiyama Yukari
Ⅳ号戦車D型
Panzer IV D Tank

キャラクター紹介
Character Introduction

丸山紗希 Saki Maruyama
一人で物思いにふけっていることも多く、おとなしい。きんつばと昆布茶が好物。

阪口桂利奈 Karina Sakaguchi
考えるよりも先に行動してしまう積極派。趣味はアニメ鑑賞。HDDの残りがいつも気がかり。

宇津木優季 Yuuki Utsugi
結果がでるまで我慢できる辛抱強いタイプ。反面のんびり屋でもある。太めの眉が魅力的。

山郷あゆみ Ayumi Yamagou
ボーイッシュでさっぱりした性格。その反面、ストレスをためてしまうことも。

澤梓 Azusa Sawa
面倒見がよく1年生チームのリーダーを務める。慎重な性格をしている。

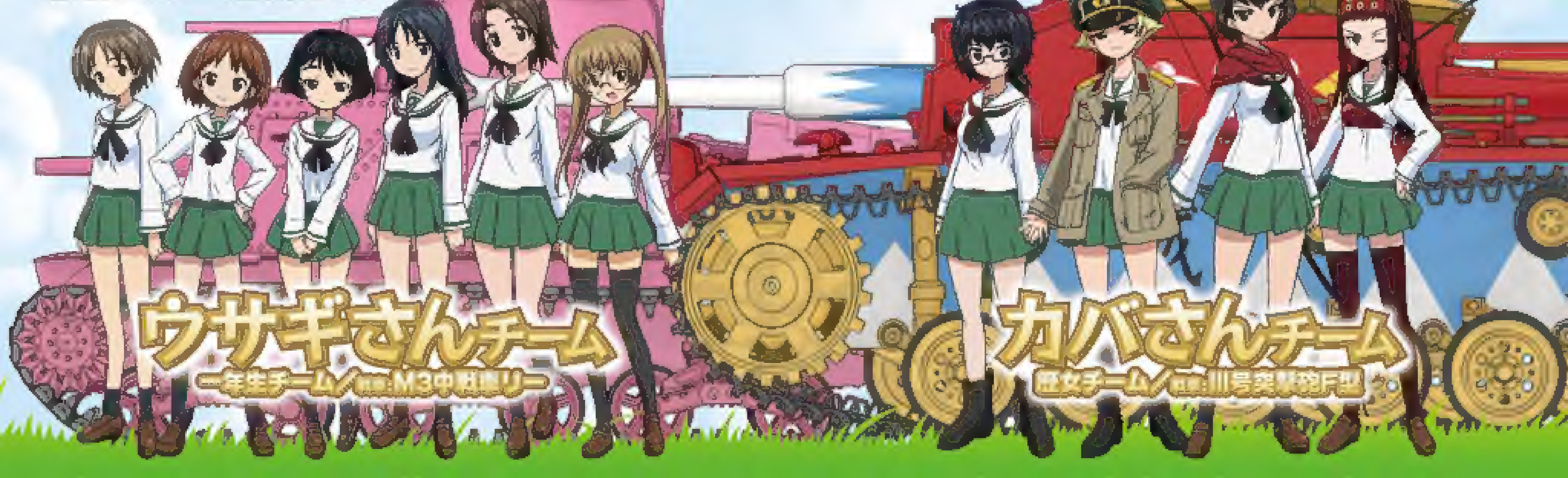
大野あや Aya Oono
底抜けに明るいメガネっ娘。おもしろストラップを集めたり、個性的な趣味をしている。

おりょう Oryou
幕末史に関しては他の追随を許さない。坂本龍馬を尊敬している。

エルヴィン Erwin
欧州史に詳しく、中でもドイツびいき。第二次世界大戦に一家言持っている。

カエサル Caesar
歴史好きな「歴女」チームを率いるリーダー。ローマ史に詳しく、いつも関連書を読んでいる。

左衛門佐 Saemonza
日本の戦国時代の知識については右に出るものがいない。好物は「真田こねつけ餅」。



MF文庫J

ガールズ&パンツァー3

原作：ガールズ&パンツァー製作委員会
ひびき遊

口絵・本文イラスト●京極しん

CONTENTS

■プロローグ　お休みなさーい。

「さーてっ！」
ばいばーい、ってみんなを寮の外まで見送ってから、私──武部沙織（たけべさおり）はダッシュで部屋まで戻ったよ。
１ＤＫのキッチンのシンク。
そこに残されてたのは、あんこうチームの五人で食べた、ゲン担ぎの夕食の跡。
私たち五人ぶんの食器類が、水を張っただけでたくさん放り込まれてた。
うー、私ってば料理つくるのは好きなんだけどさ……洗い物って、ちょっと苦手なのよね。
中性洗剤使ってても、毎日やってると手も荒れてくるし。あのね、ハンドクリームでのまめなケアって、すごく大事だよ。
「けど、将来の旦那さまのためなら、へっちゃらだよね～！」
えへへ。私はフリルのエプロンを付けなおして、超特急で洗い物を片付けちゃう。
──というのも、急がなきゃいけない理由があった。
今はまだ、夜の八時を回ったとこ。
うー、カツを揚げた鍋だけは、油の処理に手間取っちゃうけど……がんばるっ！
「よし、終わり！　じゃあ次は、シャワーシャワーシャワー！」
シンクもきっちりぴかぴかにしてから、私は脱衣所に向かった。

ぱぱぱっ、とエプロンと眼鏡（めがね）を外して制服脱いで、あっついシャワーをささっと浴びる。

ほんとはこってりした揚げ物を食べたから、半身浴で一時間くらいデトックスするんだけどね。

ううっ、今日はダメ。時間優先！

いーの。それに豚肉はビタミンB１が豊富だし、もともとお肌にだっていいんだから！って雑誌に書いてたし。

んで、シャワーから上がって、お気に入りの黄色いパジャマに着替えると……。

「セーフ！　うん、ぴったり！」

ベッドに腰を下ろした時点で、私は時間を確認した。

眼鏡もコンタクトもしてないから、目覚まし代わりのケータイを引き寄せて、にらめっこする。

時刻表示は、ええと、ジャスト九時！

そしてアラームを、朝の三時半に設定したよ。

だって明日がついに、戦車道全国大会の決勝戦なんだから！

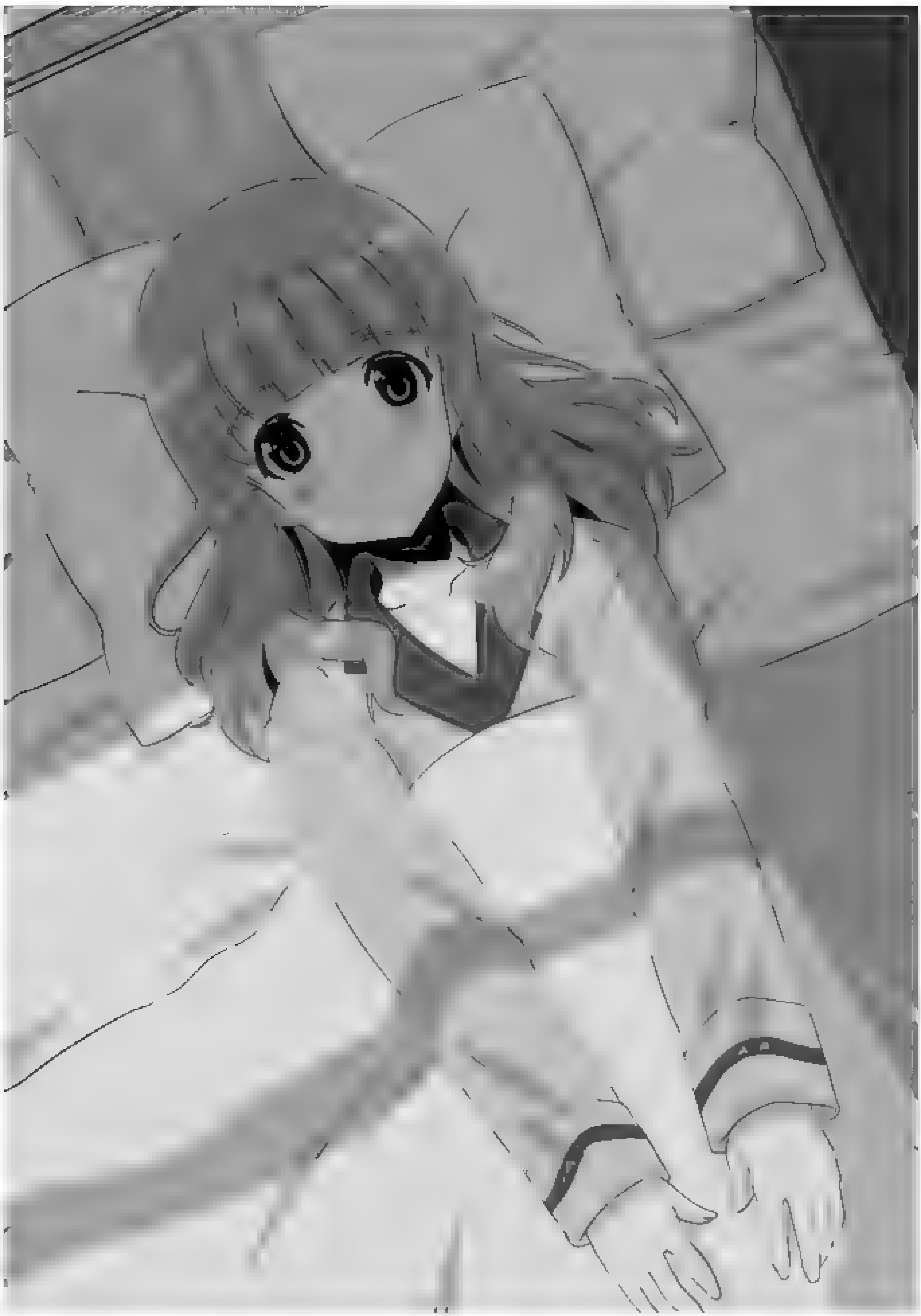
「学校での集合時間が五時半だから、三時半はちょっと早いけど……ううん、今からならしっかり六時間以上眠れるよね」

明日は気力も体力も、ばっちりにしとかなきゃ、だもん。

それに三時半起きで、入念にゆるふわ髪のセットをしたいし～。

「……とうとう、全国放送されるんだよね。試合！　うー、やばいようぅう！」
忘れずに、枕元に常備してあるアロエのハンドクリームを塗ってから、明かりを消してベッドに潜った。
でも、興奮して眠れないよ。私は一人、身悶（みもだ）える。
だって、だってだって！
もしかしたら私の活躍を見たカレが、いーっぱい集まってくるかもしれないじゃん？
あー、どうしよう。イケメンばっかりだったら、私、選べないよぉおおお。
って、ダメダメ。
その明日のために、今日はもう寝るの。早々に。
落ち着け、私！
そーだ。他のこと考えよう。
んーと、えーと……。
「そういえばみんなも、眠れてないのかなあ？　今夜は」
ふいに頭をよぎったのは――さっきまでこの部屋で一緒にいた、四人の仲間たちのこと。
Ⅳ号戦車のあんこうチーム。
……別れ際、ちょっと気にかかったのは、戦車長のみぽりんの様子だった。
さすがにどこか、緊張（きんちょう）してたような？
「無理もないよね……みぽりん」

だって明日の決勝戦の相手は、みぽりんがついこの間までいた高校、黒森峰女学園で。
さらにその隊長はみぽりんのお姉さん！　戦車道西住流の、西住まほさんなんだもん。
不安になるのも仕方ないよ。
そして、砲手の華も少しだけ、いつもと違った。
気が付いたのは私だけだったのかな？
華ってばよく食べるコだから、今日だってみんなよりカツもご飯も多めにしておいたんだけど、普段より食べるペースが遅かったと思う。
うん、学校でも一緒にお昼食べるから、私は知ってる。華は上品に、でも気が付けば誰よりも早く完食してるもん。
けれど今日は、みんなと同時くらいに食べ終わってた。
体調が悪いわけじゃないみたいだし、やっぱり、なにかあったのかな？
……うーん、でも。
意外とのんきな華だから、その「なにか」に自分でも、まだ気付いていないのかもしれないけどさ。



けっこうそういうとこあるのよね、あのコってば。
「そもそも悩んでたら、私とかに話してるよね。華だったら……」
相談されたら対応しよう。うん。
むしろ自覚してないのなら、明日の決勝を前に、変にほじくり出さない方がいいよね？
——そんな二人とは対照的に、今日ずっと興奮気味だったのは、装塡手のゆかりんだった。
「決勝戦はなんと！　自衛隊の富士総合火力演習が行われる、戦車道の聖地で行われるんですよ～！」
とかなんとか、はしゃいでたっけ？
もしかしたら私以上に、今夜は寝付けないのかも、ゆかりんったら。あはは。
そうだ。寝付けそうにない、と言えば……。
「麻子、大丈夫かなあ？」
ぽつり、と私は思わず呟く。
操縦手の麻子ったら、ほんと朝にすごく弱くて、大洗女子学園一の遅刻魔なんだから。
学校一の天才、でもあるんだけどね。
でも、戦車道の朝練と同じくらいの時間帯だし。ここから電車で移動して、決勝戦が行われるのは、ちょうどお昼前みたいだから平気だよね？
それに最近は、少しは朝に強くなったみたいだしさ。

あとなんだか、「明日は遅刻しないために、秘策があるぞ」なーんて、もったいぶっていたっけ。

結局どんな策なのかは、訊いても教えてくれなかったけれど。……ふわ。

私は小さくあくびした。

あ、いい感じ。眠れそう――。

「明日は……一応、麻子を、迎えに……」

行って、あげなきゃ。

そんなことを思いながら、意識がゆっくりと溶けていった……。

「じゃあね、みんな。また明日！　決勝戦、がんばろー！」
ばいばーい、と沙織さんが手を振って、見送ってくださいます。
それを合図にわたくしたち、あんこうチームの他の四人は「ごちそうさまでした」と告げてから、それぞれの帰路に就きました。
沙織さんの寮からだと、ちょうどわたくしだけが別方向となるようです。
「では、明日の朝、学校でお会いしましょう」
ぺこりと一礼してわたくし、五十鈴華は一人、夜道を歩き出しました。
――と言ってもわたくしの寮は、ここからほんの目と鼻の先ですし、街灯が明るく照らす道路を真っ直ぐ進むだけなのですけど。
ああ、それにしても。夜風がひんやりと気持ちいいです。
学園艦の上につくられた町ですから、いつもの潮の香りがして、時折わたくしの長い黒髪に湿気が纏わり付くのですけれど。
もう慣れました。これはこれで、趣のあっていいものです。
八分目のお腹を抱えて、つい思い出すのは、先ほどいただいた沙織さんのおいしいご飯。
からっと揚がった衣が素敵なトンカツさんと、丁寧に裏ごしまでされていたマッシュポ

テトのサラダに、手作りドレッシングのシーザーサラダ——。
どれも一手間を惜しまない、沙織さんらしい食事でした。うふふ。
あ、忘れてはいけないのは、ほかほか炊きたてご飯です！
沙織さんたら、きちんとわたくしのぶんはてんこ盛りにしていただいて……さすがは、一年生のときからの付き合いです！
わたくしのことは、なんでもお見通しなのですから。
でも沙織さんの気遣いに見合うような男性は、そうは現れないと思うのですよね。ええ。
「と言うか、沙織さんって面食いの割に、中身もきっちり求めますし。……『決勝戦で勝ったら婚約する！』だなんて、素っ頓狂なこと言ってましたけど、行き遅れないことを願うばかりです」
そんなことをつい、夜風の中に呟いたとき——。
「五十鈴殿〜！」
ふいに名前を呼ばれて、わたくしが振り返ると、追いかけてきた人影が一つ。
わたくしと同じ大洗女子学園のセーラー服姿で、背中には通学鞄代わりのリュックを背負っている女の子——跳ねた髪が特徴的な、秋山優花里さんでした。
あら？　どうしたのでしょう？
「秋山さん？」
「はあっ、す、すみませーん。あの、一緒に帰りましょう〜」

「はい？　ええと、でも」
わたくしは思わず首を傾げました。
と言うのも、確か……。
「秋山さんのおうちの理髪店は、こちらの方角ではなかった気が？」
「はい。そうなんですけど、その。先ほど、別れる前に武部殿が言ってたことを、ようやく理解しまして」
えへへ、と秋山さんたら照れくさそうに髪の毛を掻き回しました。
「そう言えば沙織さん、なにか秋山さんに耳打ちしてましたっけ」
沙織さんの、言ってたこと？　あ。
「ええ、そうなんです。今夜は西住殿をそっとしておこうね、とかだったんですが……」
「？　みほさんを、ですか？」
「はい！　そう言われていて気付いたんです。西住殿がどうも、ふとしたときに、考え込んでるなって。いえ、つい今し方冷泉殿が『ちょっと寄るところがあるから』ってワタシたちと別れたとき、西住殿の反応が遅れたんですよう。それで、おそらく明日の決勝戦のことで、思うところがあるのかなと」
「あっ、なるほど。なにしろあの、黒森峰女学園との決勝ですし」



それは、わたくしたちが負ければ、大洗女子学園の廃校が決まってしまう戦いです。
その現実だけは自ずと、言葉に出すのがためらわれました。
いえ、わたくしたちは絶対に、勝たねばならないのですから。
もちろんわたくしたちの誰もが、同じ重圧を感じていますけれど……。
「やっぱり、武部殿はすごいです」
うんうんと、秋山さんが頷きました。
「ワタシなんか、ぜんっぜん、そこまで気が回らなくて。さりげなく気配りができるからこそ、武部さん、友達多いんですね。ううっ、見習わなくては〜〜〜〜〜！」
「あ、そうですね。沙織さんはモテるんですよ。……女子限定で」
「うわあ。ま、まあ大洗女子は、女子校ですからね……」
苦笑いする秋山さん。
わたくしも思わず微笑みました。
ただ、そんな楽しいひとときは、すぐに終わりを告げてしまいます。
――夜道を進んだ先に見えてくるのは、三階建ての見慣れたアパート。
「わたくしの寮は、ここなんです」
その前で足を止めて、秋山さんに向き直りました。
ただ、なんでしょう？　そのときなぜか、わたくしはまだ、秋山さんとはしゃべり足りなくて。

そう感じたときには自分から、ふいに切り出していました。
「あの。せっかくですから、少し上がっていきませんか？」
「！　い、いいんですか⁉」
秋山さんがすごく目をきらきらさせます。
あら。よかった、嫌ではないようです。
なら――。
「まだ八時過ぎですし。お茶の一杯や二杯は飲めますね？」
腕時計で時間を確かめて、わたくしは秋山さんをつれて、寮の部屋へと向かうのでした。

†

「お、おおおおー！　ここが五十鈴殿の部屋ですね⁉　わー、なるほど、とってもらしいです！」
アパート三階の一室に入るなり、秋山さんが大げさに声を上げました。
「そうですか？」
学生鞄を畳に置いたわたくしは、目を瞬かせてしまいます。
和風スタンドの明かりに照らされるのが、二間続きの和室だったから、でしょうか？
寮に入る際に、お母様が業者に頼んで、フローリングから間取りを変えさせたのでし

た。
確かに襖や障子があると、わたくしも落ち着きますし。
お母様には大変感謝しています。
「クーラーがないので、扇風機だけなんですが、大丈夫ですか？」
からりと窓を開けて網戸にしつつ、スタンド脇にあった扇風機のスイッチを入れました。
季節はちょうど夏なのですが、昔からクーラーなしで生活していて、わたくしは気にならないのですけれど。
「はい！　外からも風が入ってきますし、戦車の中に比べれば天国です！」
秋山さんはにかっと笑って、こちらの勧めた藺草の座布団に座りました。
「あ、でも戦車は暑くても、地獄じゃないですよ。あれはあれでいいものですからっ」
「わかりますよ。撃つたびに伝わってくる熱気も、激しい振動も……胸がじんじんしますものね」
「ええ、油と鉄の臭いも、荒ぶるエンジンの鼓動だって最高です！」
「ふふ。じゃあ、熱いほうじ茶でも入れましょうか？」
わたくしは台所に立ちました。
やかんに水を入れて、ＩＨコンロに置きます。お湯が沸くまでにてきぱきと、急須や茶筒を取り出しました。
毎日やってることですから、慣れたものです。

……でも料理の方は、さっぱりなのですけれども。
つくれるのはせいぜい、土鍋で炊いたお米を使った、おにぎりくらいです。
どうにもその、包丁がうまく使えなくて……。お昼を学食でしっかりいただいているので、朝と夜はおにぎりだけでもなんとかなるのですけどね。
やはり日本人は、お米があればどうとでもなりますもの。
――なんてことを思っているうちに、お湯が沸きました。茶葉の入った急須に注ぐと、待つことほんの三十秒。
「今ですっ」
狙い澄まして、わたくしは動きます。
思えば、砲手としての心意気と、通じるものがありますね。
お盆の上に並べておいた湯飲みへ、急須の中身を一気に全部絞り出しました。この最後の一滴が、おいしいんですよ。
さて、二人ぶんのほうじ茶が完成しました。それらとともに、わたくしは秋山さんのもとに戻ります。
その秋山さんは……あら？
「やっぱりお花、飾ってるんですね！　さすがは五十鈴殿でありますっ」
しげしげと彼女が見つめていたのは、部屋の座卓に飾っていた、わたくしの活け花でした。
「ええ。たまには、練習をしておかないと」

今はみなさんと、戦車道に邁進(まいしん)しているわたくし。
でもすべては華道の家元、「五十鈴流」の新境地を極めるため――。
ですから時間をつくっては、花を買って、あれこれいじっているのです。
今回は黄色も鮮やかな向日葵(ひまわり)を中央に、色とりどりの百合(ゆり)をあしらってみました。
こぢんまりとはしていますが、大きく広がるイメージを取り込み、夏の花火のような華(はな)やかさを演出したものです。
ただ、そのとき。
「そういえばこれ、この前のと似てますね？　ほら、ケータイの写メで見せてくれた、五十鈴殿が展覧会で飾ったのと～」
「えっ」
それは屈託(くったく)のない、素直な感想でした。
だけど――わたくしは、思わず息を呑(の)みます。
似てる？　これが？
「言われてみれば……！」
「？　あ、あれ？　あのー、ワタシ、なにかまずいこと言いました？　す、すみませんー」
「いえ……自分ではまったく、気付きませんでした。むしろ、秋山(あきやま)さんのおかげで、わたくし……」

確かに。
まじまじと、花瓶に活けた花を見れば、あの展覧会の作品と印象がそっくりです。
あのときはⅣ号戦車型の花瓶を使った、大きめの作品だった、という違いはありますが……。
「戦車の、砲撃のように、色とりどりに大きく咲かせて」
――「花火」と「砲撃」の違いはあれど、今目の前にある小さな花瓶に活けたものも、まったく同じ雰囲気でした。大胆に見せかけた、ともすれば単調な飾り方。
そうです。そのことに、おそらくわたくし自身もなんとなく気が付いていて。
だからこそ、新境地を開いたというのに、こうしてまめに練習をして……。
「五十鈴殿？」
「……。甘え、でしょうか」
「へ？　な、なにがですか？」
「わたくし、あえて自分の至らない点を、見ないようにしていました」
思わず制服の胸元を押さえます。
じんじんどころか、もやもやとしたものがそこにありました。
わたくしは新境地に行き着いた、と思ったことで――足を止めていたのです。
ここが入り口でしかないことに、目をつむって。
けれどもそれ以上に、同時にひやりとさせられたのは。
「！　もしかして、戦車道も？」

「え。はい？」

「わたくしの突き詰める道は、表裏一体です」

　戦車もお花も、表と裏で、同じこと。

　なら。

「……やはり、わたくしは砲手としても至らないところがあるのに、気付かないふりをしていたのでしょうか？」

「いえ、あの、五十鈴(いすず)殿？　まるで濃霧(のうむ)でのポーランド侵攻のように、話がさっぱり見えませーん！」

　わたくしに肩を掴(つか)まれて、秋山(あきやま)さんは目を白黒させました。

　あら、いけない。わたくしとしたことが。

「す、すみません。ただ……そうです。きっとわたくし、だからこそ秋山さんと二人で話がしたかったのかも」

「？　話って、えーと。相談したいことでも、あったんですか？」

「はい。だって秋山さんなら、戦車について詳しいですし」

「い、いやー。それほどでも、ありますけど～」

「でも、決勝戦は明日だという、こんな間際(まぎわ)になってそのことに気付くなんて……！」

　わたくし、なんて愚かなのでしょう。

　思わず持病のしゃくが起きそうになります。うう。

「今更、間に合うでしょうか？　そもそも慢心(まんしん)している、と勘付(かんづ)いたものの、なにが足り

ないのかわたくし自身ではまだわかりませんし」
「五十鈴殿の足りないところ、ですか？　う～ん」
砲手のわたくしとはいつも、阿吽の呼吸で繋がる装塡手の秋山さん。
そう、その彼女でしたらきっと、わたくしの「弱点」を感じ取っているはず――？
ですが。
「ちょっと思い当たりません。だって五十鈴殿はⅣ号戦車の長砲身にも慣れましたし、十分に活躍していると思いますよ」
「あ……。そう、ですか」
「でも、だったら。きっとワタシが側で見てても気付かないくらいの、五十鈴殿だけが感じる違和感なのかもしれません」
「え？」
「そうです、きっと！　そしてそれは、いつものように……実戦を通してでしか修正できない、微妙な感覚なんですよ」
「……！」
実戦を通して？
その言葉で理解するのは、戦車道全国大会の、二回戦でした。
対戦したのは強敵、アンツィオ高校。
その中でわたくしたちのⅣ号戦車は、今までの短砲身から、威力の高い長砲身に換えたばかりで戦いました。

ぶっつけ本番で、実際に撃ちながら、短砲身との誤差を埋め——わたくしは長砲身での「当てる」感覚を身につけたのです。

あれと、同じ……？

「だとしたら明日の決勝戦でしか、わからないのでしょうか？　でも相手はあの黒森峰女学園です。そんな余裕があるとは、とても」

不安が胸を突きました。

畳の上に正座をしたまま、つい網戸越しに、窓の外を見てしまいます。

そこから見える夜空に浮かんだ勲章菊のような月は、ちょうど一部が欠けていました。

月が満ちるにはどうしても、それなりの時が必要で——。

まるで今の、わたくしを表すように。

「いえ、なんとかできるかもしれませんよ」

けれども秋山さんが、「えへん！」と胸を張ってそう言いました。

「えっ？」

「ええと、五十鈴殿！　そこにあるラップトップPC、ネットに繋がっていますよね？」

「PC……パソコン、ですか？　ええ。あまり使ってはいませんけれど」

秋山さんが指し示したのは、活け花の隣に置いてあった、ノート型パソコンでした。

あれは五十鈴家に奉公で来ている新三郎が、「お嬢！　今時の女子高生は、こんなハイカラなものを使いこなせねばならないと聞きました！」と、大洗女子への入学記念に選ん

だものです。

すると秋山さんたら、傍らにあったご自分のリュックの中身を、急にごそごそ掻き回し始めました。

中から取り出してきたのは、なんと——あら。

「なんでしょうー？」

「じゃんじゃかじゃんじゃじゃーん！　ＰＣにつなげられる、ゲームパッドです！　ＵＳＢ接続で、邪魔にならない赤外線通信仕様なんですよ？　いわばデジタルの塊、自衛隊の誇る最新鋭の１０式戦車のようなものです！」

「ゲームパッド？」

アルファベットの「Ｈ」のような形のそれを、秋山さんはなんといつも持っていました。

「こんなこともあろうかと！　常時、予備のパッドも持ち歩いてるんですよ～。えっへん！」

「あの。なにを、どうするのですか？」

「決まってます！　五十鈴殿は実戦を通してしか、自分を高めることができません。なら、答えは簡単です。……実戦の機会をつくればいいーんですよう。明日の試合までにっ」

「え？　ど、どうやって、ですか？」

「そこで、ＰＣが必要になってくるわけです！　あ、立ち上げてもいいですか？」

「立ち上げ……？」

「あ、すみませんー。電源を入れるって意味です」
「ええ、それはかまいませんけれど」
「もちろんメールソフトを起動させたりはしませんから。使うのは、ブラウザソフトのみです」
秋山さんはノートパソコンの画面を起こして、スイッチを点けました。
やがてきぱきと操作して、インターネットを呼び出します。
するとなにやら文字を打ち込み、表示させたのは……まあ！
なにやら、英語のページ？
「『World of Panzer』、ですか？　あ、戦車のイラストですね？」
「そう、略してWOPですー！　いわゆる無料の戦車ゲームですよ。オンライン対戦のできる！」
「おんらいん？」
「あー、要はネットで他人と戦うことができるんです。戦車で！　まあ、あくまで仮想空間ですから、実戦そのままってわけにはいきませんけれど。でも」
「！　ゲームを通して、戦車道ができる、ということですか⁉」
まあ！　ようやくわたくしは理解しました。
秋山さんがにこにこと頷きます。
「これ、そこそこリアルなんですよ？　戦車好きには有名で〜。操作方法こそ、ゲームパッドになっちゃいますけど。どうですか、五十鈴殿。やってみます？」

「はい！　もちろんです！」
なにもせずに過ごす、だなんてあり得ません。それは華道と同じこと。
野に咲く花は、それだけで美しいです。
けれど、そこにあえて手を加えてこそ、初めて「道」となるのですから。
「やっぱり秋山さんは、頼りになります！　よろしくご指導、お願いしますね！」
「いえ、そ、そんな。だって、その……と、友達、ですから～」
当然ですよ、と秋山さんたら照れながら、もじもじするのでした。

††

「はい、はい。いや、だから……。もう～、そ、それは大丈夫ですってば～」
パソコンで、ゲームに必要なデータをダウンロードしている間、秋山さんがご両親に電話をかけていました。
実はこのWOPとかいうゲーム、始めるまでにもこうして時間が必要ですし、どれくらいかかるのか判断できなかったので――秋山さんに「よかったら泊まっていきますか？」と提案したのです。
だって明日の決勝戦に、寝不足で臨むわけにはいきませんもの。
「いいんですか⁉」
すると秋山さんたら目を輝かせて、リュックから寝袋代わりの一人用ポンチョまで出し

てきました。
わたくしはよく知りませんが、「つぇるとばーん」とかいう、三角形をした迷彩柄のもののようです。
いえ、わたくしの部屋には客人用の布団くらいは押し入れにあるのですが、どうも秋山さん的にはポンチョの方がいいようです。
それにしてもほんと、なんでも持ち歩いているのですね。
ただ、そうは言ってもさすがに、ご両親の許可は得るべきですから。こうして今、携帯電話でお許しを請うているわけです。
それはどうやら、無事に終わったみたいですね。
「ま、まったく、うちの親ときたら。母は赤飯炊こうとするし、父なんか『今から手土産を持っていこうか？』とか、大げさなんですよう。……いえ、確かにワタシ、友達の部屋でお泊まりなんか初めてのことなんですけどね。えへへ」
「あら、いいご両親じゃないですか」
ふふふ、とわたくしは思わず微笑(ほほえ)んでしまいます。
それは秋山さん本人も、ようくわかっているようです。ちょっとはにかみながら、ご自分の携帯電話を仕舞(しま)いました。
ちょうどそのとき、パソコンの画面に変化が生まれました。
どうやらダウンロードが終わったみたいです。「おっと！」と秋山さんがパソコンの前に座り直し、操作を始めました。

「さて、さっそく始めちゃいましょうか！　操作方法は、先ほどお教えしたのでわかりましたか？」
「あ。こちらを使うのでしたよね？」
秋山さんに促され、わたくしはゲームパッドとやらを一つ、手にしました。
「はい。キーボードとマウスだけでプレイすることもできるんですけれど。そうなると、実際の戦車とゲームとでは、ずいぶん勝手も違いますし……」
「だからわたくしはこれで、狙いを付けて撃つ、だけをすればいいのですね？」
「ええ、五十鈴殿は砲手に専念してください！　十字キーの左右で砲塔を回して、俯角は上下の調整です。で、撃つのはそちらの○ボタンで……ああ、そうだ。×ボタンで再装填となります。これだけはご自分でやってくださいね。あとの戦車の操縦は、このワタシがやっちゃいますから！」
「つまり砲手と装填手をわたくしが。車長と操縦手を、秋山さんがやられるということですね」
「はい！　それと通信手もですよー。このゲーム、オンラインでの団体戦となりますから。味方どうしでの指示のやり取りも、簡単にできるようになってるんです」
こう、あらかじめ設定したワードを、ショートカットで割り当てておいて。と、秋山さんは解説してくださいます。
わたくしはちょっと覚えることが多すぎて、そのあたりはもうお任せになってしまいますが。戦車の操縦法にしたって、二つ目のゲームパッドのＲ１Ｒ２、Ｌ１Ｌ２ボタンがど

うのと……あらら、ちっともわかりません！
どうやら、かなりこだわってつくられたゲームのようですね。
履帯（りたい）の動きをそうやって、うまく再現しているみたいです。
「さて、それでは戦車を選びますが……。もちろん、これはⅣ号にしちゃいますね！」
秋山さんがさくさくと、ゲームの登録を進めました。
画面に、見知った戦車の形状が現れます。確かにそれはⅣ号戦車でした。
あら？　しかも、これは？
「わたくしたちの実際に乗っている、Ⅳ号にそっくり？」
「あ、わかりました？　今回、手間を簡略化するのでワタシのパスでアクセスしてるんですけど。これ、細かいところまで大洗女子（おおあらいじょし）のⅣ号を再現した、カスタム戦車なんですよ！　えへん！」
「だからこんなにそっくりなんですね。色も、こちらの追加装甲とかも」
「砲塔周りのシュルツェンですね。もちろんですとも！　それがマークⅣスペシャルには欠かせませんから！　あとはあんこうマークだけなんですけど、そちらはドット打ち込みになっちゃうので、残念ながら間に合ってないんですよね。でも、いつかやりますよー！」
そうして秋山（あきやま）さんは、次の画面へと切り替えます。
今度は、試合会場の選択でしょうか？　なにやらいくつも、「砂漠」やら「高速道路」、「鉱山」といったリストがぞろぞろ現れました。

さすがに多すぎて、秋山さんの手も一瞬止まります。
けれども。
「……もう九時ですね？　あっ、もしかしたら！」
「？　なんですか？」
「みなさんもいつもみたく、不人気な峠マップに集まっているかもしれません！」
「はい？　みなさん、って」
「実はですね。前々から、エルヴィンさんたち歴女チームのみなさんと、ＷＯＰで一緒にプレイしてたんです」
「歴女さんたちと、ですか？」
そう言えば……。わたくしはエルヴィンさん、カエサルさん、おりょうさん、左衛門佐さん四人のことを思い出します。
お互いを魂の名、とやらで呼び合うみなさんは、いつぞやからか秋山さんを「グデーリアン」と名付ける関係になったのでした。
いえ、その四人の方々だけではなく。
「そしたらそこに前々からＷＯＰをやり込んでたゲーマーの、ねこにゃーさんやももがーさん、ぴよたんさんとかも混ざってきて。んで、さらにねこにゃーさんと親しかった一年の宇津木さん繋（つな）がりで、一年生チームの六人も最近参加してきまして……２１：００（フタヒトマルマル）に、あるフィールドにアクセスするようにしてるんです」
「あら。ゲーマーさんチーム、それに一年生までも？」

そんなことに！　わたくしはもう、びっくりです。
「秋山さん、言ってくだされればよかったのに」
「いやー、それがですね。みなさん、西住(にしずみ)殿の足を引っ張りたくないから秘密特訓だ〜、なんてノリになってまして。ちょっとワタシからは、教えにくかったんですよ。すみませんー」
「あ、そうだったのですか？」
「と言ってもゲームだと、一人で一輌(りょう)動かしますし、連携の訓練が中心になっちゃうんですけどね？　でもワタシたちは素人中心のチームですから、なんでもやってみるのはいいことかな、と。……それに団体戦では、お互いの息を合わせられるかどうかが、結局は大事になってきますし」
「ええ。大洗女子(おおあらいじょし)チーム全体でもそうですし、各戦車単位でも大切ですよね」
Ⅳ号戦車の砲手として、わたくしは敵を撃つだけに集中しがちですけれど——そうです。
たとえば装塡手(そうてんしゅ)の秋山(あきやま)さんがいなければ、連射(れんしゃ)することもままなりませんし。操縦手(そうじゅうしゅ)の冷泉(れいぜい)さんがいるからこそ、相手の攻撃をかわしながら、撃ちやすいポジションが取れるわけですもの。
さらにそれらを指揮するのは、車長のみほさんのおかげであり……通信手の沙織(さおり)さんがいて初めて、他の戦車とも意思疎通(いしそつう)が図れるのですから。
いけませんね、わたくしって。

そんなことに今更、気付かされるなんて。
……わたくしの至らない点というのは、そこのところなのでしょうか？
いいえ。なんだか、違うと思います。
おそらくもっと、わたくし自身の、砲手としての「技術」に関するところのようなな……。

それはやはり、まだわかりません。
まるでお花を刺す前の、なにもない、しんと張り詰めた剣山のよう――。
いざ飾り始めてみなければ、見えてこないことなのでしょう。
「で、WOPはオンラインゲームですから、不特定多数が自動的に敵味方で登録される仕様なんですけれど……そこに、対戦相手を指定できる、ってシステムが付加されてるんです。いわゆるリクエスト機能ですね！　アメリカ戦車と戦いたい、だとか、やっぱりドイツ機甲師団一色で！　とかとか、こだわる人はいーっぱいいますし～。それを使ってワタシたち、大洗女子だけで集まれるようにしたんですよー」
だからこそ今は、秋山さんの助力がとてもありがたいです。
彼女は「ポルシェティーガー」と、戦車名を打ち込みました。
あら、その名はわたくしも知っています。
それはうちの戦車道チームで、自動車部のみなさんが扱っている車輌ですね？
えへへ、と秋山さんが頬を掻きました。
「ポルシェティーガーって、このゲームでもやっぱり扱いづらいんですよね。それであま

り選択する人が少なくて。でもなんかエルヴィンさんが気に入って、使うようになったんです。そこでみんな、あえて参加プレイヤーの少ないマップ上でポルシェティーガーを指定することで、うまく身内のみが集合できるきっかけにしたんですよ。決勝前の今夜は、さすがに全員は集まれないかもしれませんが。……お、おおおおお⁉」
「秋山さん？　どうかなさったのですか？」
「あ、いえ！　その、みんないます！　ほら、エルヴィンさんのポルシェティーガーに、Ⅲ号突撃砲F型が三輌！　さらに三式中戦車チヌも三輌！　こちらはゲーマーチームのみなさんですね～。で、さらに一年生のM3中戦車リーも六輌！　これ全員ですよ？
わー、すごいっ」
「と、言うことは……みなさん、今夜も特訓するために？」
「ええ、そうに違いありませーん！　残念ながらチャット機能がついていないので、ゲームを通して確かめることはできませんけど」
「いえ。わかります」
わたくしはいつしか微笑んでいました。
みなさん、わたくしたちと同じなのです。間際まで己を高めるために、必死にあがいて……。
その気持ちは十分に伝わってきました。
「わたくしも、がんばらないといけませんね」
見つけなければ。わたくしの花に欠けている、「彩り」を。

そうこうしているうちに、ゲームの画面が切り替わりました。
表示されたのは……チーム分け、でしょうか？
今度は戦車名の書かれたリストが、二つにまとまって並びます。
「おっと、こちらはゲーマーチームの、三式チヌの三輌(りょう)がＡ(アルファ)チームですね！　歴女チームのポルシェティーガーとⅢ突三輌、Ｍ３リー六輌がＢ(ブラボー)チームで、敵になります！」
「えっ？　待ってください？　それだと」
おかしくないですか？　わたくしはリストの不自然さを指摘します。
だって、こちらは四輌で、相手は十輌となりますもの。
「つまり四対十の戦いになりますけれど、成立するのですか？」
「問題ありません！」
笑顔で秋山(あきやま)さんは答えました。
「ＷＯＰでは、熟練度に応じてのマッチングもできるようになってるんです！　実はねこにゃーさんたちゲーマーチームは、昔からＷＯＰをやり込んでまして、かなりの腕前なんですよー」
「あっ、そう言えば」
わたくしや沙織(さおり)さん、みほさんと同じクラスの猫田(ねこにゃー)さんが「昔からゲームで戦車を動かしてたから」とか、確かおっしゃっていたような。
だからこそ、決勝戦を前にしたこの時期にも関わらず、戦車道を履修(りしゅう)してチームに入ってくれたのでした。

「そんなゲーマーチームとバランスが取れた試合ができるように、ゲーム側がこうして、適当に割り振ってくれるんです」
「わかりました！　それでこのような形になったのですね？」
「はい！　……おっと、五十鈴殿〜。そろそろ試合開始ですよ、準備してください」
秋山さんのその一言で、座卓を置いた和室の空気が緊張しました。
ついに、始まるのですね。
パソコンの画面には、戦車から見えるゲーム内の風景が現れました。
広がるのは立体的につくられた木々の生える、峠道です。
その上の方に、開始までのカウントダウンが刻まれていました。
さて。秋山さんと二人並んで、わたくしはずっと持っていたゲームパッドを握り直します。
すでに汗ばんでいたのがわかり、つい一人で深呼吸しました。
あら？　隣では、二つ目のゲームパッドを取った秋山さんも、なぜか息を呑んだような？
「？　どうかしましたか？」
「へ？　あ、あー、いや〜。だって、その、ワタシ……こうやって肩を並べて、と、友達とゲームしたことなんかなくて。なんかすごく、う、嬉しいです！」
「……でもわたくし以外にも、ほら。みなさん、秋山さんと一緒にいますよ」
ね？　とわたくしはパソコンを指さしました。

もちろん画面の向こうにいるのは、多くの大洗女子戦車道チームの仲間です。
はっ、と秋山さんは目を輝かせました。
「ですよね！」
そうして画面に現れていたカウントダウンの表示が「ゼロ」となります。
ブルルン！　とパソコンから、戦車のエンジン音が高まって聞こえました。
「試合開始……パンツァー・フォーです！」
秋山さんがそう告げて勢いよく、ゲームパッドのボタンを押し込んだのでした。

――ノートパソコンの画面内で、ゲームの風景がどんどんわたくしたちの方へと流れてきます。
まあ。これは、戦車が前進しているという表現なのですね？
初めて体験する感覚に、わたくしは驚くばかりです。
「なかなかよくできているでしょ、これ。フリーゲームとは思えない完成度ですよね～」
Ⅳ号戦車を操りながら、秋山さんが嬉しそうにしゃべります。
「でも本当の戦車だと、もっと視界が悪いですけれど。そこまで再現してしまうと、ゲームが成り立たないかもしれないので、なかなかもどかしいところですよね」
「砲手の、照準器からの視点とも違いますね？」
わたくしはゲームを始めてみて、そこに気付きました。
でも画面の中央には、敵戦車との距離を計測するための、三角マーク「シュトリヒ」が

並んでいます。
もともとこのゲームは、一人で戦車を操り、砲撃するというものですから。
なるほど、同時にそれがこなせるような画面がつくられているのでしょう。
けれども秋山さんたら、「そうでした」とわたくしの方を向いてきます。
「五十鈴殿〜、十字キーをちょっと操作してみてください！」
「えっ。なんですか？　……あっ！」
言われたとおりに、砲身を操る上下左右のボタンを押すと——なんということでしょう！
　突然、画面が丸くくりぬかれたような、まるで違うものに切り替わりました！
指を離せばすぐさま、元に戻りましたけれど。い、今のは……？
「望遠機能です！　そうやって砲塔を動かすと、自動的に砲手視点に切り替わるんですよう。それをちょこちょこと使いながら、遠くに見つけた敵車輌に狙いを付けて、撃つわけです！」
「まあ、そんなことができるのですか？　あ、でも……切り替えている間は、秋山さんが戦車の操縦に困るのでは？」
「ええ、まーぶっちゃけ。あは、は……。一人で操作してるときは、自分のタイミングで使い分けられるので、問題ないんですけどね。えーと、でも見えない中でも戦車を動かしてみせるのが、戦車乗りの真骨頂ですから！」
えへん！　と秋山さんが胸を張りました。



「そこはもう、勘でカバーしてみせますよう。車長が西住殿でしたら、きっとそうするでしょうし！　って、西住殿ほど頼れる車長じゃないですけどね、ワタシ。てへへ」

「……いえ。砲手は、車長を信頼するものです。わたくしは秋山さんを信じて、撃つことに集中します！」

「おおっ！　なんか実戦っぽくなってきましたね！　うーん、やはりゲームといえども、戦車は複数で操った方がいいですね～……って、あ。そろそろ注視してください、五十鈴殿！　この峠道を進めば、他の戦車も見えてくるはずですから」

　するとふいに秋山さんの口調に、真剣さが混ざりました。

え？　わたくしは画面の中に釘付けとなります。

今はちょうど、峠の上り坂をぐいぐい進んでいるところです。

まだどこにも、戦車らしき姿は見られませんが。

「この峠のマップ、人気がなくて他のプレイヤーとのマッチングが避けやすいので、使ってるんですけどね。なんで人気がないかとゆーと、まず戦車で走れる範囲がけっこう限られてるんです」

「？　そうなんですか？」

「はい。マップの三分の二ほどは、岩場や深い森になっていて、戦車は大抵峠道を走るのみです。見た目より狭いんですよー。それでいて遮蔽物もほとんどないですし……。要はこうして走っていると、マップの真ん中あたりに、自動的に吸い寄せられる形になって」

　ぐわん！　と画面の景色が大きく下に揺れました。

それは坂となった峠道を上りきり——下りに切り替わったためです。
すると突然、見えました！
目の前の、すり鉢状になった地形へと、わらわら集まるなにかが！
「つまり、短時間で鉢合わせしちゃう、ってわけです！　こんなふうに！」
「はい‼」
もちろん画面に現れたのは、戦車です。ゲームの中でも履帯（りたい）の音と、土煙を上げながら動いていました。
右に、二輌（りょう）。左からは一輌！　一番近いのは……。
「狙いますっ！」
わたくしは砲塔（ほうとう）を操作して、画面を望遠（ズーム）状態に切り替えました。
丸く切り取られたように視界が変わり、狙う車輌の姿が拡大されます。
同時に秋山さんが停車させたのか、画面の揺れがなくなりました。
撃つなら、今です。
ゲームでの一発目ですから、必中というわけにはいかないでしょう。
画面の中の距離感は、わたくしが身につけた感覚とは違うでしょうし。
けれども、修正作業はすでに一度、長砲身への切り替え時に経験済みです。
かちり。わたくしの人差し指が、ゲームパッドのボタンを引き金のように絞りました。
——轟音（ごうおん）と揺れが、ゲーム画面を揺らしました。
一発目は……外れです。

ええ、大丈夫。これは当然の結果ですから。
大切なのは次の、二発目。
わたくしは別のボタンを軽く押して、がちゃんっ、と砲弾を再装塡させました。
普段はしない装塡作業が、いつもより心を冷静にさせるようです。
目標が砲撃に気付き、慌てて逃げるそぶりさえ、スローに見えました。
……逃がしません。
ふう――、と長い息を吐いていました。
これは、いつも砲手をしているときのリズムです。
いけます。わたくしの胸が、そう囁きました。
ゲームであっても集中すれば、同じこと。
あとは当てて、胸をじんと震わせるだけ。
目標にぱっ、と鮮やかな、一瞬だけの花を咲かせて――。
「!? あああ、五十鈴殿～！　違います違いますっ、それ、味方です！　敵戦車じゃありませーん！」
「……はい？　え、えっ？」
急に横からそう言われ、わたくしは咄嗟にボタンから指を離しました。
味方？　ええと、目標のシルエットは……。
「あれは三式ですよう！　味方のゲーマーチーム、ぴよたんさんの車輛です！」
「す、すみません！　わたくし、あまりよく判別できないものですから。実際の試合だと

各車にマーキングがあるので、味方を誤射することはないのですけれど」
わたくしはもう、平謝りです。
すぐに望遠状態（ズーム）から切り替えて、画面の視界を戻しました。
はー、じんじんではなく、胸がどきどきしています。
危うく味方を撃ってしまうところでした。
「でも、さすがは秋山（あきやま）さんです。ゲームの車輌であっても、一目で敵味方がわかるだなんて」
「あ、いえ。それは、ほら。ちょっとしたサインが出てますから」
「えっ。……あ」
言われて初めてわたくしも気付きます。
確かに、なにやら遠目に見える各戦車の上に、矢印のような表示と文字が。
文字は、もしかして操作している人のお名前ですか？
「【ぴよたん】……ああ、ですから秋山（あきやま）さん、どの方が操縦（そうじゅう）してらっしゃるのかまでわかったのですね！」
「はい、そうなんですよ。って、申し訳ありません！　敵味方の識別サインは、前もってレクチャーしておくべきでした！　すっかり失念してましたー！」
「わたくしこそ、よく見ておくべきでした。ゲームだといろんな表示があって、つい見過ごしてしまって。ぴよたんさん、びっくりされたのではないでしょうか？」
「ああ、それなら……」

ほら。とふいに秋山さんが、画面の上の方を指しました。
はい？　わたくしがそこに注目すると――あ、あら？
なにやら、会話のようなものが？
【ぴよたん：マジヤバイ！】
【ぴよたん：停止停止！】
【ぴよたん：大丈夫だっちゃ！】
「こちらは？」
「オリジナルのコマンドです。ほら、あらかじめ指示が出せるよう、キーに割り当てられるって言ったヤツですよう」
秋山さんが教えてくださいます。
そういえば、おっしゃっていたようなー。
「普通は『攻撃要請』だとか『了解』だとかになってるんですけどね。カスタマイズして、戦闘中で会話みたいに使うんですよ。最初はびっくりしたみたいですけど、『大丈夫』って言ってますから、ぴよたんさん気にしてないみたいですよ」
「そうなんですか？」
よかった。わたくしはほっと胸をなで下ろしました。
と、続く会話表示にも目が行きます。
【ももがー：散開なり～！】
【ねこにゃー：ボク、右翼から攻めますね】

あら、味方のももがーさん、ねこにゃーさんから指示が。
反応するのは秋山さんです。
「ではワタシたちは、左から回り込みましょう！」
そう告げて、戦車の針路を変更されました。
だけどそのとき、わたくしは新たに現れた会話を目撃していました。
【ユーキ：カレなんてカレなんてカレなんてー！】
【おりょう：南無八幡大菩薩(なむはちまんだいぼさつ)】
【アヤ：ご不要の戦車、撃破しまーす】
【かえさる：今の状況はハンニバルを待つローマ軍に似ている！】
【えるゔぃん：先手必勝！　バルバロッサだ！】
【カリナ：あいー！】
【サキ：……】
【さえもんざ：フェスティーナ・レンテ！】
まあ？　これは……。
「歴女さんたちと、一年生の会話も表示されるのですか？　て、敵側ですのに？」
「ええ。まるで無線傍受(ぼうじゅ)してるみたいでしょう？」
くすり、と秋山(あきやま)さんは笑います。
「このマップ独自の設定なんです。なんでも無線が混線した状況下らしくて。クセのあるマップなんですよ。ですから初心者も上級者も、ちょっと敬遠しちゃうんですよね。……

ワタシたちみたいに、身内でプレイするにはもってこいなんですけれども」
「あ、そうなんですね」
「それから、ほら。敵味方の表示は一目でわかるように、色が違うんですよ。味方はグリーンで、敵側がレッドになっているんです」
グリーンに、レッド？
なるほど、言われて初めてわたくしも理解しました。
画面上部に現れては消える会話も、二色でわけられていますし――よくよく見れば、戦車を指し示す名前と矢印の表示すら、同じように緑と赤の二種類がありました。
先ほどあわや撃ちそうになった、手前にいる【ぴよたん】さんの三式がグリーン。
奥にいる、右手の戦車もグリーンですね。
でも左側から迫ってくる車輌は、レッドですから。
「狙います！」
わたくしは改めて、砲塔を操作しました。
あれは【アユミ】と名前のついた、M3リーですね！
砲塔が二つついた独特のシルエットは、ゲーム内でもはっきりとわかりました。
アユミ……一年生の、山郷あゆみさん、でしょうか。
わたくしと同じ、砲手の一人です。
【アユミ：逃げよ逃げよ！】
右や左から囲まれて、こちらに狙われたのがわかったのでしょう。そんな言葉を表示さ

せて、後退を始めます。
牽制のためか、M3リーが一発、砲撃してきました。
瞬間、秋山さんがⅣ号を急停車させます。
みほさんがよくやる、基本的な挙動に倣ったものでしょうか？
こちらの未来位置を予測して放たれた砲撃を、停車することでかわして——かつ、止まって撃つという、命中率を上げることにも繋げるものです。
そんないつものあんこうチームの感覚に、わたくしはすかさず砲塔を動かしながら、つい唇が緩みました。
望遠された画面の中、敵車輌を中央に捉えます。
どんどんと離れていく、M3リーですが……。
「すでにゲーム内での感覚は、修正済みです！」
——ズドン‼
Ⅳ号の砲身が吼えました。
震える画面の中、白煙が一瞬視界を遮って——しかしわたくしは、はっきりと目撃します。
逃げるM3リーの履帯が弾け飛び、ぱっ、と鮮やかな山茶花色の花を咲かせたのを。
黒煙を上げて、M3リーの動きが止まりました。
そしてみなさんの会話の中に一つ、「報告」が混ざります。
【M3Lee『アユミ』大破】

緑でも赤でもない、白い文字で現れた、それは。
「ヒャッホー‼　一輌撃破です！　さすがは五十鈴殿、あんこうチームの砲手です〜！」
秋山さんがゲームパッドから手を離し、拳を突き上げてはしゃぎました。
あ、とすぐに真っ赤になって、落ち着かれましたけれど。
「すみません……っ、つい〜」
「いえ、ありがとうございます、秋山さん」
わたくしはにっこりして答えます。
それはなにより、当てた瞬間の感覚が、ゲームであっても同じだったからです。
……胸が、うずくようにしびれていました。
これなら、わたくしの「欠けた」なにかも、補える……？
「この調子でいきましょう。よろしくお願いしますね！」
「！　は、はいっ」
すぐに秋山さんは、止まっていたⅣ号を再び発進させました。
くるりと旋回すれば、赤い矢印をくっつけた、新たな敵車輌が飛び込んできます。
わたくしは呼吸を整え、いつものように狙いを付けて――。

■2 黒い雛菊に、感謝いたします。

秋山さんがⅣ号を駆り、標的を見つけ、急停止。
それを合図にわたくしが望遠に画面を切り替えて……狙い、撃つ！
とても基本的なスタイルですが、それはわたくしの培ってきた戦車道のリズムでもあります。
それがよかったのでしょう。たとえゲームという擬似的なものであっても、本当に戦車に乗り込んでいるかのような感覚で、戦い続けることができました。
【おりょう：東が吉と出たぜよ！】
いえ、こうして相手側の情報が、筒抜けということもあるかも？
もちろん即座に秋山さんや、味方のねこにゃーさんたちが反応します。
こちらの会話も相手にはわかりますが……ねこにゃーさん、ももがーさん、ぴよたんさんたちの練度は圧倒的でした。
【ねこにゃー：ボク、中央突破しますね】
【ももがー：追撃なり～！】
【ぴよたん：了解だっちゃ！】
そんな短い会話をしているうちに、早々に手近な敵車輌へと一斉に攻撃します。
「本当にすごいですよ、ゲーマーチームのみなさんは！」

お三方の後についていきながら、秋山さんが舌を巻きました。
「実際の三式チヌでの練習は、あまり時間がなくてままなりませんでしたが、この腕が活(い)かせれば決勝戦でも頼りになります！」
そうこうしているうちに、ゲーマーチームの三式が、追いすがった一輌を撃破してしまいました。
【ＳｔｕＧⅢ『おりょう』行動不能】
おりょうさんの操っていた、Ⅲ号突撃砲が沈黙します。
【おりょう：ハチの巣に、されてボコボコ、さようなら】
かわりにそんな、辞世の句らしきものを会話に残して行きましたけれど。
あら、まあ。なんだかそこはかとなく、もの悲しいですね。
いいえ……一年生や歴女チームのみなさんだって、わたくしたちと一緒に、戦車道に励んできた仲間です。
やられっぱなし、というわけでもありませんでした。
【アズサ：例の戦略大作戦、実行ー！】
【カリナ：あいあいあいー！】
……作戦？
今のはアズサさんに、カリナさん。
アズサさんは一年生チームのリーダー、澤梓(さわあずさ)さんですね。
そして彼女の合図に応えたのは、一年生の操縦手(そうじゅうしゅ)、阪口桂利奈(さかぐちかりな)さんでした。

二人の車輛は、どこ？　秋山さんがⅣ号を旋回させ、ぐるりと辺りを見渡します。

あ、いました！

大洗女子のとは色こそ少し違いますけど、砲塔二つの特徴的なシルエットのM3リーを、見間違えることはありません。

赤い矢印をくっつけたその二輛ともが、なだらかな峠道を上っていきます。

ちょうど、激戦となっている地帯から逃げる形になるでしょうか？

「追いかけます！」

秋山さんが、ゲーマーチームより近くにいたためでしょう、そう決断しました。

【ぐでーりあん：パンツァー・フォー！】

ついでにノートパソコンのキーに触れて、こちらの判断を味方にも会話で伝えます。

あら、秋山さんって、ゲームで「ぐでーりあん」と名乗ってらっしゃるのですね。

それにしても、二対一です。一輛で追いかけて、大丈夫でしょうか？

あちらはなにやら、策を立てているようですし。

いえ、そこは秋山さんにも考えがあったようです。ふいに、Ⅳ号を停車させました。

なるほど——わたくしも、瞬時に意図を理解します。

同時に砲塔を操作して、望遠画面に切り替えました。

捉えるのは誘うように逃げていく、M3リーの前方の一輛。

「……いい位置取りですっ」

秋山さんが足を止めた理由はすぐにわかりました。

相手が峠を登り切る直前が、真っ直ぐに狙える位置でした。
目前に迫る下り坂に逃げ込めば、こちらの狙いをやり過ごせます。
だからこそ二輛のM3リーは、ひたすら真っ直ぐ進むのみ。
位置を予測して当てることは、難しくありません。
そして、うまく前の車輛に当たれば……。
ズドン!! 砲撃に画面が震えました。
砲弾は……命中!
まるで芍薬のような炎が咲き、わたくしの胸の奥もしびれさせます。
【M3Lee『アズサ』大破】
見事、先頭車輛が動けなくなり、後方についていたもう一輛が急停止します。
その間に、もとの画面に戻るやいなや、秋山さんがⅣ号戦車を走らせました。
相手はやられた戦車が邪魔をして、迂回するしかないようです。
その間に、目標との距離を詰めるのです。
わたくしはもちろん弾を再装塡し、残った車輛をいつでも狙える準備をします。
相手は覚悟を決めて、こちらに向かってくるでしょうか?
峠道を外れ、右に? 左に? それをまずは見極めないと——。
いえ、一輛となったM3リーは、その予想を覆しました。
そのままやられた車輛の脇をすり抜け、さらに逃げます。

「峠の向こうに、ですか⁉　五十鈴殿、なにか仕掛けてくるかもしれません。注意してください！」

秋山さんが追いすがりながらも、そう警告しました。

ええ、わかります。わたくしは隣で静かに頷きました。

それは一年生チームのことを、よく知っているからです。

最初の練習試合こそ、撃たれる恐怖で逃げ出してしまったみなさんですが……今はもう違います。

それぞれが「もう逃げません」とみほさんに誓い、努力を重ねてきたのですから。

なにかある。そう考えるのが自然です。

――だから相手が動きを見せたとき、どうにか反応できました。

黒煙に包まれる、倒したばかりの【アズサ】車輌。

その前まで迫ったⅣ号の視界から、どうしても逃げる【カリナ】車輌が消えます。

ちょうど大破した戦車と煙が、画面いっぱいになったからです。

秋山さんが慎重に、邪魔な車輌の横をすり抜けることにしました。

ところが、同時に異変に気付きます。

ずっと峠道に沿って示されていた、【カリナ】車輌を示す赤い矢印が、急に真横に動いたのです。

えっ？　しまった。逃げていなかった？

「味方車輌の後ろに隠れていたのですか⁉　そのまま、回り込んで……！」

秋山さんが呻（うめ）きます。
そう、擱座（かくざ）した【アズサ】車輛を盾にする形で、待ち伏せしていたのです！
赤い矢印が距離感まで伝えないことを利用しての、戦術でしょうか。
これが一年生の考えた、作戦？
「！　後ろを取る気ですね！　い、五十鈴殿〜！」
「っ！　はい！」
秋山さんが画面を揺らして急制動をかけました。
そのまま――なんと、全力でバックします。
ごごんっ！　となにやら霞草（かすみそう）のごとく小さな火花が散りました。
これは、回り込んできた【カリナ】車輛（しゃりょう）とぶつかった？
画面のすぐ端に、相手戦車の姿がわずかに映りました。
ものすごい近接状態です！　反射的にわたくしは、砲塔（ほうとう）を動かしていました。
望遠（ズーム）状態の画面ではもう、敵車輛の装甲しか見えません。
撃ちます！
……砲撃音が二つ、重なりました。
こちらとあちらが、同時に撃った？　画面が激しく揺さぶられます。
わたくしと秋山（あきやま）さんがパソコンの前で、同時に身じろぎしていました。
やられた？　その、結果は……。

【PzKpfwⅣ『ぐでーりあん』小破】
【M3Lee『カリナ』行動不能】
「ぶは――っ！　あ、あぶなかったですよ、今のは！」
大きく息を吐いたのは、秋山さんでした。
ゲームパッドを握り直して、Ⅳ号戦車をさらに後退させました。
ようやく見えてくるのは煙を噴く、M3リーの姿です。
あわや、というところでしたが、どうにか当たってくれたようです！
【カリナ：きゅうー】
【アズサ：どんまーい！】
先にやられた澤さんが、阪口さんを励ましました。
いえ、本当にぎりぎりでした！　遮蔽物を利用して、この距離でうまく回り込まれれば……近づきすぎているぶんだけ、面食らいます。
事前に相手の会話が見えていなければ、背後を取られて負けていたのは、こちらかもしれませんね。
「まさに、紙一重でした……！」
「ですね！」
わたくしの呟きに、秋山さんも同意しました。
「遮蔽物を使って、戦車で相手の背後を取ろう、だなんて。咄嗟にバックして正解でした！　遮蔽物が横にあったら、こちらの砲身がぶつかって回りきらない可能性もあります

し……あっ、だから『戦略大作戦』なんですね！」
「えっ。なにかご存じなのですか？　秋山さん」
「はい！　戦車の出てくる、泣ける映画の題名なんですよ～。そこでは非力な戦車が、強い敵戦車を倒すために、遮蔽物をうまく使って背後を取って……。きっとそれを参考にしたんですね、一年生は！」
「まあ。そんなことが？」
なるほど。映画からヒントをもらい、明日の決勝戦のために、密かに特訓を積んでいた――ということでしょうか。
今回は、うまく決まりませんでしたが……明日はぜひ、黒森峰女学園相手に成功して欲しいものです！
ただ残念ながら、これで一年生チームは全滅してしまったようですね。
【えるうぃん：この状況はアラスの戦いに似ている！】
いえ、もう残っているのは……エルヴィンさん一人でしょうか？
「あとはポルシェティーガーだけみたいですね～」
なにやら表示をぱぱっと切り替えて、秋山さんが残存勢力を確認しました。
と、思ったら――。
【PzKpfwⅥTiger（P）『えるうぃん』自損】
突然、そんな報告が？　あら、あらら？
そして画面の中央に、『WIN』の文字まで現れました。

どうやらポルシェティーガーは、ゲームの中でも壊れやすい車輌(しゃりょう)のようです。

「あー、やっぱり。いつもこうなっちゃうんですよー、あはは。さすがは迷車なだけあります」

秋山さんが苦笑しました。

確か、とわたくしも思い出します。自動車部チームが扱うことになったポルシェティーガーは、大砲の威力こそすごいものの……そのぶん巨体で、重くって。

「自重で地面にめり込んだり、エンジンが火を噴(ふ)いたりするんですよね？　そこまでゲームで再現しているのですか？」

「それは、もう。だってそこがポルシェティーガーのいいところですから！」

「……。秋山さん、それは、いいところではない気がしますが～」

「⁉　ええええ、ダメですか――っ？」

【えるゔぃん：むしろ支配者の風格だ】

【かえさる：それだ！】

【さえもんざ：それだ！】

【おりょう：それだ！】

――秋山さんの嘆(なげ)きとゲーム画面での歴女チームの言葉が、なぜか妙に重なっていましたけれど。

「ところで五十鈴殿、どうですか？　なにか掴めました？」
「え。……あら、そうでした」
ゲームでの一試合が終わり、秋山さんにそう訊かれて、大事なことを思い出します。
わたくし、砲手としての至らない部分を探るために、こうしてゲームをしたのでした。
ですが、ええと……。つい、小首を傾げてしまいます。
「ど、どうでしょう？」
「五十鈴殿って……しっかりしてるように見えますけど、実はそうでもないですよね……」
「うふ、ふふふ？」
わたくしはもう、笑顔で誤魔化すしかありません。
そうですねえ——。とりあえず正座の足を崩し、後ろを向きました。
そこにあったお盆の上の湯飲みを取ると、残っていたほうじ茶をいただきます。
ゲームに夢中になっていたせいで、すっかり冷めていましたが……それでも人心地つきました。はあ、おいしい～。
なにはともあれ、まずはこうして、お腹の底から落ち着かせないといけません。
お花を活ける前も、わたくしはそうします。
そう、自分の中と向き合うときの儀式のようなものでしょうか。
そして……ようやくわずかに感じた「手応え」を思い出しました。

「そういえば、先ほど一年生に背後を取られかけたとき、なにか見えそうな気がしたのですが」
「？　ああ、さっきの危なかったヤツですね？」
「はい。ひりつくような感覚の中で、こう」
夢中になっていたせいで、今頃になってわたくしは振り返ります。
それはまるで、わずかに開かれた障子の向こうから射す、光のようで。
けれどもあまりに一瞬すぎて、ええと……。
「す、すみません。どうにも、うまく説明できません～」
「ふーむ。単純に、もっと実戦同様の追い込まれ方をしないと、五十鈴殿には見えてこないのかもですね」
それでも秋山さんが、そう解釈してくれました。
あ、なるほど。そういうことなのかもしれませんね？
――だとすると。
「とにかく、もう一戦やってみましょう！」
ちらりと部屋の置き時計を見やって、秋山さんが言いました。
和室の飾り棚にある時計の針は、もうすぐ十時を指すところです。
明日は早朝に学校へ集合なので、どうにかあと一試合くらいはできるでしょうか？
さっそく秋山さんがパソコンを操作して、次の対戦を始めようとなさいました。
いいえ、そのとき。秋山さんがなにかされる前に、画面に変化が？

「⁉　わわわっ、向こうから、こちらのⅣ号に対戦リクエストですか？」
「えっ。どうかしたのですか？　秋山さん」
「あ、はい。まったく別の人から、マッチングのリクエストが入ったんです。……断ることもできますが」
どうしましょう？　と、秋山さんが少し、困ったような顔で見つめてきます。
画面にはその、リクエストしてきた相手の情報が出ているようです。
お一人ではなくて、二人？
「一つは『ブラックプリンス』ですか⁉　うわ、なんてマニアックな……！」
するとお相手の戦車名を見た秋山さんが、目を見張りました。
ブラックプリンス……？　黒い王子様、ですか？
「どういう戦車なのでしょう？」
「あ、はい。イギリスの戦車なんです。確か、エドワード黒太子、だったかな？　その名をもらった、博物館入りしてるほどのレア戦車なんですよ！　現存するのはその一輌だけなので、戦車道の試合に出てくることはありませんが……別名、スーパー・チャーチルとも呼ばれているものです！」
「チャーチル？　あら」
そちらは聞いたことがあります。
確か、聖グロリアーナ女学院との練習試合で、見かけた車輌だったような？
「前面装甲152ミリの重戦車チャーチルを、さらに全長と全幅を増やしたのがブラック

プリンスなんですよ。そして主砲に積むのは17ポンド砲！　固くて強い、すごいヤツです。はい！」
「強い……！」
その言葉を聞いたとたん、わたくしの背筋がぞくり、となにかを感じました。
これは、直感？　強敵であればあるほど、もしかしたら、わたくしの求めるものが見えてくるかもしれないという――？
「秋山さん。承りましょう」
わたくしは、すぐにそう答えていました。
えっ、と最初は驚いた秋山さんですが。
やがて「はい！」と笑顔で了承されました。
「いいですね！　みんなとは別試合になっちゃいますけど、せっかくの機会ですし！　やっちゃいましょう――！」
「ええ！」
「それにしても五十鈴殿って……こういうとき、意外と好戦的と言いますか、えーと」
「あら」
ふふ。わたくしは自然と笑みを返しました。
「それはもう。わたくし、戦車道のおかげでなかなかアクティブになってきたのですよ」
――そんなわけでわたくしたちは、ご指名を受けることにいたしました。

二つのチームにわけられた、新たな参加者リストがずらずらと、パソコンの画面に並びます。
今回はちょうど、十対十ほどの構成となっていました。
そしてその中身は、あら？
ほとんどがもしかして、わたくしたちと同じ、Ⅳ号戦車でしょうか。
「わー、ゲーマーチームや一年生、歴女チームがいないのはわかってましたけど。相手のリクエストのおかげで、敵も味方もⅣ号ばっかりですよ！」
「こちらは、秋山（あきやま）さんも知らない方々ばかりなんですよね？」
「はい。見知らぬ人とも戦車愛で繋（つな）がれる……それがオンラインゲームＷＯＰの良さですから！　それにⅣ号戦車は名戦車ですし、多くの人が愛用してるんです。Ａ型からＢ、Ｃ、Ｄ、Ｅ、Ｆ、Ｆ２、Ｇ、ＨにＪ型と、バリエーションも豊富なのが魅力ですし～。あ、もちろんうちのマークⅣスペシャルが、ワタシ的には一番ですけどね。えへへ」
「違うのは、先ほどのブラックプリンス戦車くらいでしょうか？」
わたくしはめざとく、リストの中からその名前を見つけました。
いえ、一つだけⅣ号戦車ではないのが、『Ｂｌａｃｋ Ｐｒｉｎｃｅ（Ａ４３）』とありましたので。
秋山さんもそれをすぐに確認されます。
「ですね！　……ちょうどワタシたちとは別のチームです！」
「敵、ということですか？　まあ」

それは、よかった。わたくしは脇に置いていたゲームパッドを手に取りました。
ええ、もう新たな試合が始まります。
画面が峠の風景に切り替わり、スタートまでのカウントダウンが始まりました。
同時に聞こえてくるのは、Ⅳ号戦車のエンジン音です。
その鼓動とともに、わたくしの胸も高まりました。相手が強ければ強いほど、きっと
——その向こうに、見えてくるものが必ずあるはずですから。
「いきます！　パンツァー・フォー！」
カウントゼロで、秋山さんが意気揚々と、ゲームパッドのボタンを押し込みます。
履帯が峠道を踏みしめて、画面の中のⅣ号戦車が走り出しました。
さて……わたくしも集中します。
Ⅳ号が一気に峠を登り切り、前回同様、多くの戦車と鉢合わせする中央地帯へと向かいました。
敵の姿を見つければ、すぐにでも撃てるように、集中して画面の隅々まで見ていると
——。あら？
「！　砲撃音？　もう交戦しています！」
ゲーム内から聞こえる砲弾の音に、秋山さんが慌てました。
いえ、なにより驚かされたのは、画面上部の表示です！
【PzKpfwⅣ『ゆさ』大破】
【PzKpfwⅣ『ユズモト』大破】

【PzKpfwⅣ『nakasuga』行動不能】

なんですか？　あっという間に、何輌(りょう)もの戦車がやられている⁉

これは……。

【Darjee：こんなジョークを知ってる？　この世で一番いやな作戦は？　それはロシア軍が立てて、アメリカ軍が命令して、イギリス軍が実行する作戦】

連続撃破の締めくくりのように、そんな会話文が現れました。えっ？

「Dar……だーじー？　いえ、雛菊(デイジー)とでもお読みするのですか？　まさかこの方が！」

「それっぽいですよ！　あらかじめこんな長文を仕込んでいるなんて、もともとかなりやり込んでいるプレイヤーに違いありません！　それにっ」

ぱっ、と秋山さんが画面に、残存リストを呼び出しました。

現れたそこには生き残っている両チームの戦車名と、それを操るプレイヤー名が載っています。

デイジーさんとやらは、まさか……。

わたくしもこのときには、薄々勘付(かんづ)いていました。

『Darjee：Black Prince（A43）』

敵チームの戦車の中に、その名が確かにありました。

やっぱり！

おそらくわたくしと同じ気持ちで、隣の秋山さんがごくり、と息を呑(の)みます。

「じゃあブラックプリンスが、こちらを撃破しまくってる、ってことですかあ⁉　確かに

チャーチルの足回りは、峠の登坂能力に優れてますから、このマップではもってこいかもしれませんが……それにしたって！」

強すぎる。きっと秋山さんは、そう言いたかったのでしょう。

けれどもその間にも次々に、新たな撃破報告が連なりました。

そしてそのたび、またもやデイジーさんの勝ち誇った言葉が刻まれます。

【Darjee：こんなジョークを知ってる？　イギリス人は恋愛と戦争では手段を選ばない】

【Darjee：こんなジョークを知ってる？　飛行機が欠航になったとき、イタリア人はまず客室乗務員を口説き、日本人は上司に電話し、そして、イギリス人は紅茶を飲んでから考える】

「……て、哲学的です！」

わたくしはつい、感心してしまいました。

「いえ、そういうこと言ってる場合じゃないですよー！　やばいですっ、もうワタシたちのチームは二輌しか残ってないですよ⁉」

「え、ええっ？」

そんな！　秋山さんが切り替えたチームリストを見て、わたくしもようやく最悪の状況に気付きます。

そこにはまるまる十輌残った敵側と――八輌もやられてしまい、二輌のⅣ号戦車しかないこちらが表示されていました。

——いえ。ぞわり、とわたくしの背中になにやら、這い上がるものがありました。

これ、です。

こうでなければきっと、わたくしは……！

「！　撃ちます！」

慎重に前進を続けるⅣ号の視界に、ちらりと赤い矢印が飛び込んで来ました。

まだ、かなり遠くにいますが、いけます！

わたくしはすぐさま望遠に切り替えました。

とうに身についた感覚が、大丈夫、と耳元で囁きます。

ですから、わたくしは迷いません。

慌てて秋山さんが停車させ、ブレていた照準が安定した直後——。

ズドンッ‼

「‼　あの距離を、一発ですかっ？」

一撃で仕留めたのを見た秋山さんが、横で感嘆の声を上げました。

しかしつぼみのような竜胆のごとく、火花が大きく咲く前に、もうわたくしは次の標的に切り替えています。

当たった手応えは、不思議と撃った瞬間に感じていましたから。

ああ、これは……。まさに、実戦のときと同じです！

緊張感がわたくしを、機械のごとく動かします。

砲弾を再装塡し、砲塔を調整、撃つ！
「集中すれば、止まって見えます！」
それは、華道と同じです。
お花をまるで最初から決まっていた位置に、活けるように。
――二発目も、最初に当てた車輛の近くにいた敵に、見事ヒットしました。
「さあ、秋山さん。次です！」
「は、はい〜〜〜！」
望遠画面から視界が戻ると、すぐさま秋山さんがⅣ号を駆りました。
ええ、まだ敵はたくさん残っているのですから……！

†　†

結局わたくしたちの一輛だけで、敵の六輛を撃破しました。
こちらは幸い、残ったもう一輛の味方も、まだやられていないようです。
「これで四対二ですね」
秋山さんが冷静に数えます。
それでもわたくしたちは、少しも気を抜いていませんでした。過半数の敵を倒したものの、その中にあのブラックプリンスは含まれていないのですから。

それに――ついにデイジーさんが、仕掛けてきました！

【Ｄａｒｊｅｅ：サンドイッチはね、パンよりも中のキュウリが一番おいしいの。挟まれた方がいい味出すのよ】

「っ！　今のって、作戦の指示ですよね⁉」

秋山さんがそう解読します。

ええ、とわたくしも頷きました。これは……。

「こちらを挟み撃ちする、ということですか？」

「挟撃ですね！　……ま、まずいですよ！　こっちは他に一輌しか仲間がいない状態ですからっ」

助けを呼べない？　瞬時にわたくしも理解します。

敵の四輌に囲まれれば、停まって狙いを付けることもままなりません！

わたくしの命中率も、走りながらの砲撃では著しく下がりますし――。

もちろん秋山さんも、急いで対応しようとします。

囲まれる前に逃げるのが、最善でしょうか？

そのためにもⅣ号戦車の視界が、ぐるりと周囲を見渡しました。

秋山さんがその場で旋回させたようです。

ですが、わかったのは……もう一方向から敵が、こちらに向かってきているということでした。

これは、逃げ切れない？

【Ｄａｒｊｅｅ：言うなればフィッシュ＆チップス作戦！　アゲアゲという事よ】
デイジーさんたら余裕なのか、そんな言葉まで表示します。
「どうしますか？」
わたくしは砲手として、車長である秋山さんの指示を仰ぎました。
秋山さんは、さすがに悩んで、隣でわしゃわしゃ髪の毛を掻き回しました。
けれども、やがて心を決めます。
「あの、いいですか？　五十鈴殿」
「？　なんでしょう？」
「そのー……西住殿なら、きっとこんなとき、あえて打って出ると思うんですよね。だから、ええと」
「ふふ。なら」
わたくしが迷うまでもありません。
「やりましょう、秋山さん！」
「！　わかりましたっ！　……飛び込みます‼」
秋山さんがⅣ号を、敵に向かって真っ直ぐに走らせました。
木々の隙間をジグザグに疾駆しながら、赤い矢印を目指します。
その先にいたのは二輌！
ドン、ドン！　敵が足を止め、撃ってきました。
瞬間、秋山さんがⅣ号を急停止させます。

ええ、相手が再装填する前の、この一瞬だけが――チャンスです！
ごばっ！　と間近に着弾し、画面内に土煙が上がりました。
わたくしの心臓も跳ね上がります。
「死中に活を……！」
望遠画面で捉えた瞬間、指が動きました。
閃光が、ぱっと桜花のごとく咲きます。
命中です！
「これで敵は三輌です！」
秋山さんがⅣ号を発進させて、相手の砲撃をかわしました。
とりあえず今は、正面に残るあと一輌を叩き、突破口をつくります！
でも、そのとき――。
【Ｄａｒｊｅｅ：こんなジョークを知ってる？　アメリカの大統領が自慢したそうよ。我が国には何でもあるって。そうしたら外国の記者が質問したのですって。地獄とのホットラインもですか？　って】
「！　ま、まさか、もうですか――!?」
わあ！　と秋山さんが慌ててました。
デイジーさん？　くるりと反転するⅣ号が、画面内に新たな敵を捉えます。
一輌の敵Ⅳ号をつれたのは、黒に近い濃い緑色で塗られた、大型の戦車です。

あれが、ブラックプリンス!?
その速度は、速いです！
荒れた峠道をものともせず、ぐいぐいこちらに近づいてきます。
しかも……不用意に撃ってはきません。
三対一という状況下で、あえてこちらの動きを読もうとしている？
いえ、まるで獲物を追い込むかのように、機が熟すのを待っているのです。
「くっ！」
秋山さんが必死になって、前後に挟まれた状況下で、Ⅳ号戦車を操ります。
ところが、わたくしはなにもできません。
秋山さんが停車させない限り、撃っても狙いを外すだけですから。
――撃つタイミングがないのです！
「フェイクを混ぜて、誘ってみます！」
そう叫び、秋山さんがわざとⅣ号を急停車させました。
そして、そこを狙おうとする敵の出鼻をくじくように、間髪入れず再発進させました。
その動きにつられて、Ⅳ号の近くに着弾します。
が、それはブラックプリンスからのものではありませんでした。
他の、二輌の敵Ⅳ号だけのようです。これは……！
「ダメです、あのブラックプリンスは、戦い方を熟知してます！　挑発に乗って、迂闊な行動を取りませーん！」

「なら、今度はわたくしが！」
移動中にもかかわらず、わたくしは望遠に切り替え、ブラックプリンスを狙ってみました。当たれば儲けもの、といったところです。
いえ、当てます！
はあーっ、と短く息を吐きながら、集中して。
ズドンッ‼
……えっ。弾かれた⁉
「無理です、五十鈴殿～！　相手の前面装甲が分厚すぎて、正面からでは射貫けません！　それを知ってて向こうは堂々と構えているんです！」
【Ｄａｒｊｅｅ：こんなジョークを知ってる？　あるロシアの政治家が元首になって言ったの。これでもうわたしは終わりだって。ロシアでは弱い方がいつも革命を起こすからよ。この試合でも革命が起きるかしら？】
秋山さんの解説どおり、ブラックプリンスを操るデイジーさんは、余裕綽々のようです。
そんな……！
「回り込んで、側面か後方から叩くしかありませんけれど、この状況では」
できません！　と秋山さんが焦ります。
わたくしも――歯がゆく、ゲームパッドを握るのみです。
なにも、できない？　このまま、やがて討たれるのを待つのみ？

ぞわぞわと背中で鳥肌が立ち、汗が手の中に滲みました。
まさに実戦さながらの、追い込まれ様です！
なのに……まだ、見えていません。わたくしの「足りない」なにかが——。
いいえ、至らないからこそ、今こうしてなにもできずにいるのです！
どうして？
……それは戦車道を始めるまでの、行き詰まったわたくしの活け花のよう。
そう、そっくりです。
わたくしのやれることはすべて出し尽くしているはずなのに、「これ以上」がないのです。
いったい、どうすればいいのでしょう？
「なにもできないのは、わたくしが劣っているから？　なんです？　それがわかれば、今だってきっと！」
窮地を打破する答えが見つかるはず、なのにっ。
でも、ダメです。わたくしにも、秋山さんにもどうすることもできなくて、敵の包囲網がじわじわ狭まるばかりです。
かわし続けてきた秋山さんの操縦にも、限界が訪れました。
がん！　と弾がⅣ号に当たり、跳ねました！
【PzKpfwⅣ『ぐでーりあん』小破】

「う、うわぁ！　やばいです、この距離は！　遮蔽物（しゃへいぶつ）もありませんから、身を隠すこともできませーん‼」

がくがくと揺れる画面に、秋山さんが嘆（なげ）きます。

前方からブラックプリンスと、敵Ⅳ号が一輛（りょう）。

さらに後方に、もう一輛。

本来ならばまず、後ろの一輛を倒し、挟まれている状況を打破すべきでしょう。

けれども、それはできません。

迂闊（うかつ）に後ろに意識を向ければ、その隙をあのデイジーさんが逃すはずないですから。

せめてなにか、きっかけさえあれば……！

——そのときでした。

【PzKpfwⅣ『菊代』行動不能】

えっ？　ふいに現れたそんな報告に、わたくしも秋山（あきやま）さんも一瞬言葉を失います。

一輛（りょう）、やられた？

それは……このときになってわたくしは、そういえば味方に一輛残っていたのを思い出しました。まさか、そちらが犠牲に？

いえ——違いました。

予想はまるで逆だったのです。

突如、脇から緑色の矢印が現れました。

……味方の、Ⅳ号？　生きていたのですか⁉
なら、先ほどの撃破報告は――！
「わ、わあ！　残ってた味方が、後方の敵を片付けてくれたんですかあっ⁉」
秋山さんが前のめりになってはしゃぎます。
そうです、わたくしたちが挟撃されているのを知り、助けにきてくれたのでしょう！
「！　これで二対二、ですね！」
きらり、と希望が見えました。
相手も動揺したのでしょう。敵Ⅳ号が、慌てて身を翻しました。
距離を取ろうと、バックに転じたのです。
それは大きな隙でした。見逃しません！
「秋山さん！」
「あっ！　は、はい！」
わたくしの指示に合わせて、秋山さんが逃げる敵Ⅳ号に、車体を真っ直ぐ向けました。
砲塔の左右を調整する必要はありません。
望遠に切り替えたときには、わたくしはシュトリヒを読み、距離を掴んでわずかに上下をいじるのみ。
ズドン‼
撃った瞬間、秋山さんがⅣ号を動かします。
同時に、ばっ、と砂煙が上がりました！

こちらの砲撃音とぴたり重ねて撃ってきた、ブラックプリンスです！
わたくしたちは、敵Ⅳ号が大破した報告に目をやる暇もありません。
「これで一対一、ワタシたちがついに数で上回った、のにっ……！」
デイジーさんはまったく動じていない様子でした。
ブラックプリンスは相変わらず、こちらに詰め寄ってきていたのです。
【Ｄａｒｊｅｅ：土壇場を乗り切るのは勇猛さじゃない。冷静な計算の上に立った捨て身の精神、って言うわ】
この状況下でもデイジーさんは、語る余裕まで見せます。
絶対の自信の源は、きっと車輛の性能と、それを操る自身の腕への信頼でしょうか？
わたくしは一瞬、気圧されました。
いえ、秋山さんもそうでしょう。
Ⅳ号に回避行動をとらせたまま、ブラックプリンスと一定距離を保とうとします。
ですが……そこに飛び込んでいく一輛がありました。
味方のⅣ号戦車です！
でもあのブラックプリンスに、真正面から⁉
「危ない！」
「なんて無茶なっ！　撃ってくれと言わんばかりです！」
わたくしも秋山さんも、まったく同じ感想でした。
けれども――当たらない？

狙いを定めたブラックプリンスの砲撃を、鮮やかな動きで機敏に避けた⁉
すごいです！
「な、なんて動きなのですか？　あのⅣ号は！」
「峠の傾斜も利用しての、横滑り気味のターン？　あんなの、真似できませんよー！　普通は履帯がもちませーん！」
「いえ、なによりすごいのは、撃たれるタイミングがわかってた感じです！」
どうやって今のを見極めたのでしょう？
――あっ。わたくしは、はっとしました。
避ける前に、ブラックプリンスの砲塔が動いたのを見ていたからです。
あれはずっと、わたくしたちの方を狙っていたもの。
それを咄嗟にデイジーさんが、もう一輌のⅣ号へと切り替えて……。
まさかその、わずかな反応の遅れを読んで？
だからこそ大胆にもこうして、突っ込むことができたのですか⁉
「これは……！」
そして味方のⅣ号はついに、ブラックプリンスに肉薄しました。
互いの砲塔が旋回し、走りながらも狙いを付けます。
どちらが先に撃ち込むのか。
どちらの砲撃が当たるのか――。
と思ったときには、Ⅳ号がズドンと一発撃っていました。やった⁉

って、あ、あら？
「まあ！」
わたくしは息を呑みます。
その一撃はあまりにも、大外れだったからです。
「ええ——!?」
秋山さんもさすがに目を丸くしました。
だって、その。ブラックプリンスを掠めるどころか……まったく別方向にいる、わたくしたちのすぐ前に着弾し、砂煙が上がったのですもの！
「下手すぎでしょう！　そ、操縦はバッグンに巧いのに、なんで〰〰〰〰！」
……かわりにもう一発、砲撃音が轟きました。
【PzKpfwⅣ『レドコ』中破】
味方のⅣ号戦車の装甲が、ぱっ、と弾け飛びました。
ブラックプリンスの砲弾が当たったのです！
どうにかまだ動けてはいますが、速度が一気に落ちました。
足回りをやられたのでしょうか？
もちろんデイジーさんはとどめを刺そうと、ブラックプリンスの砲塔を動かしました。
窮地？　いえ、この瞬間は……！
「秋山さんっ、いけます！」

「へっ？　……あ！　は、はいー！」
わたくしの意図を汲んで、秋山さんがⅣ号を動かしました。
目の前に立ち上る砂煙を盾に、回り込みます。
「この位置から、やってみます！」
そのときにはわたくしは、望遠に画面を切り替えていました。
「ここからですか⁉」
秋山さんがわたわたしつつも、Ⅳ号を停車させます。
戸惑うのも無理はありません。ちょうど砂煙越しに敵を狙う位置取りです。
視界も悪く……また、ブラックプリンスの側面が十分見えているわけでもありません。
それでも味方のⅣ号を狙い、ブラックプリンスの砲塔がきれいに横を向いていました。
そう。この一瞬しかもう、隙はないのです！　――だから。
ズドオオンッ‼
二つの砲撃音が、一つになって響きました。
味方のⅣ号が大破します。でも同時に……わたくしの撃った一発が、ブラックプリンスに真っ赤な牡丹を咲かせていました。
胸がじんじん震えます。
それは手応えを伝えるもの。
やがて、味方のⅣ号の大破報告に続いて、画面の上に現れた文字は――。
【Ｂｌａｃｋ　Ｐｒｉｎｃｅ（Ａ４３）『Ｄａｒｊｅｅ』行動不能】

やった……。
やりました！　わたくしたち！　勝利です！
【Ｄａｒｊｅｅ：熱い紅茶だって、凍る事もあるのよ。何が起こるかわからないってこと】
【Ｄａｒｊｅｅ：紅茶が天から降ってくるような奇跡が起きたわね】
デイジーさんのなにやら難しい言葉が、わたくしたちを祝福しました。
「……いやあ。すごかった、ですね」
「ええ……」
画面に現れた『ＷＩＮ』の文字を眺めながら、わたくしも秋山(あきやま)さんも、しばし放心状態でした。
それだけ激しい戦いだった、ということです。
デイジーさんは本当に、強敵でした。
【Ｄａｒｊｅｅ：あなたたちにイギリスのことわざを贈るわ。四本足の馬でさえつまづく。強さも、勝利も、永遠じゃないわ】
【Ｄａｒｊｅｅ：オール・イズ・フェア・イン・ラブ・アンド・ウォー。恋と戦いはあらゆる事が正当化されるのよ】
最後にそんな言葉まで、こちらに残していかれます。
わたくしはつい、その文章に見とれました。

これは、事前に仕込んであるものだそうですが……デイジーさんほど強くても、負けた後まで想定して、書いていたということでしょう。
それほど、戦車道にはなにが起きるかわかりません。
そう、千差万別なのです——。
「あ……」
そしてやっと、わたくしも気付きました。
ありがとうございます、デイジーさん。今の戦闘のおかげです。
「……。わかった、気がします。わたくしの足りなかったもの」
「？　五十鈴殿？」
「えっ、ほ、本当ですか⁉　それって！」
「いえ。正確には……わたくしの『誤り』がわかった、ということですが」
「誤り、ですか？」
へ？　と秋山さんがわたくしを見て、瞬きをしました。
そんな彼女を見つめながら、ついくすりと微笑んでしまいます。……だって。
「ほんとわたくしは、どこか抜けていますね。戦車道は一人ではなくて、こうして誰かと一緒に戦っているのだと、そんな当たり前のことに今頃気付かされるのですから」
そう——たとえば、秋山さんと。
それに明日は沙織さん、冷泉さん、みほさん……もっとたくさんの、大洗女子戦車道チームのみなさんと！

「わたくし一人では無理なことも、仲間がいれば、こうして勝利を掴めるのです」
「あっ、なるほど。たとえば今回みたく、あの『レドコ』さんの戦車が、攻撃の隙をつくってくれたようにですね！」
「はい」
そのとおりです。わたくしはそのまま、ふと手を伸ばしました。
ノートパソコンの横にあるのは、飾っていた活け花です。
独りよがりな、わたくし一人だけでの到達点。
けれども、網戸にした窓から夜風がそよいでいました。
扇風機の風ではなく、自然のもたらすそれを受け、活け花の葉や花びらがわずかにそよぎます。
差し込む月明かりは、その陰影をわずかに淡く照らしていました。
型にはめられた活け花を、わたくしは目指していたわけではありません。たとえばこうして風を受け、月光の中で表情を変えることも含めて、楽しめば素敵じゃないですか。
それこそ、わたくしの求める無限の奥深さ――。
「面白いです。お花も、戦車道も」
花に触れながら、わたくしは改めて思いました。
いつしか胸が震えていました。それは期待？
明日の決勝戦で、わたくしたちはどんな彩りを見せられるのでしょう？
それは明日のお楽しみ、ですね。うふふ。

「さて。では秋山さん、そろそろ休みませんか？　……時間も頃合いですし」
「あっ、もう十一時ですね！」
わたくしとともに時計で時刻を確認し、秋山さんが頷きました。
では、と畳から立ち上がり、わたくしが向かうのは……。
「お風呂、入れますね？　寝間着代わりにわたくしの浴衣、でよろしいですか？」
「え。あっ、はい！　十分ですよう～！　いいんですか、お借りしても？」
「もちろんです。遠慮なさらないでくださいね」
台所からお風呂場に行き、湯船に栓をしてから、給湯器のスイッチを入れました。
実家と違い薪ではなく、あとは全自動なので楽ですね！
それから和室に戻ってきて、わたくしは押し入れを開け、漆塗りの乱れ箱にあった木綿の浴衣を二着出してきます。夏の夜はこれに限りますもの。
と、そのとき――ふいにあることを思いつきました。
「そうです、秋山さん。お風呂、ご一緒しますか？」
「はい？　えっ、五十鈴殿？」
「ちょっと狭いですけれど、どうにか二人で入れますよ？　順番に入って就寝が遅くなって、明日に差し支えてもいけませんし。あら、とってもいい考えです！　ね？」
「えええ？　や、でも……ね、寝間着まで一緒で、まさかのパジャマパーティー気分なのに。そ、それ以上のことを⁉」

「？　どちらかと言えば、浴衣パーティーですけれど～。それにお風呂はほら、いつも学校の大浴場でご一緒してますし？」

「そうでした！　不肖、ワタシ秋山優花里、五十鈴殿のお背中流させていただきます！」

なんだか頬を真っ赤にして、秋山さんが敬礼までしてきました。あらあら。

そしてすぐにそそくさと、お風呂に入る準備をします。傍らに押しやっていたリュックから、替えの下着を出してきました。

「って、ＰＣ点けっぱなしでした！　すみませーん、すぐ電源落としておきますね？」

「あら。お願いしますね」

「はい！」

ＷＯＰの画面のままだったパソコンに、秋山さんが取り付きました。

「それにしても、デイジーさん、でしたっけ？　あんなに強い人がいたなんて、これだからゲームといえど、ＷＯＰはやめられません！」

電源を切り、ゲームパッドを片付けながら秋山さんが呟きます。

ただし、「そう言えば」と少し首を捻りました。

「あの『レドコ』さんも、操縦はすごかったですね。撃つのは不慣れなようでしたけど。動きだけ見れば、あれってまるで……」

「？　なんですか？」

「え。いいえ、まあ、思い過ごしですね。きっと」

なんでもありません、と秋山さんは苦笑しました。
そこに給湯器からの『およそあと五分でお風呂には入れます♪』という音声が聞こえてきました。
まあ、ほんとに便利になったものです。わたくしも押し入れに収まった桐箪笥から、着替えの下着を選びます。
さて、ゆっくりと体と心を湯船で休めて……明日に備えることにしましょう！
わたくしは自ずと、他のみなさんのことに思いを馳せます。
そう、わたくしは一人ではないのですから。
——みなさんもそろそろ、もうお休みの頃合いでしょうか？

3　早く寝たいと思っているが……。

「……ぜんっぜん、眠くならないな」
ゲームオーバー――。
その文字が躍るパソコンのモニターを前に、私はあくび一つ出なかった。
オンラインでプレイする、『WOP』とかいう戦車ゲームの画面だ。
残念ながら、私の動かしていたⅣ号戦車は負けてしまったが……属していたチーム自体は勝ったようなので、まあいいか。
それに、別にゲームで勝つことが目的だったわけじゃないし。
私――冷泉麻子（れいぜいまこ）が、学校の合宿施設の共有スペースにあるパソコンで、わざわざゲームに興じていたのは……。
「ちょっと……なんであなた、そんなに元気なのよ⁉」
メッシュ椅子（チェア）をくっつけ合って、一緒にキーボードで戦車を動かしていたソド子が、疲れた顔をこっちに向けた。
いや、操縦（そうじゅう）は私が。砲撃をこの、おかっぱ頭の女子風紀委員が担当したのだ。
「あなたは操縦手なんだから、操縦だけしてればいいの。このゲームは初めてなんだし。いい？　けっこう難しいんだからね！」
などと先輩風を吹かしていたが、まさか。
「あそこで外すとは。難しいんじゃなくて、単にソド子が下手だっただけじゃ」

「……。なによ？　そ、それが『寝坊対策に付き合ってくれ』って、わたしに頼んだ人の台詞（せりふ）!?」
「はいはい」
そうだった。
それでこうして、ソド子が付き合ってくれているのだ。

なにしろ、明日は決勝戦だからな。
負ければ……この大洗女子学園（おおあらいじょしがくえん）は、廃校が決定となるようだ。それは避けたい。
いや、それ以前に私には、単位が足りないという問題がある。成績は申し分ないのだが、朝に弱いのが災いして、午前中の授業にほとんど出られていないからな。
その起死回生の策として、戦車道を履修（りしゅう）して、特典の「単位数三倍」にすがるしかなかったわけだ。
だからどうしても、明日は万全の態勢で臨みたいのだ。
幸い決勝戦は明日の昼前で、その頃には目が覚めているはずだが、集合時間は無情にも朝の五時半だった。
ば、馬鹿な……。たまにある朝練の時間より早いじゃないか。
改めて考えただけで、ぞっとする。
これでも最近は、早起きできるようにはなった方なのだが。
だが万が一を考えて、「早く起きられないなら、早く寝ればいい」作戦を実行すること

になったわけだ。
……その相談をついソド子にしてしまったのは、もしかして失策だったかもしれないが、な。
「学校が集合場所になってるから、ぎりぎりまで寝坊したって、ここならどうにか間に合うじゃない？」
それでも、そう言ったソド子が事前に、この合宿施設を押さえてくれたことには感謝する。
そして彼女は、私を早く就寝させるために「疲れさせる」作戦に出たのだ。
合宿施設の大浴場に早々に入り、さっぱりした。
温まった体を維持するために、寝間着代わりの体育ジャージに着替え、ぬくぬくとした。
首回りにはタオルまで巻いたし、靴下はおばぁの編んでくれた厚手のを履いてるし、ソド子の指示通りにしたぞ。さらに頭を疲れさせるために、たまたま共有スペースにあったパソコンで、WOPとやらをプレイしたわけだ。
ちっとも、効果は出てないけどな……。
むしろ同じ恰好をしてたソド子の方が、椅子に座ったまま、ふらりと眠ってしまいそうだった。
「って、ダメ！　ダメよ、わたしー！　先に寝ちゃぁあ！　ふ、風紀委員の名にかけて〰〰

〰〰〰！」
「いや。風紀委員でも眠いときは眠いだろう？」
無茶を言うな。私はついツッコミを入れるが。
「いいえ！　秩序を守るのがわたしの役目だもの！」
ダメだ。ソド子ときたら、聞き入れやしない。
「たとえそれが、入学以来ずっと手を焼かされてきた、万年遅刻魔のためであってもー！」
はいはい。いや、ありがたく思ってるぞ、ソド子。
でも。
「心意気は買う。けど私は、少しも眠くならないぞ。ソド子」
「……うっ。って、だからわたしの名前は園みどり子なんだってば！　このレマ子！」
うー、とソド子がぺちぺち頰を張りながら、私の名前を短縮した。
そんなに嫌か？　私は別に、麻子でもレマ子でも構わないが。
だからWOPのプレイヤー名は、ソド子＋レマ子で『レドコ』にしたのだしな。
「というか……おかしいのはあなたなのよ！　ほら！」
「ん？　あ……」
「ゴモヨやパゾ美なんか、とっくにぶっ倒れてるじゃない⁉」
――無駄に広い、共有スペース。ベッドの置かれた個室と繫がるこの場所には、パソコンの置かれたブースの他に、テーブルやソファがいくつか並んでいた。

そのソファの一つで、一枚の毛布にくるまって寝ていたのは、ソド子と同じ風紀委員の女子たちだった。
ソド子の後輩に当たる、後藤なんとかさんと金春なんとか……えーと、ゴモヨさんとパゾ美さんの二人だ。うむ。
風紀委員は似たようなおかっぱ頭をしてるから、「ソド子より髪の長いの」がゴモヨさんで、「短いの」がパゾ美さんだと覚えている。
その二人だが、別に私が呼んだわけじゃない。ソド子が無理矢理、巻き込んだのだ。
風紀委員チームとして結束は当然、とか言ってたが。
ジャージ姿で眠っている二人の手には、数学の参考書と、紐の付いた五円玉が握られていた。
参考書の朗読と、催眠術を使って私を眠らそうとしたのだが――参考書の中身を聞かされたところで、なんだというのだろう？　聞けば答えなんてすぐにわかるし、それが眠くなるのにどう繋がるのか、私にはさっぱりだ。
いや、朗読をしていたゴモヨさん本人には効果があったみたいだが。
「ダメです！　あ、頭がもう限界――!?」
とか言って、いきなりソファにダイブしたからな。
あと、五円玉をぶらぶらさせたパゾ美さんの方ときたら。
「ほーら、あなたはだんだん眠くなる……眠く……。ぐぅ」
などと、勝手に催眠術にかかって眠ってしまった。

……うらやましいくらいだ。二人とも、こんなに簡単に寝ることができるだなんて。

私は、どうしてこんな体質なのだろうな。

朝にはとことん弱いくせに、夜になればなるほど冴えていく一方だ。

いったい、いつ頃からだったか……。そんなことを思いながら共有スペースの壁掛け時計を見上げれば、時刻は午後十一時を回ろうとしていた。

普段の私にとっては、宵の口にも入りはしないが。

「ええい！　ゴモヨもパゾ美も頼りにならないし……こーなったら、作戦変更よ！」

おかっぱ頭をぶんぶん振って、ソド子がパソコンのキーを叩くようにシャットダウン作業をした。

そして勢いよく立ち上がり、私をぐい、と強く引っ張る。

「頭を使ってダメなのなら、次の手はもうこれしかないわ！　見てなさい、冷泉さん。ふっふっふ」

「どうする気だ？」

「ふふん。当ててみなさい。……このわたしに相談したことを、後悔させてやるわ！」

「次は体を動かす作戦にでも出るのか？　ソド子」

「！　なっ、なんでわかったのよ⁉」

ずばり言い当てられて、ソド子が激しく動揺した。

いや、少し考えれば、普通にわかることだろう。

まあ私としては、当然ソド子の提案に従うのみだ。椅子から降りて、その場で軽くスト

レッチをしてみせた。
「で、どんな運動をするんだ？」

†

大洗女子学園のある学園艦は、全長七・六キロメートルもある。
これでも学園艦としては小型の部類に属するのだが……人口は三万人程度だから、けっして狭くはないだろう。
もちろんその中央にある校舎周辺の敷地も、十分な広さがあった。普通科が三つに、被服科と商業科の校舎があり、その中央を長いメインストリートが貫いている。
この夜中でも防犯のためか、外灯の明かりが点されており、真っ直ぐ伸びるアスファルトを照らしていた。
――そこを私は走っていた。
運動靴の足音が心地よく、潮風のそよぐ夜の学校に響く。
運動はできる方だ。女子の中でも背が低いから、体格のいい者には敵わないがな。
また、午前中は眠くて動きたくないので、体育の成績はそういいわけじゃない。
戦車道を始めてからは、少しだけマシにはなってきたが……それでも朝には、やはり弱い。大洗女子に夜間コースがあれば、そっちに入っていたのにな。
……工業科や水産科、農業科など他にもいろいろあるのだけれど、残念ながら夜限定の

科はなかった。
　学園艦を動かしている船舶科は、ときどき夜間授業があるそうだが——八時間の三交代制らしいので、早朝の授業などもあるらしい。
　船舶科に行った中学の友人が「きついよー」と言っていた。
　私には……とても無理だ。
　などということを考えながら走っていると、前からソド子の姿が見えてきた。
　いや、最初は一緒に走っていたのだが。いつしか引き離してしまい、メインストリートを端っこで折り返し、鉢合わせの恰好になったみたいだ。
「ちょっと、あなた……は、速い、わよ」
　ぜはぜは肩で息をしながら、ソド子が必死に話しかけてくる。
「な、なんなの。待ち、なさい、よ……！」
　そのまま横をすれ違うところだったが、さすがに私は足を止めた。
「？　サボらないように見張ってあげる、と勝手に追走してきたのはソド子だぞ？」
　別に、一緒に走る必要はなかったのに。
　まったく非論理的な行動だな、うん。
　でもそこが、ソド子の面白いところでもあるが——。
「……。どっ、どうせわたしは体力もない、わよ。あなたほど運動も、でき、ないし」
　しかし呼吸を整えながら、ソド子がふいにそう言った。
　私を真っ直ぐ睨んでくる。

いや……違った。どうやら、怒っているわけではないようだ。
泣いて、いるのか？
一瞬、どきりとさせられた。
外灯の明かりを受けて、きらりと光るものが、彼女の頬を伝ったのだ。
けれどもそれを確認する前に、ソド子は手の甲で擦ってしまう。
「それでも、曲げないわ、よ。わたしは、風紀委員なんだ、から。……わたしが見つけた、自分の役に立てる場所、なんですものっ」
「ソド子？」
「……だからあなたは、ソド子ってやめなさい！　わたしの名前は、園みどり子なの――っ！」
ようやく深呼吸してから、ソド子は今度こそ怒った。
さっきのは汗、だったのだろうか。そんなことを私は冷静に考えていた。
――だけど、そのとき。
ぽんっ。なにかの音が、遠くで聞こえたような気がした。
なんだ？　突然の物音に、思わず敏感に振り向く。
「？　なによ、冷泉さん！　ちゃんとわたしの目を見なさい、目を！　人と話をするときはねえ～」
「シッ」
「はい？　なにが……」

「聞こえなかったのか、今の」
待て。私だけか？　耳にしたのは。
そう思ったとき、ざざっと全身から血の気が引いた。
ジョギングで火照(ほて)っていた体が、一気に冷える。
考えてみれば……ここは、夜の学校だ。それもメインストリートから見える、普通科校舎につけられた時計に目をやれば、あと三十分ほどで深夜零時だった。
あらかじめ生徒会から許可を取っている私たち以外、夜間の立ち入りはないはず。
と、いうことは――私やソド子の他には、この無駄に広い敷地内に誰もいないはず、なのだが。
しかし、またもや物音がした。
びくっ！　と今度はソド子が反応した。
ああ……。どうやら、私の勘違いではなかったようだぞ。
「な、なんの音よ？」
「……」
「ちょっ、震えてるの？　冷泉(れいぜい)さん？　……はっはーん、もしかして。あなた、怖いんでしょう？」
「ダメだ。オバケは……」
「ぷっ！　あははは！」
ソド子がいきなり、けらけら笑った。

「れ、冷泉さんにそんな弱点があるだなんて！　あーおかしい～」
だけど、こっちはちっとも笑えない。
笑えるものか……！
「わ、私は……おばぁと高いところと、オバケだけが無理なんだ」
「あと、早朝もダメでしょ、あなた」
「それとはまた種類が違う」
ソド子は怖くないのか？　私はつい首をすくめて、彼女にぴたりとくっついた。
うん。相手がソド子でも、一人でいるよりはマシだ。
彼女はどうやら平気そうだし、なにかあったら盾にしよう。
本当は沙織くらいボリュームがあったら、物理的にも心強いのだがな。
しかし私とは違い、本当にソド子は怖くないらしい。はん！　と鼻で笑ってみせる。
「ラップ音、ってヤツかしら？　それともポルターガイスト？」
などと、勝手に分析を始めているし。
や、やめてくれ。
「どっちでも同じだ。嫌だ。もう帰る」
「ちょっ、なに言ってるのよ!?　あ、あなたねえ……学年主席なんでしょ？　もっと科学的に考えてみたら？」
やれやれ、とソド子は大きく嘆息した。
その生ぬるい息さえ、くっついていた私の首筋にかかり、ぞわぞわする！

あああ……！

「ラップ音なんて、昼夜の寒暖差で校舎の建材が、ぴしぴし鳴ってるだけでしょう？　うちには木造でできた旧校舎もあるし、それじゃない？　ポルターガイストは……うん、風かしら。そうよ、『幽霊の正体見たり枯れ尾花』って言うじゃない」

「科学的に考えれば考えるほど、辻褄(つじつま)が合わないことは世の中にあるんだ」

「？　冷泉(れいぜい)さん？」

「いや私たちには説明ができないだけで、別の理屈がこの宇宙には存在し、いわば相対性理論$E=mc^2$の外の事象として捉(とら)えられ……それははたして別次元の生命体なのだろうか？　だがこの三次元軸上に現れたということは、干渉できる存在であり、すなわち少なくとも実在し同時に物理的な力を持ち合わせているわけで⁉　要するにこちらから見れば、間違いなく本物と差し支えがなく……！　そうなるとやっぱり、どっちみち、怖いじゃないか！　そんな馬鹿な！」

「は、早口でなに言ってるかわかんなくなってるわよ、冷泉さん⁉」

「いや、待て。可能性としてはゴモヨさんかパゾ美さんが起きてきて、なにかに蹴躓(けつまず)いたのかもしれない。うん」

たぶん！　私は勝手にそう結論づける。

「きっとそうだ。むしろ、そういうことにしておこうソド子」

「え？　まあ、いいけれど……」

「ではな。帰る」

ぎゅっとしがみついたまま、私はそうきっぱり告げた。
はあ？　とソド子が呆れた声を発したが……。
ぼんっ。またもや、音が！
「かーえーるーー！」
「って、逆に座り込んでどうするのよ？」
「うう。ソ～ド～子～、寮に連れ帰ってくれ～」
一人じゃ歩けない。情けないが私はその場で蹲ったまま、ソド子のズボンの裾を必死に掴んだ。
ぶんぶん振られてしまったが、絶対に離すものか。
私が、悪かった。本当に。
もう今夜はひたすら頭から布団かぶり、明るくなるまで外に出ないから！
むしろ朝になってから、寝るから……いや、それはまずい。明日は決勝戦だぞ。
などと一人で悩んでいるうちに、ソド子が先に諦めたらしい。
「はあ。わかったわよ」
「……ソド子～！」
「じゃあわたしが確かめてきてあげる。音の正体！」
「⁉」
な、に……？　私は最初、言っている意味がわからなかった。
が、ソド子はむしろ、俄然やる気だ。

「そーよ！　学校の風紀はこのわたしが守るの！　相手がなんだって、それは変わらないわよ！」

「待て。待て待て待てソド子」

「あーら冷泉さんはここで待ってればいいのよ。ね？」

「……。もしかして仕返しのつもりか？　ソド……園みどり子さん」

「そんなことないわよ冷泉麻子さん」

くふふ、とソド子が笑った。ああ、絶対、わざとだな……。

「せ、性格悪いぞ。ソド子ー」

「そうかしら？　まあほんとに気になるから、一人でも行くわよ」

ソド子ときたら、そのままズボンの裾を掴んでいた、私の手を振り払おうとした。

いや、その前に確認してくる。

「で、冷泉さん。あなた、どうするの？」

「ど、どうするって」

そんなの……そんなの！

「ついていくしかないじゃないか、ソド子～」

「うるさいわよ、レマ子。ほら、耳を澄ませなさいな」

音が聞こえてきた方角だけを頼りに、メインストリートから外れ、ソド子はずんずん校舎の間に入っていく。

そこは外灯の明かりの届かない、月光だけがどうにか照らす空間だ。
必死に目を凝らしてどうにか、モノクロームに世界が見える。
ううううう……。昼間は見慣れているはずのすべてが、闇に包まれただけで、どうしてこんなに違って見えるのか。
いきなり物陰から襲われたら、どうしよう。嫌だ。嫌すぎるぞ。
でもこんなところで、一人にされるのは勘弁だ。
私はびくびくしながらも、ソド子のすぐ後ろにくっついて歩いた。
「って、そんなにぴったり張り付かれたら、歩きにくいんだけど？　冷泉さん」
「気にするな。頼む」
「ほんとあなたって、幽霊ダメなのね？」
「いや、幽霊は平気。怖いのはオバケだ」
「は？　……どっちも同じじゃないの」
「違う。ぜんっぜん違う。幽霊はいないから、怖くない。オバケは、いるかもしれないからやばい」
しかし……ちょっと違うぞ。
暗がりの中、それでもソド子のにやにやする気配が伝わってきた。
私はきっぱり断言した。
はい？　なんてソド子がいきなり足を止める。
「こ、こら。暗い中で急に立ち止まるな、なんだ？」

「いや……その理屈、なんなのよ？　なんで幽霊が、いないって否定できるの？」
「……。出てきたことがないから、だ」
「？　どういう意味？」
「父も、母も会いに来てくれないからな。私に」
おもむろに言って、しまった、と私は思った。そう言えば——両親が数年前に事故で他界したことは、ソド子には教えてなかったはずだ。



案の定ソド子が暗がりの中、絶句していた。
「あなた……」
「いや、いい。忘れてくれ。個人的なことだ」
「個人的って、そりゃ、そうだけどさ」
口ごもったソド子は、それ以上なにも言えず、やがて再び歩き出した。
それは、そうだ。特に言えることもないだろう。
だから私も、他人にはいちいち説明してこなかったのだ。
みんな、どうせ同じ反応しかできないのだからな。
「気を遣わなくてもいいぞ、ソド子」
「っ！　べ、別に！」
そんなことない、とでも言い返そうとソド子が再び足を止め、こっちを振り返ったとき
――。
ぼぼんっ。
……！　ま、また音がしたぞ⁉
私はさすがに硬直した。はっきりと聞こえたのは……近くまで来たからだろうか？
ソド子もさすがに身じろぎし、前方に向き直った。
「あっちね。体育館？」
「うう……。聞いたことがある」
私はこんなときに、ある話を思い出した。

「誰もいないはずの体育館で、火の玉が夜な夜な弾んでいるとか〜〜〜。敵に当たることなく終わった戦車の、不発弾のオバケらしいぞ、ソド子ー」
「いや、そんな話知らないわよ、わたし？」
はあ？　とソド子が訝（いぶか）しんだ。
「って、おかしいじゃない。なんで戦車が絡んでくるの？　大洗女子（おおあらいじょし）は二十年も戦車道やってなかったんだし」
「西住（にしずみ）さんが黒森峰（くろもりみね）で聞いた、七不思議だそうだ……ソド子がばかすか外すから、化けて出たんだぁ」
「……。外したって、それ、さっきのゲームの話よね？　ま、まるで関係ないじゃない、もうっ！」
するとソド子が果敢にも、そのまま体育館へと歩き出した。
うわあああ。私は置いていかれるのが嫌で、やっぱりソド子についていく。
そして――見た。見てしまった。
ついに音の源と思われる、闇に包まれた体育館の姿を――。
真っ暗だぞ？　ひっ！　と思わず、呻（うめ）きが漏れた。
やはり誰もいないらしい。それでも……。
「⁉　なに、今のっ？」
ソド子が急に声をうわずらせる。
な、なにか見た、のか？

私は彼女の後ろに隠れているから、よくわからなかったが。
「光が、ちらちらと……！」
「せ、説明はいい。見なかったことにするぞ、ソド子ぉお」
「まさか、ほんとに火の玉だってゆーの？　そ、そんなの、あるわけが」
ぼーんっ！　そこに音が響き渡った。
ひいいいいい！
今のは、体育館の横から入れる鉄製のドアが、揺れたものか？　私は戦慄するしかない。
けれども逆に、ソド子は今ので頭に血が上ったようだ。
「こ、こんなの風紀の乱れよー！　わたしが追い払ってくるわ！」
「正気か？　お、おい、ソド子～⁉」
私が静止する間もない。ソド子が、気に駆け出して、体育館の正面玄関へと回った。
その背中にくっついていた私も、なぜか、緒に走るはめになる。
手が、ソド子のジャージから離れないのだから仕方がない！
だがこの時間、体育館のガラス扉など、どこも施錠されているはずで……。
「って、開いてるわよ。誰よ、閉め忘れたのは？　こんなの管理問題にっ」
そうわめきながら飛び込んだソド子の前には、真っ暗な体育館の玄関ホールが広がっていた。
普通ならここで、屋内シューズに履き替える場所だ。

律儀なソド子は当然のようにまず靴を脱いで、そこから中に入ろうとした。
ホールの奥に続くのはもちろん、重厚な防音仕様の扉である。ソド子はそれに取り付いた。
が、そのときには――私はあるものに気が付いていた。
いや、つい蹴っ飛ばしたからわかったことだ。
闇の中でもそろえられたソド子の靴の、その横で、別の靴がいくつか散らばる。
そう、靴だ。……誰かの。
つまり、体育館の中には――。
「光？　……ライトじゃないの⁉　ちょっ」
防音扉を押し開けたソド子が、慌てて近くをまさぐった。
やがて、体育館の高い天井に、無数の照明が輝き出す。
スイッチを押したのだ。
そして、私たちは見た。
そこにいたのは、火の玉などではけっしてない。
かわりにおのおの、頭に懐中電灯をつけてバレーをしていた、四人組の女子がいた。
どれも見知った顔だった。部員が四人しかいなくて、バレー部がつくれずに戦車道チームに入り、部のアピールをする四人。
元バレー部の、磯辺（いそべ）さんに近藤（こんどう）さん、河西（かわにし）さんと佐々木（ささき）さんだ。
そしてやってきた私とソド子に、むしろ四人の方がぎょっとする。

ぼん、ぼぼんっ……と、体育館の磨かれた床に、バレーボールの落下音を響かせて。
そ、その音だったのかっ！

† †

要は、オバケじゃなかったということだ。
ふうー。私にとっては、それだけで十分だ。
——けれどもソド子は違うらしい。
「なんであなたたちが、まだ学校に残ってるのよ⁉」
ぷんすか怒りながら、バレー用のユニフォームを着た四人をじろりと見回した。
「ごめんごめん。つい白熱しちゃって。なにせ、明日は決勝だろう？」
四人の中で私くらいに背の低い、しかしキャプテンを務める磯辺さんが、代表して口を開く。
「今のうちに、バレーの全部を出し切っておきたくてね」
……バレーの、全部？
ふむ。その意味はソド子にも、私にもわからなかった。
ああ、と磯辺さんは他の部員たちと顔を見合わせる。
「つまり、私たちはあくまでバレー部復活のため、戦車道を始めたわけだけど……戦車道も大事だから」

赤いハチマキに懐中電灯を刺したままの、近藤さんが説明した。
そうそう、と頷くのは、ボールを拾ってきたつり目の河西さんだ。
「で、ね！　キャプテンと相談して、好きなバレーをここで今夜やり尽くして、明日だけは戦車道に集中しようって」
「決めたのよね～」
四人の中で一番背の高い佐々木さんが、にこにこと言った。
「？　それでどうして、真っ暗な中、懐中電灯だけでバレーをすることに繋がるのよ！」
ふむ、なるほど。合理的だな。しかし……。
ソド子が訊いた。うん、確かにそれは疑問だぞ。
だが元バレー部たちにとっては、簡単な話だった。
「それは……せっかくだから暗がりでバレーをやれば、こう、もっと上達するんじゃないかなってさ！」
笑顔でキャプテン磯辺さんが答えた。
「ほら、戦車でも視界の悪い中、操縦するだろう？　おかげで勘が鍛えられたというか」
「激しいアタックは、見えてから反応しても遅いから！」
近藤さんが、ジャンプサーブの真似をした。さすがはバレー部、フォームはきれいだ。
そこに「ほい！」と河西さんがボールを上げる。
ぱっ、と近藤さんは反応を見せた。鮮やかにボールをトスする。

それを受けて、素早く距離を取った河西さんが跳躍し――。
ばすんっ！
すごい音とともに、アタックした。
が、同時にその前でジャンプしたのは、背の高い佐々木(ささき)さん。
おお、見事にブロックを決めてみせる。
弾かれたボールは明後日(あさって)の方向に飛んで……。
あ、いや。そこに滑り込んだのは、キャプテンの磯辺さんだった。
くるんっ、と床で身軽に回転して、レシーブした。
ぽーん。ボールは真(ま)っ直(す)ぐ、体育館の天井すれすれにまで上がる。
それを見上げながら私もソド子も、つい感心してしまった。
咄嗟(とっさ)のことでも、きちんと連携が取れている。
「うまいじゃない！」
わー！　とソド子が拍手をする。
バレー部の四人が照れ笑いをした。
だけど、その直後。
「人数が集まらないから、もっと下手なのかと思ってたわ！」
「うぐっ！」
ぐさり、と胸を抉(えぐ)られたように――磯辺さんがよろめいた。
「キ、キャプテン⁉」

「しっかりしてください！」
「こ、根性です～！」
慌てて他の三人が支え、磯辺さんがどうにか立ち直る。
「た……確かに私たちは四人しかいないから、部としても成立してないし、練習試合もできてない。それは事実だ」
磯辺さんが説明する。
その脇で、ようやく落ちてきたボールが床に、虚しく音を弾ませた。
確かバレーは最低でも、六人は必要なのだったな。
確かに試合をするためにも、あと二人は必要になる。
「いや、だからこそ、練習はきっちりしておかないと！　いつバレー部が復活してもいいように！」
「はい！」
「そうです、その意気です！」
「いつでも心にバレーボール、ですね～！」
「「「「おー！」」」」
最後は四人が声を重ねて、円陣まで組んだ。
だが、やはりソド子が余計な一言を告げる。
「でも、変よね？　それだけうまいのに、むしろなんで入部希望者が来ないのかしら？」
「ぐはっ！」

またもや磯辺さんに大ダメージだ。今度は、床に片膝（かたひざ）までついてしまった。
いや、他の三人もさすがに顔を曇らせる。
「そ、それは……四月にはたまに、入部希望の一年生が来たんだけれど」



緩んでいた赤いハチマキの端を垂らして、近藤さんがおずおずと語る。
「キャプテンの練習方針についていてこれなくて、それで」
「あれは仕方ない！　だってあたしたちは、やるからには全力で、だもの！」
くっ、とつり目に滲む涙を堪えるのは、河西さんだ。
「たとえ実力がなくても、初心者でもいい！　……それでも一緒に優勝を目指す、折れない心だけは持ち合わせてくれないと！」
「でないと、卒業したOGたちに申し訳ないですよね〜……」
最後は佐々木さんが、長身をしゅんと小さくさせながら苦笑した。
あ、なるほど。私はようやく理解する。
「つまり練習がハードすぎて、四人以外についてこれる者がいなかった、というわけか」
思わずそう呟いていた。
が、それがとどめになったらしい。
ずーん、とバレー部の四人組を、重い沈黙の空気が包み込んだ。
す、すまない……そんなに落ち込むとは、思わなかった。
ちょっと！　なんてソド子が肘でつついてくる。
いや、私だけのせいじゃないぞ。
でも、この四人の持ち味は「諦めないこと」なのだ。
「だ、だからこそだ！　我々は戦車道で華々しい結果を残し、『大洗女子バレー部ここにあり！』というのを見せつけねばっ！」

磯辺（いそべ）さんが奮い立った。
はい！　と他の三人も同調する。
「よーし！　そろそろ上がろうかと思ってたけど、明日の決勝のために、もういっちょ絞り出すか！」
「オー！」
などと、転がっていたボールを拾い上げ、四人がきびきび走り出した。
……いや、なんだ？　一度、配置に就こうとしてなにやら相談していた彼女らは、ふいにこちらへ視線を向けた。
「そういえば……」
「二人、いるね」
「六人そろっちゃう!?」
「じゃあ～」
ん？　四人は急に、私とソド子のもとへと戻ってきた。
そして、「せーの！」で一斉に頭を下げた。
「せっかくだから、二人も練習に付き合ってみないか？　いや、ぜひそうして欲しい！　四人でやれることはもう全部やり尽くしたけれど……六人そろえばまた、いろいろできると思うんだ！」
「なに？」
「えっ、わ、わたしたちも!?」

いきなりの誘いに私やソド子は少し戸惑う。
が、バレー部の四人は盛り上がる一方だ。
「いや、キャプテン。こうなったらむしろ、三対三のビーチバレー方式というのはどうでしょう？」
「む！　それ採用！」
「あっ！　それなら試合、できちゃいますね！　コート、フルで使えますね⁉」
「お願いしま〜す！」
再びそろって、こちらに深々と一礼する始末だ。
よくわからないことになってきたな……。
私はただ、早く眠るために校内でジョギングしてただけなのだが。
つい、隣のソド子をちらりと見る。
ところがソド子ときたら。
「いいわ！　やりましょう、冷泉さん」
「……ソド子？　運動、苦手なのに？」
「ひ、一言多いわよ⁉　違う、あなたのために付き合ってあげる、ってこと！　ここでしっかり体を動かせば、いい感じに疲れてぐっすり眠れるじゃないのっ」
「ああ、なるほど」
理解した。確かにそれも、手段の一つか。
——目をきらきらさせるのは、磯辺さんたちバレー部の四人だ。

「いいの？　うわあ。や、やったぞ、みんなー！」
「ついにネット越しの対戦が実現するんですね！　あっ、倉庫からバレーネット持ってきます！」
「スコアボードも使えますね？　わー、いつ以来だろ……！」
「予備のボールも必要ですよね～⁉」
バレー部の四人がわらわらと、慌てて試合の準備に取りかかる。
体育館の端にある倉庫へとダッシュした。
やれやれ、と私やソド子は苦笑いだ。こんなに喜んでくれるとはな。
しかし――磯辺さんたちはすぐ、倉庫前から戻ってくる。
「ちょっと待っててくれ！　倉庫の鍵を取ってくるっ」
うん？　……そうか、倉庫の扉が閉まっていたのか。
時間が時間だからな、と私は体育館の舞台脇に掲げられた、大きな時計に目をやった。
もうすぐ針が午前零時を指そうとしていた。開いている方がおかしい話だ。
だが、そのとき。
「鍵？　なんであなたたち持ってないの？　体育館の使用許可をもらったのなら、それくらい生徒会から受け取ってるはずでしょう？」
あれ？　とソド子が首を捻（ひね）った。
「それに……鍵の置いてある生徒会室も、もう閉まってるはずなんじゃあ」
「ああ、それなら大丈夫だ！」

にっこりと笑顔で磯辺（いそべ）さんが答える。
「こんなこともあろうかと昼間にこっそり、生徒会室の廊下側の窓の内鍵を、一つ開けておいたんだ。ほら、この体育館の鍵もそうやって持ってきたんだし。なぁに、体育館と校舎は渡り廊下で繋（つな）がってるから、生徒会室まではすぐだ！　今からひとっ走りして」
「！　ま、待ちなさいよ⁉　それって……！」
ソド子が言葉を失った。
しばし、あんぐりと開けた口をぱくぱくさせて――。
「む、無許可じゃないの――‼　あ、あなたたちっ、生徒会から夜間立ち入りの許可もらってなかったの⁉」
「えっ。あ」
磯辺さんが遅れて、はっとした。ソド子が風紀委員なのを、うっかり忘れていたようだ。
彼女は後ろにいた、他の三人に振り返る。
まずい、という顔を全員がした。
そこにびしっ、とソド子が指を突きつける。
「ダメじゃないのー！　……そーよ、生徒会から許可をもらってたの、わたしたちだけだもの！　だから最初、オバケかなにかだと思ったんだから！　とゆーかこういうのは、ちゃんと許可申請しなさいな‼　校則違反よ！」
「だって、その。なあ？」

磯辺さんが、近藤さんや河西さん、佐々木さんともじもじした。

「うちらは……部として認められてないから。体育館の使用願いを出しても、通らないし」

「このバレーボールだって、みんなの割り勘で買ったものだしっ」

「でも今夜は明日の決勝のために、久しぶりに体育館を使いたくてさ！」

「……むしろ戦車道の、環として、生徒会裁量でどーにか、ならないですかねえ～？　あは、は」

四人が言い訳をするが――ああ、無理だ。

そんなことが風紀委員のソド子に通用するわけもなく。

「ダメに決まってるでしょ――――!!」

体育館に、ソド子の怒声が反響した。

わっ！　とバレー部の四人が走って逃げ出す。

「って、ちょっと！　体育館の鍵は置いていきなさ――い！　わたしが預かっておくわ、もう！」

「ちぇー」

バレーボールを小脇に抱えた磯辺さんが、そう言われて立ち止まり、しぶしぶくるりと引き返した。

私たちのもとへ戻ってくると、屈み込んで屋内シューズの片方に触れる。

バレーボール用なのか、学校指定の体育館シューズとは違い、靴紐のあるタイプだ。

その紐の間になんと、鍵を挟んでいたらしい。

取り出した鍵をソド子に渡すと、改めて磯辺さんは三人の後を追い、体育館から出て行こうとする。

けれども最後に一度だけ、くるりとこちらに振り向いた。

「今日はできなかったけど……また今度、バレーやろう！」

持っていた白いボールを掲げ、磯辺さんはにかっと笑った。

ああ、そうだな。

私も首を縦に振る。

「ナイトゲームならな」

うん、昼間は無理だ。

絶対に。

「その前に、少しは反省しなさいー！　もうっ！」

ソド子は相変わらず、怒ってバレー部の四人を見送った。

■4　約束だぞ、ソド子〜！

「それはそうと、結局のところジョギングにしろバレーにしろ、まともにできてないわけだが。ソド子」
「あっ……。し、仕方ないじゃないの！」
運動して眠くなろう作戦は、いつしかぐだぐだだな。
体育館のガラス扉を施錠したソド子が、当初の目的を思い出して言葉に詰まった。
まあ、私は特に気にしないが。
……いや、早く寝ないとまずいのは重々承知だ。
時刻は、さっき体育館で見たとおり、すでに午前零時だからな。
慌てても眠くなるわけじゃないからどうしようもないが、まずい。まずいぞ。
明日は学校で集合してから、戦車を学園艦より大洗の港に降ろして——鹿島臨海鉄道にて、試合会場まで運ぶ手はずだ。
移動距離がかなりあるので、その間にⅣ号戦車内で仮眠が取れる計算だが。
問題なのは現時点で、まったく眠くならないことだ。
ずるずると残り時間だけが減っていく。
いったいいつになれば私は、ちゃんと眠れるのだろう？
「とにかく、もう少し走ってみるか。いくぞ、ソド子」
「ふわぁうぅ」

外灯のある明るいメインストリートへ戻ろうとした私に、しかしソド子があくびで返事をした。

「……。いいな、ソド子は。眠そうで」

「も、もう夜中の十二時なのよ？　今日だって戦車道や風紀委員のチームミーティングもあったし、けっこう疲れてるの！　眠くなって当たり前なんだから！　わ、わたしはもう走れないわよ!?」

「そうか。わかった、じゃあああとは私一人で走る。ソド子は先に休んでいてくれ」

「！　な、なに言ってんの!?　最後まで付き合うわよっ？」

ぺしっ、と前を行く私の背中をソド子がはたいた。

「だって私が引き受けたんだから！　あなたが寝るのに協力するって！」

「落ち着け。私に付き合ってくれるのはいいが、これ以上は明日の試合に差し支えるぞ、ソド子」

「ばかっ！」

私はさすがにたしなめた。

確かに私が頼んだのだが、ソド子だって大事な戦力の一人だからな。

決勝戦で、足を引っ張らせるわけにはいかない。

けれども——なんだ？　またもや私の背中が叩かれた。

しかも今度は、さっきよりも強く。

私は思わず立ち止まる。

「痛いぞ、ソド子？」
「あなたねえ……試合のことは、わたしだってわかってるわよ！」
「？」
「だから引き受けてあげたのよ！　わたしとあなた、天秤にかけて、どっちが大洗女子の勝利に貢献すると思ってるの？」
「なに？」
「あなたよ、レマ子！　冷泉麻子!!　……みんなわかってる。明日の黒森峰との決勝で、大洗女子の廃校を回避するには、絶対に勝たなきゃならない。それができるのはわたしたちの中で、きっとあんこうチームに決まってるわ！　途中から参加した、わたしやゴモヨやパゾ美にだってわかることよ！　だから三人で、あなたに力を貸したの！　あんこうチームの戦車を動かす、エース操縦手のために！」
「あ……」
「わたしたちもがんばるわよ！　でも、わたしにできることは、全部やっておきたいの！　さっきのバレー部のみんなじゃあないけどさ」
もしかして、赤くなっているのだろうか？
最後はごにょごにょと声が小さくなり、校舎の陰の中でソド子がちょっとうつむいた。
そうか……そんな気持ちだったのか。
「それで私が頼んだときに、あっさり引き受けてくれたのか」
「そーよっ。……って、あなたもわかっててわたしを選んだんじゃないの？　普通ならは

ら、武部さんあたりに頼んでるはずなんだし」
「いや？　沙織はほっといても私を起こしに来るだろうし。ただ私一人だと、早く寝る自信はなかったからな。それで保険に、と思ってソド子を選んだわけだ。うむ」
「はあ？　そ、そんな理由!?　保険って～～～！」
「あと、ソド子はうるさいからな。たぶん、適任だ」
頼むには十分な理由だろう？　と、私は思ったわけなのだが。
「わたしは、あなたのおかーさんじゃないわよッ!!」
「!?」
「あっ」
しまった、という空気が生まれる。私とソド子は互いに言葉を失った。
たぶん、何気ない一言だ。
けれども――ソド子は少し前に、私が親を亡くしていることを知ってしまった。
「……ごめんなさい」
やがてぽつりと、ソド子の方から謝ってくる。
いや、私は別に気にしないが。
ただ……お母さん、か。
「ぷっ」
「！　な、なによ？　な、なんで笑うの？」
「いや、ソド子がお母さんだなんて、おかしいだろう。ぜんぜん似てないし」

「ええ？　ちょっと、こっちは真剣だったのよ？　もうー！」
「ああ、でも責任感の強いところは近いかもな」
私は軽く笑いながら、再びメインストリートへと歩き出した。
――ただ、久しぶりに母のことを思い起こす。
普段は、あまり考えないようにしている。特に、母との思い出は。
最後に交わした会話が、最悪だったからだ。
私はあの日、母と喧嘩別れをしたのだ。

『麻子！　いつまでもごろごろして！　そんなんだと大人になっても、周りに迷惑かけるだろっ？』
いつもの、朝のやり取りなはずだった。
まさかそれが最後になるとは、あのときは思ってもいなかった。
寝坊した私を置いて、車で買い物に出かけた父と母は、そのまま追突事故に巻き込まれて――。
帰ってきたら、ちゃんと謝るつもりだったのに。
それもうできなくなった。
真っ暗になった夜、戻ってこない両親を、ずっと部屋で待っていたのを覚えている。
ああ。あの頃から、余計に夜に強くなったのかもしれないな。

ぬくぬくと寝ているときに、最悪の知らせが飛び込んでくるのが、私はきっと怖いんだ。
だが――ずいぶん昔の話だった。今更だ。
ようやくメインストリートに着いた頃には、気持ちの切り替えは終わっていた。
外灯の明るさのおかげか、ソド子の表情も少しはもとの調子に戻っている。
いや、むしろ「ふわ」と、忘れていた眠気に再び襲われているようだ。
「その眠気をわけて欲しいぞ、ソド子～」
「な、なによ？　わたしからしてみれば、なんであなたがそんなに元気なのか、意味不明よ。レマ子」
「そうか？」
「だってさっきまで、わたしの後ろでガタガタ震えてたのにー」
「……オバケじゃなかったからな。もう平気だぞ」
「ふん。わたしに感謝しなさい。というか確かめたらやっぱり、枯れ尾花のパターンだったじゃないの！」
「はいはい」
そんなことより、さっそく走ろう。
私はジョギングの続きをしようと、「正門で引き返すから」と遥か前方を指し示した。
ついてこれないソド子には、ここで残って、往復する回数でも数えてもらうか――などと言おうとしたとき。

きゅらきゅらきゅらきゅら……。
「⁉」
私は思いきり振り返った。
ソド子も同じだ。ああ、聞き間違えるはずもない。
音自体は、遙かに小さいものだったが、私たちのよく聞くものだ。
それは……履帯の、動く音か？
きっとそうだ。大地を踏みしめる独特の音が、校舎の向こうからかすかに響き、届いてきた。
「なに？　まさかこの音って、戦車⁉　ちょっと、まだ他に、戦車道チームの誰かが残ってるってことー？」
いい加減にしなさいよ！　とばかりに、ソド子がおかっぱ頭を振り乱した。
しかし、私は……。
「……うう」
「？　どーしたの、冷泉さん？　なに青ざめてるのよ。それより、行くわよ！　どうせまた許可も得ずにやってるんでしょうし、校則違反でふん捕まえてやるんだから！」
「いや、ソド子。き、気付いてないのか？」
「は？　なによ」
「だから、履帯の音だけ、だろう？」
「へ？」

——本当に、わかっていないのだろう。
ソド子は小首を傾げるばかりだ。
きゅらきゅらきゅら。
……うん、やっぱりだ。耳を澄ませて、改めて音が一つしかないのを確かめて——。
「エンジン音が、しないんだ。ソド子」
「は？　えっ」
遅れてようやく、ソド子が意味を理解した。
さっと顔色を変え、音の方向に向き直る。
聞こえてくるのは、私たち大洗女子の戦車を格納した、倉庫の方ではないようだ。
それだけははっきりとわかる。
メインストリートを挟んで真逆となる、商業科校舎の向こう側か？
そっちには木造の旧校舎と、部室棟くらいしかないはずだが……。
ううっ、嫌でもぞっとさせられるぞ！
だいたい、あり得ない。エンジン音がしないのに、動く戦車だなんて！
そんなものがあるとしたら。
「こ、今度こそ本物の、戦車のオバケだっての⁉」
ソド子がうわずった声を漏らした。
「聞いたことがある」
私は蹲りながら、嫌ーなことを思い出した。

「活躍できずに廃車となった戦車が、夜な夜な乗り手を求めて、学園艦（がくえんかん）をうろつき回っているって」

「そ、それまた黒森峰（くろもりみね）の話なんでしょっ？　も、もうわかってるわよ⁉」

「……いや、九連覇してた黒森峰に、活躍せずに廃棄された戦車などいない。そういう噂（うわさ）がどこかの学校にはある、と秋山（あきやま）さんが」

「今度は秋山さん情報⁉」

「ああ。そして……大洗女子は二十年間、戦車道をやらずにずっとあちこち、戦車をほったらかしにしてたわけで」

「！　やっ、やめてよね？　それに廃棄されてた戦車だなんて、そんなのわたしたちがあれだけ探し回って、ようやく三式一輌（りょう）見つけるのがやっとだったのに⁉」

今更？　という感じで、ソド子が顔を引きつらせる。

同感だ。しかも、オバケという形で現れるなんて。

嫌だ。嫌すぎるぞ！　私は耳を塞ぎたくなった。

けれどもその前に、嫌なことに気付いてしまう。

きゅらきゅらという音が——だんだん大きくなっている？

つまり、それは。

「ち、近づいてきてるの⁉　嘘（うそ）でしょっ！」

ソド子がさすがに悲鳴を上げた。

あああああ。私は逃げようとするも、あ、足が動かないー！

蹲った体勢のまま、立ち上がることすらままならなかった。
そこに気付き、ソド子が私の腕を引っ掴む。
「なにやってるのよ、あなた！　に、逃げるわよ！」
「し、信じてないんじゃなかったのか？　ソド子～」
「こんなときまで減らず口っ!?　それは、そうだけど、でも万が一ってこともあるでしょーが！」
ぐいぐいソド子が引っ張るものの、ダメだ。私はまともに動けない。
そうこうしているうちに、履帯の音が間近に迫った。
踏みしめていた土の音が消え、アスファルトをごつごつ蹴る。
ということは、もうメインストリートに繋がる小道へ――？
そして、私たちは見た。
エンジン音もない中で、さあっ、とライトの明かりが走る。
オバケ戦車のヘッドライトか？
夜間を走るのに、オバケも光がいるらしい。
なんてことを思っていると……で、で、出たあああああ!?
にゅうっと戦車のごついシルエットが、商業科の校舎脇から現れた。
私もソド子も、いつしか二人で抱き合っていた。
がくがくとお互いの震えが交わり、視界が激しく上下にぶれた。
まるでⅣ号戦車を全速力で走らせているかのようだ。

だからゆっくりと、そのシルエットが曲がってきても動けなかった。

私たちは呆然としたまま、オバケ戦車のヘッドライトに照らされて……。

ごごん！

……え？

なん、だ？　戦車がいきなり、履帯を軋ませ停車した。

かわりに巨大な砲塔が、音を立てて回り出す。

が、ゆっくりと百八十度回りきる直前で……ぴたりと止まった。

同時に掻き消えたのは、ヘッドライトの輝きだ。

——真正面から強烈な光に照らされていた私たちは、ようやくそのオバケ戦車の姿を判別する。

外灯からの明かりを受けたそれは、あれ？

なんだ。見覚えがあるぞ？

これは……。

「ねえ。ポルシェティーガー、じゃない？」

ソド子がぽつりと呟いた。

そうだ。間違いない。うちの、戦車道チームの一輌だ。

オバケじゃなかったのか？

その証拠は、真後ろを向いた砲塔にあった。

ポルシェティーガーという戦車は、装甲も厚く大砲の威力も高い車輌だが——相当クセのあるもので、乗り降りの仕方も独特だった。

側面にある円形のハッチは防弾能力を高めるために塞がれて、そのせいで操縦手や通信手も砲塔上から出入りする。

ただ、そのためには砲塔のハッチを、車輌前方の真上に持ってこなければならない。

だからこうして、ハッチの位置を合わせるために、砲塔を振り返らせたのだ。

それは、つまり。人が乗って、操っているという証拠で——。

「あれ？　やっぱり、冷泉さんと風紀委員の……？」

がちゃん！　と鉄の音を響かせて開いた、ポルシェティーガーの上部ハッチ。

そこから現れた、一人の少女が顔を出し、私たちを見て驚く。

ボーイッシュな髪型の、オレンジ色のツナギを着た彼女は、やはり自動車部の？

「ナカジマさん！」

ソド子が相手の名を呼んだ。

†

ポルシェティーガーを操る、自動車部チームのリーダー、ナカジマさん。

「びっくりした！　なにやってるの、こんなところで。ひいちゃうところだったよ！」

そんなことを言いながら、身軽に砲塔から降りてきた。

彼女に続いて車内からわらわら姿を見せるのは、同じくオレンジ色のツナギを愛用する、自動車部メンバーの他の三人だ。

「そ、それはこっちの台詞よ⁉　あなたたちこそ、こんな夜中に、いったいなにを？」

やってきたナカジマさんを前にして、ソド子が私から体を離し、聞き返した。

だけど、それは動かなくなったポルシェティーガーに取り付いた、他の部員たちを見ればわかることだ。

「ぐずってなかったから、モーターが焼けたわけじゃあなさそうだけど」

日焼け肌のスズキさんが、車輌後部にあるエンジンルームを調べ出す。

「砲塔回したのが効いたか？　だとしたら、バッテリーだな！」

ようし！　とツナギの上だけはだけて、動きやすいよう腰で両袖を縛るのは、白いタンクトップが眩しいホシノさんだ。

「単純に、バッテリー切れかも？　テスター取ってくるね！」

いつも笑顔のツチヤさんが、なにやら車内に戻っていった。

テスター？　ああ、電流を計る機器のことか。

そうか。それらの会話を聞いて――私にもようやくトリックの謎が解けたぞ。

なぜ、ポルシェティーガーはオバケでもないのに、エンジン音をさせないまま動いていたのか。それは……。

「発電用のエンジンを回さず、バッテリーを積んで、モーターを回していたのか？」

「は？　な、なにそれ？　冷泉さん、どーゆーこと？」

「おっ。鋭いね！　そ〜ゆ〜こと〜！」
きょとんとするソド子にかわり、ナカジマさんがぽんぽんと、ポルシェティーガーの装甲を撫でながら答えた。
すると、ふぃーん！　という低音が聞こえてきた。
工具箱と一緒に戻ってきたツチヤさんが、ホシノさんやスズキさんとエンジン回りをいじったせいか？
どうやらポルシェティーガーのモーターが、息を吹き返したらしい。
それは履帯が動いていれば、掻き消されてしまう程度のものだ。
なるほど。だからさっき、私やソド子はオバケだと勘違いしたのだな。
しかし、モーター音はまた、すぐに止まってしまったが。
「いい子いい子。ミルクが切れただけなんでちゅね〜」
そしてナカジマさんがポルシェティーガーを、赤ん坊扱いした。
ふむ、自動車部ならではの感性だな。
私の横ではそれにまったくついて行けず、「はあ？」とソド子がお冠だが。
「あ、あのねえ！　ちゃんと説明してちょうだい！　訳わかんないわよー！」
「ほら。うちの子は、空冷エンジンで発電して、大型の駆動モーターをぶん回すって仕様でしょ？」
よっ、と自らも車体の後部によじ登り、ナカジマさんが説明する。
いや、他の三人と一緒に整備に加わりたかったようだ。

さっそく工具を手にして、がちゃがちゃといじり始める。
「ただ、ほら。エンジンがくせ者で……ピーキーでね。圧縮比を下げて馬力を低下させることで、どーにか安定性は向上させたんだけれど、それだとモーターがとにかく力不足でさ。頑丈なぶん重い車体を、のろのろとしか走らせられないの」
「これは、大洗女子最速を目指す自分たちとしては、やはり手を入れておかないとな！」
そう付け足したのは、ホシノさんだ。
エンジンルームから、よいしょ、となにやら重そうな箱を取り外してくる。
それは搭載していた追加のバッテリーだろう。
——そうそう、とスズキさんが小さな機器をそこに繋いだ。
「で、電力のアシストができないかなーって、自動車用のバッテリーをどうにか車内にねじ込んでみたんだけど。……あー、やっぱ残量がほぼゼロ！　こりゃ動かなくなるはずだわー。充電しておかないと」
「やっぱり砲塔を回したのがまずかったかな？　あれで負荷がかかりすぎた、とか。容量の問題かなあ？　でも、バッテリーだけでうちの部室からここまで走ってこれたんだから、馬力を上げる補助としては使えるよね！」
ツチヤさんがにこにこしながら、明るく親指を立てた。
ははあ。私は素直に感心する。
「決勝戦を明日に控えて、まだ手を入れようとしていたのか。さすが自動車部だ。頼りになる」

「ははは。ま、この子はさ、うちらがばらばらだったのを、から組み上げてったたからさー」
鼻の頭を擦りながら、ナカジマさんがちょっと照れる。
「愛着、あるのよね。それこそ、自分たちの子供みたく」
「それに、明日は思い切り活躍してもらいたいし！」
「きかん坊で、いろいろ不利なところはあるけど……それをカバーできればばってさ！」
「西住隊長も、作戦面でサポートしてくれるみたいだし。はりきっちゃうよー！」
ホシノさん、スズキさん、ツチヤさんも活き活きとしてた。
戦車道を始めてから、まったく自動車部は水を得た魚だな。
ホシノさんに至っては、「プロ戦車道チームのオーナーになる！」などと意気込んでいるようだし。
しかし、そこに水を差したのはソド子だった。
「ちょ、ちょっと待ちなさいよ⁉　これ、バッテリーなんか積んで、いいものなの？」
「……ええと」
ごそごそとジャージのポケットから取り出してくるのは、愛用している小型の薄型端末機だ。
見覚えがあるぞ。いつも私の遅刻を記録している、風紀委員御用達のヤツだな？
そこに表示させるのは――戦車道のレギュレーションか？
「ねえ！　確か規定の中に、『使用できるパーツの制限』とかなかったっけ？　そう、

ルール違反じゃないの⁉︎」
「ソド子。それならたぶん、平気だぞ」
「へ？　な、なによ、冷泉さん？」
自動車部にかわって私が答えた。
大丈夫。レギュレーションは丸暗記している。確か……。
「戦車道試合規則三章一項、参加車輛に関する記載はこうだ。『参加可能なのは、1945年8月15日までに設計が完了し、試作に着手していた車輛と、同時期にそれらに搭載される予定だった部材のみを使用した車輛のみとする。それを満たしていれば、実際には存在しなかった部材同士の組み合わせは認められる』、とな」
「え？　えーっと……」
「だから、ポルシェティーガーはもともと電気モーターで動く戦車だ。そのエンジンを別物にすることは違反行為に当たるが、モーターの出力改善としてバッテリーを組み込む程度は、問題ないというわけだ」
たぶん。いや、細かいことになると試合前の車検で判断されるだろうが。
それでも第三章一項の続きには、『部品等が調達不能等の理由により再現が困難な場合は、連盟が認める範囲において改造することが認められる』ともある。
なら、これくらいの追加変更は通るに違いない。
秋山さんが言っていたが、ポルシェティーガーという戦車は試作車輛で、まともに動けず他の車輛に転用されたものらしい。

つまり動かすためには、もともと手を入れるのが前提となる戦車なのだ。
「明日は活躍しちゃうよ！　うちの『レオポン』は～！」
ナカジマさんが自慢げに、ポルシェティーガーにつけた愛称を呼んだ。
レオポン……豹と獅子の間に生まれた、雑種の名だな。
あのポルシェ博士がつくった虎戦車には、なかなか合っていると思うぞ。
「な、なんとなーくわかったわ。ええ」
ようやくソド子も納得したようだ。
なるほど、と隣で頷く。
しかしもう一つ、大問題があったようだ。「でもね」と彼女はこめかみを押さえながら、さらに続けた。
「そっちの違反がないのはいいことだわ。ただし、一応、重ねて訊いておくけど……あのね。許可は、とってあるのよね？」
「うん？　戦車道連盟からの？　それは、明日の試合前のチェック時に変更点を申請すれば……」
ぬかりなし、とナカジマさんが胸を張る。
「新車輌の追加じゃあないから、Ⅳ号の砲身を変えたときみたいにギリギリでもＯＫだよ！　うん」
「違うわよ！　その件じゃなくって、学園への夜間立ち入り許可のことー！　夜八時を回っての部活申請は、生徒会にちゃんと提出してあるんでしょうね⁉」

ほら！　とメインストリートから見える、校舎に張り付いた時計を指さす。
ポルシェティーガーの上で、ナカジマさんが「ありゃ」という顔をした。
――他の三人も同様だ。
いや、自動車部の反応ときたら。
「えー！　もうそんな時間⁉」
「夜中の十二時回ってるよ！　夢中になっててぜんっぜん気付かなかった……！」
「ということは、金曜日終わっちゃったー⁉　ドリンクバーに行く予定が〰〰〰！」
……ツチヤさんに至っては、曜日が変わったことの方がショックらしい。
確かに昨日が金曜日で、決勝戦のある今日が土曜だが……　「さすがはドリンクバー・キンヨウビ！」「ドリキンのツチヤ！」などと、ホシノさんやスズキさんがはやし立てる。
むう、謎だな？
「そういう問題じゃないわよ――‼」
もうー！　と結局声を張り上げるのは、ソド子だった。
「ど、どーしてあなたたちはそろいもそろって、校則無視ばっかりなの――⁉　いい加減にしなさぁあ――いっ！」
「……帰る帰る、もう帰るよ。どのみちバッテリーは、試合前に予備のに交換するだけだしね」
そう告げて、ナカジマさんたち自動車部の面々は、ポルシェティーガーのエンジンを噴

かした。
　メインストリートをそのまま横断し、戦車道で使っている、グラウンド脇の倉庫の方へと去って行く。それを、私とソド子は見送って――。
「つ、疲れた……わたし、もう限界。無理、ダメよ……！」
　はあ〰〰〰と深い溜息を吐きながら、ソド子がついに弱音を漏らした。
「だいたいなんなの？　この学校ってほんと、いろいろ緩すぎなんだからっ。先生なんかまるでノータッチだし、学園長も生徒会に押し負けて、権限をまるごと牛耳られてるしっ」
「……生徒による自治運営の自由さが、大洗女子のいいところでもある、と私は思うがな」
「なに言ってんのよ!?　それこそわたしみたいな風紀委員がいないと、無秩序になるんだから――！」
　がっくり。そこまで言い切ってから、ソド子がいきなり肩を落とした。
　いや、かくかくと、ロボットみたいな怪しい動きでふらつき始める。
　おおお？　肉体的にも無理をしていた上に、精神的なダメージが大きかったようだ。
　仕方ないか。ふらふらしているソド子の手を、私は引いた。
「？　冷泉さん？」
「もう十二時半近い。さすがに、そろそろ合宿施設に戻ろう。タイムアップだ、ソド子」
「わ、わたしはいいから、あなたはジョギング続けなさいよ。もうっ」

「どのみち走りながら眠れるわけではないからな。布団に入って、横になって目を閉じる頃合いだろう」
「……。ふ、ふん。その前に、汗掻いたんだから、軽くシャワー浴びるわよっ」
「はいはい。それまでは起きていろよ、ソド子」
「起きるわよ！　寝ないわよ！　ってゆーかあなたが寝なさいな、レマ子～！」
ぎゃーぎゃー騒ぐソド子をつれて、私は合宿施設へと戻ることにした。
——体育館の側にある講堂、その地下に、大浴場を持つ合宿施設は存在する。
いや、学園艦は甲板上にこそ町があるが、何階層もある地下にいろいろな設備があるのだ。
それらはもちろん、町のあちこちとも繋がっている。学園艦そのものが、巨大なブロックの集まりだからな。
「そうよ、私がいないとダメなのよ。いろいろとっ」
「ゴモヨやパゾ美はまだ、頼りないし……」
「ほんとにもう〰〰〰」
眠気に負けないためなのか、ソド子はぶつぶつしゃべり続ける。
自分でもあまり、なにを言っているのかはわかっていないようではあるが。
脈絡もなく、「Ｂ１ｂｉｓがなんで、カモなのよー！」などと話の中身がいきなり飛ぶし。私はあえて聞き流すのみだ。
まったく、なにが「お母さんじゃない」だ。

むしろ私の方が、ソド子の母親みたいになっているぞ？

なんてことを思いながら、講堂脇の甲板ハッチから階段で降り、大浴場の前まできたとき——。

「あなたは、ちゃんとしなさいよ、ほんっとに！」

洗濯機が何台も並ぶ、ランドリー室兼脱衣所のガラス戸。

そこを開こうとした恰好でべたりとくっついて、ソド子がふいに私を叱った。

「今はわたしが注意してあげられるけど……学校を出たら、誰もそんなことしてくれないんだからねっ」

「？　なに？」

「どーするのよ〜、大洗女子を卒業したら〜」

いや、まずは卒業どころか、学校の存続自体が危ういのだが……。

まあ、今のソド子に言っても無駄か。

たぶん、まともに認識できてないしな。

「心配なのよ！」

しかし、いきなりそう言われてぎょっとした。

「そ、ソド子？」

「あなた頭いいんだから、わかるでしょ？　遅刻の回数、ものすごいことになってるのよ⁉　とっくに三桁よ、三桁ー！　……いくら成績よくっても、これじゃあ社会に出られないわよ！　ううん、社会に出てから苦労するわよ⁉」

それは、ソド子の本音なのか？
……わからない。
でも今のソド子は「普通じゃない」からこそ、普段言えないことまで口にしているのだろうか。
ガラス戸にもたれかかり、彼女はしかめっ面で私を見据える。
「将来のこと、ちゃんと考えなさい！　自分のことよ？」
「大学？　いや、私は進学する気はないぞ」
「どうせ、大学受験くらいは楽々こなしちゃうんだろうけどね！」
「それは……」
「はいー？　な、なによそれ？」
ソド子が眠そうだった目を、一瞬だけ思い切り見開いた。
相当驚いたらしい。
――しまった。つい、言うつもりもない話をしてしまったか。
「なんでよ!?　あなたの成績だと、私立大学なら選び放題じゃないの？」
「……。大学より大事なことが、私にはあるからな」
まあいい。どのみちこの状態なら、ソド子も忘れてしまうだろう。
それより必要以上に突っかかられるのが嫌で、私は沙織（さおり）くらいにしか明かしていない、自分の進路を口にした。
「高校は、おばぁが出ておけって言うから入ったが……卒業したら、おばぁの近くにいた

いんだ。大洗町にいなくちゃいけない。おばぁは、心臓が悪いからな。側にいてあげたいんだ」

とてもうるさくて、母にそっくりなおばぁは——私にとってはたった一人残された、肉親だからな。

そして、時間は有限だ。

わたしの将来は、後からでもなんとかできる。

でも、おばぁに残された時間は……。

この間も、倒れて入院したからな。

見舞いに行ったら「戦車道？　おまえ、ちゃんと役に立ってんのかい！」なんて、むしろ叱り飛ばされたが。やれやれ。

思い出したら、つい苦笑いが出てしまった。

そうして顔をふと上げると……な、なに？

「うあぁうううう〰〰〰！　け、健気じゃない、あなた――！」

ガラス戸をばんばん叩いて、ソド子が号泣していた。

しまった。眠すぎて、情緒不安定になったのか？

ジャージの袖でずびずばと、鼻までかむ始末だ。

しかもそのまま、私の方に抱きついてきた！　おおお？

「そ、ソド子〜？　や、やめっ」

「抱かせてよ！　抱きしめさせてよ！　もうっ！　がんばりなさいよ、あなた！　ちゃん

とおばあちゃんの側にいてあげるのよ？」
「わ、わかっている。言われなくとも……」
「その前に、無事に卒業しないとダメよ？　ねえ！」
「……ああ。でないとおばぁのところに行っても、張り倒されてしまうからな」
「そーよ！　卒業のためには、学校よ！　学校を守らないと！」
「ソド子？　ああ、また話に脈絡が～」
「決勝で勝つの！　勝って、優勝して、大洗女子学園を廃校から救うのよ！　冷泉麻子！」
「うん、わかってるから。ソド子ー」
「学校がなくなるのは、嫌。嫌よ！　わたしは、この学校が大好きなんだからぁ！」
いっそうわんわん泣き始めて、手に負えなくなる。
あーあー……。私のジャージがずぶ濡れだ。
が、感情の高ぶったソド子は離してくれない。
「だから風紀委員になったのよ、わたし！　この学校を守るために……わたしはなんの才能もないけど、それでも一生懸命なみんなを守りたいから！」
「？　えっ」
「戦車道チームに参加したのも、そう！　がんばってるあなたたちを、ちょっとでも応援したかったのよ……！　うっく、ひっく」
「ソド子……そうだったのか」

いや、別に、私にはどうでもいい話だが。
「学校、なくさないでよね！」
けれどもその言葉には、どきりとさせられた。
涙で潤んだソド子の瞳が、すぐ目の前にあった。
私だけを真っ直ぐに見つめている。
私は、ゆっくり「ああ」と確かに頷いた。
「もちろんだ」
「約束する？」
「うん？　ああ、いいぞ」
「いーわ。じゃあわたしも、約束してあげる」
ようやく抱きついていた腕を放して、ソド子がなにやらごそごそした。
なんだ？　取り出してきたのは、あの愛用している薄型端末機だ。
その画面になにかを表示させようとするが、どうやら半ば寝ぼけていて、操作がままならないらしい。
やがて「えい、もう！」と諦めて、彼女は再び端末機を仕舞ってしまうが。
「冷泉さん。もし無事に、黒森峰女学園に勝てたなら……消すわよ！」
「？　それは、まさか？」
もしかして。私は瞬時に理解した。
そーよ、とソド子が眠そうな顔で微笑んだ。

「わたしの管理してる、あなたの三桁の遅刻データ、風紀委員権限でまるっと削除してあげるって言ってるのー！」
「‼　ほ、ほんとか、ソド子〜⁉」
おおおおおおお？
……いや、待て。
迂闊に喜ぶな。
こんな状態での口約束など、あてになるだろうか？
なるものか。ぬか喜びは禁物だぞ。
確かに学生自治がモットーの大洗女子では、生徒会のように、各種委員会もある程度の権限を持たされている。
ソド子の言うように、彼女のつけてきた私の個人記録くらいは、あっさり修正できるだろうが……。
「念書だ」
ぽつり、と私は言った。
ソド子の瞼は、いつしかとろんとしていたけれど。
うわ、まだだぞ！
「ちゃんと今の約束を、記録に残してからにしろ、ソド子〰〰！」
「ふぇ？　なにがあ？」
「って、もう怪しいじゃないか！」

まずい。私は脱衣所の、ガラスの引き戸に手をかけた。
こうなったら、ソド子にお湯か水でもぶっかけて、目を覚まさせるしかないぞ！
——などと思ったときには、もう遅かった。
「く————……」
「ソド子？　おい、ソド子——っ」
ずるずるとソド子が頽(くずお)れ、冷たい床に寝転んだ。
揺さぶっても、頬(ほお)を張っても、鼻をつまんでももう起きない。
完全にダウンしてしまったようだ。
待てよ。
と、いうことは——。
「まさか、私が寝床まで運ぶのか？　そ、ソド子おぉおお？」

††

ソド子は意外と、重かった……。
たぶん沙織(さおり)ほどではないだろうが。
しかし私は小柄で華奢(きゃしゃ)だから、女子一人を負(お)ぶって歩く、というのは大変だった。
大浴場に放り込む、ということも考えたが……たぶん後で滅茶苦茶(めちゃくちゃ)怒られるだろうし、
もしかしたら起きずに溺れる可能性もあるからな。

その場合、湯船から引き上げるなんて私には無理だ。
だから選んだのは、ソド子を合宿施設の個室まで運ぶ、というものだった。
まあ、個室の手前の、共有スペースまでで力尽きてしまったが。
ゴモヨさんとパゾ美さんの二人が寝ている、その隣のソファにどうにかソド子を預ける。
くっ、幸せそうな寝顔がちょっと腹立たしいぞ。ええい。
それでも近くの個室から毛布の一枚も持ってきて、ソド子の上にかけてやった。
そして、私は――ふらふらと、その個室へと戻る。
中は、ちょっとしたビジネスホテルのような感じだ。
寮の方が広いから、あまり使うことはないけれど、仮眠を取るには十分なサイズのベッドがきちんと置かれている。
その毛布を剥いだ上に、私はそのまま倒れ込んだ。
ダメだ。
もう動けない～。
シャワーだって浴びてないのに……。
皮肉なものだ。
いろいろ疲れる出来事が多かったのに、最後はソド子が決め手となった。
そうだ。どうやら、ようやく眠れそうだ――。
私は心地よい、気だるい感覚に包まれる。

今、はたして夜中の何時くらいなのか？
あと何時間眠れるだろうか？
そんなことすら確認もせずに。

――ふわ？
私が目を覚ましたのは、体を包む温かさのせいだった。
いや、まだ頭がぼけぼけしているらしい。
目は開いているのに、ぼんやりとしか周囲が見えない。
自分は、どうなっているのだろう？
ただ……わかったのは、あれ？
どうやら寝ているのではなく、なにかに腰掛けているようだ。
どうやって……？
「ちょっと、冷泉（れいぜい）さん！　レマ子！　ちゃんと起きなさいよー！　ここまでしてあげてるんだからっ」
聞き覚えのある声が、近くで私を呼んだ気がした。
うん？
「め、目は開いてますよ！」
「あっ、ダメです！　また閉じちゃいますう！」
他にも、二人いるようだ。

それくらいはなんとかわかった。
「……やっぱりさっき、お湯じゃなくて、シャワーでお水をぶっかけた方がよかったんじゃあ？」
「き、今日が決勝戦じゃなかったら、とっくにやってるわよゴモヨ！　でも下手なことして風邪でもひかれたら、そっちの方が大事じゃない⁉」
「かわりにドライヤー攻撃、いきまーす！」
ぶおー。
今度は温かな風が、私の頭に吹き荒れた。
気持ちいい。気持ちいいぞ、これは。
夢うつつとはこのことか？
瞼（まぶた）の重みを感じながらも、どうにか私は自分の様子を把握した。
私は……寝ぼけながらも、支度をさせられている最中みたいだ。
「ソド子ぉお？」
側（そば）にいる相手を、ようやく認識する。
「そーよ！　やっと起きた？　まったく、三人がかりでも、眠気覚ましにシャワーを浴びせるのは苦労したんだからね！」
「おー……」
シャワー？
そうか。

私は、自分が大型の洗濯機の並ぶ、大浴場の脱衣所にいるのに気付いた。

取り囲むのは、すでに制服に着替えたおかっぱ頭の三人だ。ゴモヨさんとパゾ美さんが、私の体を支えたり、ドライヤーで濡れた体を乾かしている。

そしてソド子が、「ほら、足上げなさいよ！」と、私を着替えさせていた。

うーん、スカートは腰も上げなきゃいけないから、面倒だぞ〜。

いや、わかってる。

起きなくちゃいけない。

どうせ集合時間まで、あと少しなのだろう。

ソド子たちの焦る様子からも、よくわかった。

ただ、体と脳がまだまだ睡眠を欲しているのだ。

眠い、眠すぎる。

あれだけ寝付けなかったのに、一度寝たら今度はなかなか覚醒できないのだから、まったくやっかいなものだな……。

ぐう。

ただ、そのとき――。

「鳴ってるわよ、レマ子！」

なにかが私の手に押しつけられた。

うん？

それは……どうやら携帯電話だ。

私の、か？
にゃーおにゃーお♪　というリズムの着信音は、たぶんそうだ。
私は寝ぼけ頭のまま、誰からの電話かも確認せずに、通話ボタンをプッシュした。
……すると。
『こら！　今日は試合なんだろ？　ちゃんと起きてんだろうね。遅刻なんかしたら許さないよ！』
「！　おばぁ⁉」
いきなり耳元でわめかれて、さすがの私も背筋を伸ばした。
一瞬だけだけどな。
すぐに元通り、瞼がとろんと下がってくる。うう。
だけどそれを見透かしたように、おばぁが電話の向こうで呆れた。
『どうせおまえのことだ、電話で怒鳴った程度で目ぇ覚まさないだろうね。いつも言ってるだろ、何があっても早寝早起き！　やるべきことはテキパキやんだよ！　それが守られてないから……ああ、もう、人の話をちゃんと聞いてんのかい⁉』
「わ、わかったから。起きるから……」
『よし。みなさんに迷惑かけるんじゃないよ！』
威勢のいい声は相変わらずだ。朝っぱらから叱られた私だが、元気そうな様子に少し安心もした。
それにおばぁは機械が苦手だから、電話じゃ必要なこと以外、くどくど長くしゃべらな

い。
いつもみたくぷつりと電話があっさり切られた。
いや、すぐにまたかかってくる。
またおばぁ？
『忘れてたよ！　今日はおまえの試合、見に行くからね！』
「……えっ？」
『ついでにおまえがお世話になってる、学校のみなさんにおはぎ差し入れにいくからね！　そのためだよ！』
「おはぎ!!」
しゃきーん！
私は嘘みたいに目が覚めた。
ぷつんと切れた電話を手に、座らされていたマッサージチェアからすっくと立つ。
おお！　と驚くのは、私を取り巻いていた風紀委員の三人だった。
「やればできるじゃない、冷泉さん！」
ソド子がやれやれ、と一息吐いた。
おはぎ……。
「よかった、これで間に合いますね！」
「って、五時半まであと十五分ですよ？　行きましょう！」
ゴモヨさんとパゾ美さんが動き出した。

甘い……おはぎ。
しかし、私は――。
ぼすんっ。
再び、マッサージチェアのクッションに沈んだ。
「ちょっ、なにやってるのよ、このレマ子――!?」
「……あと、十分だけ。頼む……」



ソド子が怒るが、私は意地でもマッサージチェアから離れなかった。

五分後に、続けて沙織(さおり)からの「今どこにいるの!?」という、モーニングコールがくるまで。

5　強いよ！　怖いよ！　黒森峰！

まだ夜も明けきらない早朝、午前五時半――。

私、武部沙織はばっちり支度して、大洗女子学園の倉庫前に到着したよ。

時間ぴったりなのが、できる女子って感じだよね～。

遅れるのは論外だけど、早く着くと「待ってないよ、今きたとこ」なーんて、カレに花を持たせられなくなるし？

「おっはよ！」

だから倉庫の前には、ネイビーのパンツァージャケットを着込んだみんなが集まってた。

倉庫から出した、私たち大洗女子の八台の戦車。その真ん中の、のっぺりとした戦車「38t改造ヘッツァー仕様」の上に立つのは、カメさんチームの生徒会三人だよ。ツインテール髪がトレードマークの小柄な会長、角谷先輩。それと胸の大きな副会長の小山先輩に、片眼鏡の広報、河嶋先輩！

私と一緒にわらわら集まってきた人員で、どうやら全員そろったみたい。

砲塔二つの「M3リー」の前に、ウサギさんチームの一年生六人が。

背が低くて砲塔のない「Ⅲ号突撃砲」戦車には、ジャケットに帽子やマントを組み合わせた、カバさんチームの歴女さんたち四人が。

鋲だらけの中戦車「八九式」には、アヒルさんチームの元バレー部四人組が。

カモっぽい形の「ルノーB1bis」に、風紀委員のカモさんチーム三人が。

角張ったスタイルの「三式チヌ」にもう乗ってるのは、いきなり初参加となる、ゲーマーチームのねこにゃーさんたち三人だよ。

さらに、重くて強そうな「ポルシェティーガー」に取り付いて整備してた、自動車部の四人と——シュルツェンとかいう装甲板をつけた「Ⅳ号戦車」の前に並んだ、私の属するあんこうチーム！

「おはようございます。沙織さん」

真っ先に挨拶を返してくれたのは、一年、二年と同じクラスの華だよ。

その隣でゆかりんがびしっ、と敬礼を決めた。

「おはようございます、武部殿～！」

「……おは、よう」

むにゃ。とどーにか反応するのは、朝に弱い麻子だよ。

——何度か電話して、ようやくつい十五分前に出てくれたけど。よ、よかったー。ちゃんと間に合って！

って、あれ？

もう一人……一番大事なコがいないよ？

私たち大洗女子戦車道チームの隊長で、あんこうチームの戦車長でもある……。

「あ。お、おはようっ、武部さん！」

「！　なんだ、みぽりん。そんなとこにいたんだー」

ひょっこり姿を見せた、肩で髪を切りそろえた女の子、西住みほ——みぽりん。
彼女はⅣ号戦車の後ろから、車体を眺めながら歩いてくる。
ただ、その表情に私ははっ、とさせられちゃった。
ううん。私以外の、華やゆかりん、眠そうだった麻子までも。
普段のみぽりんたら、けっこう抜けてるところがあるんだよね。うっかりコケそうになったりもするし。
でも、今日は朝からまるで違った。
……戦車に乗ってるときの、「西住流」モードなみぽりんだよ。
そして彼女はそっと、Ⅳ号戦車に手を置いた。
言葉はきっと、いらなかった——。
私たち四人も、自然とそこに続いたよ。
みぽりんを取り囲むように左右から、同じように手を重ねる。
「みんな……」
ふっ、とみぽりんが笑った。
うん、私たちだって！
準備はきっと万端だから。今日までにやれることは皆、精一杯やったはず。
あんこうチームの私たちだけじゃなくて。生徒会も一年生もバレー部も、歴女さんたちも風紀委員のソド子さんたちや、自動車部やゲーマーのねこにゃーさんたちだって……！
「もうすぐ港に着く時間だ！　総員、戦車搭乗ー!!」

全員の確認が取れてか、広報の河嶋先輩がついにメガホンでそう命じた。
行くよ。
ついに、戦車道全国大会の決勝戦会場へ！

ゆっくりと、白かった空が青色に変わってくる――。
その下を私たち大洗女子チームは戦車ごと、鹿島臨海鉄道線に揺られていた。
学園艦から大洗の港に降りた私たちは、そのまま大洗駅で、専用の輸送車両に乗り込んだの。
床だけの台車が連結されてて、そこに私たちは戦車を一台ずつ載せて、がたんごとんと運ばれてく。
田園を抜けて――さすがに早かったせいで、Ⅳ号の中では麻子以外でも、みんなでこっくり船をこいでたけど。
「！　富士山だ……」
一人、開け放した戦車の窓から外をみてたみぽりんが、ぽつりと言った。
富士山？　私も華も、さっきまで「もう、そこはレオパルド2の滑腔砲ですよ」とかなんとか寝ぼけてたゆかりんも、はっと目を覚ます。
ふわーー！　ほんとだ、富士山だ～！
「東富士ですね。今日は空も快晴ですし、すごくきれいです」
華が外に顔を出して、風に黒髪をなびかせた。

その脇から広がる雄大な裾野を眺めて、ゆかりんが目をうるうるさせてたよ。
「こ、ここで試合ができるなんて……今から感激です！」
「？　そんなにすごいとこなの、ゆかりん？」
「はい！　戦車道の聖地です！」
聖地？　へえー。
ゆかりんに説明されて、私はなんとなく理解した。
——確かに、電車が到着したそこは、今までの試合会場以上に盛況だった。
ちょん、と手を伸ばして私は麻子をつっついた。
「ほら、麻子。ついたよ～」
「……うむ」
ようやく起きた麻子が、先に降りたヘッツァーとかⅢ突の後を追い、Ⅳ号戦車を地面に降ろす。
試合がある私たちは、そのままフィールドとなる、広大な丘陵地帯を目指すけれど。
わー、テントのお店がいっぱい？
それに人だかりもすごい！　準決勝の人の入りなんか、遥かに超えちゃってるよー！
大洗の、「あんこう祭」の人出以上かな？
それどころか私たちの戦車が、一台ずつ搬入できる、屋根付きのパドックなんてのまで組まれてたよ。
「これが、決勝戦なんだねー」

巨大モニターの設置された、すごくおっきな観覧席の裏を通って、Ⅳ号戦車はパドックに入る。

すぐにわらわらとⅣ号から降りて、私たちはいつものように、試合前の準備に入った。

レギュレーションの最終チェック待ちまでに、最後の点検作業をするよ。

その最中になんか麻子が、「これ、おばぁから差し入れ」って、風呂敷に包まれたおはぎを持ってきてくれたけど。

わ！　麻子のお婆ちゃん、わざわざ見に来てくれてるんだね！

おはぎも、すごくおいしかった～。大洗女子のみんなで分け合って、お腹も気力も充実、だよっ！

そして、ついにそのときがやってくる――。

†

八台の戦車と、二十台の戦車が向かい合う。

その前に、同じように並ぶのは、もちろん私たちと黒森峰女学園のチームだよ。

歓声と熱気が、観覧席からこっちに届く。

あまりに人が多すぎて、なに言ってるかはわかんないけどさ。ううん、その中にイケメンさんがいるかどうかも見渡せないほど、私は緊張しちゃってた。ううー。

すー、はー。落ち着かないと。

……緊張は他の人にも伝わるものだから、私はこっそり深呼吸する。
よし、もう平気。
ちらりと、隣に立つみぽりんを盗み見た。
緊張してるかな？　って思ったけど、大丈夫。
みぽりんは相変わらず、チームの隊長モードに切り替わってた。
すごく集中してるみたい！
「両チーム、隊長か副隊長、こちらへ！」
そして、ついに審判からそう呼ばれる。
今日の試合の審判は……あ！　蝶野教官！
胸元に「ＪＵＤＧＥ」のプレートを提げて、きびきびと合図した。
私たち大洗女子チームを指導してくれた、とっても美人なモテ教官だよ～。
だけど今日は、こちらもみぽりんみたくいつも以上にきりりとしてた。
そもそも蝶野教官は、私たちが教え子だからって、変な肩入れなんかしない。公平に、すべてをきちんと仕切ってくれる。
だから私たちは全力で、今までやってきたことを相手にぶつけるだけなんだ。
「はい」
みぽりんが頷いて、隊長として前に進んだ。
同様に、黒森峰からも隊長の、みぽりんのお姉さんが……。
あ、あれ？　違う。

すっと列から出てきたのは、黒いジャケットを着た、きつい目つきの女の子。
だ、誰？
「お久しぶり」
と、いきなりその人はみぽりんに話しかけた。知り合い？
って、そっか。みぽりんはもともと、黒森峰女学園から転校してきたんだった。
んで、向こうの戦車道チームに所属してて。
「忘れてないわよね？　今年副隊長になった、逸見エリカよ」
ぺこ、って一礼したみぽりんに対して、エリカって名乗ったコはなんだか突き放したように言う。
それどころか。
「弱小チームだと、あなたでも隊長になれるのね」
なんて、いきなり――えええ？
なんか、超失礼じゃん⁉
みぽりんもさすがに、大きく息を吸い込んだ。
「わ、わたしは」
「一年前の、あのときのこと。私は忘れてないわよ」
「あ……」
「見てなさい。黒森峰の副隊長がどんなものか、私が教えてあげる。あなたを叩き潰してね」

「……！」
「はい、そこまで。必要以上の挑発は慎むように」



タイミング良く割って入ったのは、審判の蝶野教官だった。
さすがにぴしゃりとやり込められて、エリカってコも押し黙る。
「では、フラッグ車の確認をします。大洗女子学園はⅣ号、黒森峰女学園はティーガーI。間違いないですね」
蝶野教官は、二つのチームのそれぞれ一台ずつに、フラッグがつけられてるのを見て言った。
そう、決勝はフラッグ戦に決まったの。
——こうして相手の戦車を前にして、ほんとによかったって私は感じる。
だってこっちは八台きりなのに、向こうはずらりと二十台もあるんだもん。
数で圧倒されてると、こっちも勝ち目薄いから。
でも、フラッグ車さえ倒せば勝てるなら……勝機は十分にある、はず！
もちろん、気楽に構えてるわけじゃない。
だって、あのね。
……相手の戦車には、明らかにサイズのおかしいのもあったし。
気にしないようにしてたけどさ、さっきまでみんなでざわついてた。
「マウス、ですね……まさか、あんなものまで持ち出してくるなんて」
ゆかりんがそう、敵戦車の名前を呟いたのは聞いてた。
まうす、って「ネズミ」って意味だよね？
だけどそのかわいらしさとは裏腹に、その戦車は超でっかいの！

なんか、動く要塞って感じ？
たぶん、Ⅳ号より二回りか、それ以上は大きいよ……。
幸いフラッグ車は、みぽりんのお姉さんの乗る、ティーガーとかいうのに決まったみたいだけどね。
あ、あんなおっきいのがフラッグ車になったら、倒すだけでも大変だよ！
ただ、「マウスは圧倒的ですけど、足は遅いんですよね」なんてゆかりんが補足してたから、戦いようはあるんだろうけど。
「では、両校整列！」
蝶野教官が取り仕切り、みぽりんがこっちに帰ってきた。
でも、ちょっと落ち込んでるみたい？
ちらちらと気にするのは、同じように自分の陣営に戻っていく、副隊長のエリカのこと。
ううん。エリカってコの方こそ、みぽりんをずっと睨(にら)んでた。
な、なんで？
「みぽりん、大丈夫？　なんか絡まれたっぽいけどさ」
だからつい、私はみぽりんに声をかけた。
「うん、ちょっと」
みぽりんが力なく笑ったよ。
「ちゃんと話、できなかったから……」

「？　それって」
エリカってコに？
……それとも隊長の、お姉さんが出てこなかったから？
私にはそのあたり、ちょっと判別できなかった。
でも、みぽりんは私たちと一緒に並んで、すぐに表情を引き締める。
「ありがとう武部さん、心配してくれて。でも大丈夫。今は、わたしは大洗女子の隊長だから」
みぽりんはしゃん、と背筋を伸ばして真っ直ぐに前を向いた。
もしかしたら――あのエリカってコと、以前なにかあったのかもしれない。
それは今、わからないけど。
「両校、挨拶！」
「「よろしくお願いします！」」
私たちも黒森峰も、蝶野教官の呼びかけで、同時に深々とお辞儀した。
そう、ついに決勝戦が始まるんだ。

「では、試合開始地点に移動！　お互いの健闘を祈ってるわ」
蝶野教官の仕切りで、私たち両陣営はそれぞれ戦車に乗り込んで、二手に分かれた。
富士山に見下ろされる、広大な丘陵地――。
そこの東側に私たちが。西側に向かったのは、黒森峰の戦車だよ。

フィールドは、かなり広い。私はⅣ号の通信手席で、ホワイトボードに貼った地図を確認する。

とりあえず全体図の一枚を使ってるけど、それ以外にも細かいところの地図だって、何枚も用意してるよ。

というのも「戦車道の聖地」ってのは、そのとおりみたい。川に、森に、市街地に……戦車でいろんな戦い方ができるよう、意図的なつくりをしてたんだもの。

それを利用するか、逆に相手に利用されるかは、まさに状況次第かも。

ごくり、って私は今から唾を飲み込んだ。

だけど、みぽりんは颯爽と指示を出す。

「相手はおそらく火力にものを言わせて、一気に攻めてきます。その前に有利な場所に移動して、長期戦に持ち込みましょう」

Ⅳ号戦車の戦車長席から、肉声で私たちあんこうチームに。

同時に喉のマイクで、他のチームに無線を飛ばした。

「相手との開始距離は離れていますので、すぐには遭遇することはないと思います。すでに打ち合わせしておいたとおりですが、試合開始と同時に、速やかに207地点に移動してください」

207、207っと。私は地図上でチェックする。

そこはこんもりと、高くなった丘の頂上。そう、ここを戦車で押さえれば、一種の「要塞」になる——ってのが、みぽりんの戦略なんだよね。

数で負けてる私たちは、相手より工夫しなきゃ勝てないもん。うんっ。
そして――試合開始を告げる、花火がぽんっ、て空に上がった。
『決勝戦、開始‼』
ヘッドホンをした私の耳に、蝶野教官の声が届いた。
「大洗女子、パンツァー・フォー！」
みぽりんが叫ぶ。操縦席の麻子が、がこんってレバーを操作した。
ごわっ！　とエンジンの唸りを上げて、Ⅳ号戦車が走り出す。
そこに他の戦車たちの、大地を走る履帯の音がきゅらきゅらと響いたよ。
２０７地点までは、あんこうチームのⅣ号が先頭になって、まっしぐらに目指してく。
相手は、見えない。私も窓の隙間から前を見て、確認する。
だよねー、相手のスタート位置は２０７地点より、かなり遠いはずだし。
だからこそこっちは迅速に陣取れるポイントとして、選んだんだよね。
「こちらあんこうチーム。目標地点まであと2キロ。今のところ黒森峰の姿は見えません」
私は落ち着いて、地図から現在位置を把握して、みんなに伝える。
通信手のお仕事だもん。
「ですが皆さん、油断せず、気を引き締めていきましょう。交信終わります」
「あれ、なんか話し方変わりました？　武部殿～」

するとふいに、装塡手席からゆかりんが言う。
ん？　そう？
「ほんと、余裕を感じます」
砲手席に座る、華まで。
えっ、まあ、まだ敵さん現れてないし。……それに。
「そりゃもう、二級免許もちゃんと取ったしね！」
「別に、大差ない」
でも隣の操縦席にいる麻子が、素っ気なく呟く。
もー。
「なによー。ほれほれ麻子～、プロっぽいって言ってみ？」
「いや、だって、沙織のはプロじゃなくてアマチュア無線の免許だし」
「あ……」
確かに。そーいやそうでした。くすん。
――なんてやり取りを、のんびり交わしてたそのとき。
ドン！　ドン！　……って、きゃああ⁉
いきなりすごい音が、近くでした！
それは間違いなく、着弾？　Ⅳ号の周囲で土煙が舞い上がる。
麻子が慌ててⅣ号を、直進から回避運動へと切り替えた。

当たらなかったようだけど……敵⁉
『なにっ？』
『もう来た⁉』
『うそ――――！』
無線越しに、驚く他のチームの声が聞こえる。
それは、すぐに周囲を確認したみぽりんも同様で。
『右手の、森の中⁉　そんな、あんな場所をショートカットして、もうこんなところまで……！』
え、どこ？　Ⅳ号の右前方にある通信手席からも、戦車の右側が窓から見える。
でもそこに生い茂る森の向こうに、戦車の姿は見えないよ？
ううん、いる！
普通は戦車が通れない、ぎりぎりの木の間をうねうね抜けて、こっちに向かってきてる影が！
そして正面を向いて、私たちを捉えた瞬間、砲撃を――。
『うわぁ――っ！』
『いきなり、なにこれ～！』
『なによ、前が見えないじゃない！』
ものすごい砲弾の嵐に、すさまじい音と土煙が大洗女子の戦車を襲った。
届く無線の声も、掠れちゃう！

特にフラッグ車のⅣ号は、集中的に狙われてる？
麻子がどうにかうまく、逃げてるけど。
「すごすぎる……」
私はもう、そんな言葉しか出てこなかった。
華もゆかりんも呆然と、「いきなりモーレツですね」とか「これが西住流⁉」だなんて漏らす。
……だけどこっちだって、西住流の隊長がいるもんっ。
「撃てば必中、守りは固く、進む姿は乱れなし……お姉ちゃんっ、さすが。だけど！　各車輛、できるだけジグザグに動いて、こちらも森に入ります！　ついてきてください！」
みぽりんが鋭く命じた。
森に？　そっか、相手が通れるなら、こっちだって。
「それまでは、いつかの『ところてん作戦』でしのぎます！」
って、砲撃の中――みぽりんたら戦車の外へと身を乗り出した。
うわ！　あ、そっか。プラウダ高校との試合で効果的だった、「敵の砲口がこっちを向いた瞬間に急停止」作戦だね？
そうだよ、私たちはどのみち、戦車の数でも性能でも相手に劣ってる。
だからこそみぽりんと一緒に、作戦だけは練ってきたんだから！
でも。
『！　向こうもジグザグに……こっちと同じ⁉』

って、みぽりんが驚いた。
え、なに？
『森の中だから、じゃない！　わたしたちのこと研究されてる！』
「ええぇ、マジで？　そんなの、やばいじゃゃんっ⁉」
私もさすがにびっくりする。
「過去の作戦は使えないか？　やるな」
麻子が思わずそう漏らしたけど、でも今ジグザグ走行をやめるわけにはいかないよ。
敵の攻撃が当たっちゃう！
「互角ってことですか？　いえ、数では敵の方が有利ですから」
撃ち返しながらも、華が分析した。
「敵にとっては確実な方法です！　でも、練度が高くなければこっちに合わせられません！　それができてこそ、初めて真正面から当たりにこれる……車輌性能よりも、実力に裏打ちされた正攻法、まさにグデーリアンの言う『厚い皮膚より速い足』ですー！」
なんかゆかりんがわめいた。て、敵が強いのはわかってるよぉお〜！
だけど。
『違う！　西住流なら、まだっ！』
そう否定したのはみぽりんだった。
へ？　私は思わず、戦車長席の方を見上げる。
そこではみぽりんが、せわしなく砲撃される右側じゃなく、真逆の左手を見ていて

――。

『！　いたっ、冷泉さん！　一輌だけ反対側から狙ってる！　森からの砲撃は全部、囮なの！　急停止!!』

そしてみぽりんの悲鳴のような声が飛んだ。

けどそれは、直接麻子には聞こえない。通信手の私が即座に伝えないと！

もちろん私は「麻子、急停止ー！」って、必死に言った。

でもそれが、致命的な時間差を生む。

「ああ――――!!」

――衝撃が、Ⅳ号戦車を包み込んだ。

やら、れた……？

がくがく揺れるⅣ号の中で、私はお尻のクッションに押しつけられる。

まさか……そんな。私たち、フラッグ車なのに？

だけど、撃たれたのはⅣ号戦車じゃなかった。

『あれっ、ギア間違ったの？　いきなりバックし……きゃ～～～～～～!!』

なんて通信が、直前で入って途切れた。

『！　三式、アリクイさんチーム!?』

みぽりんが確認する。アリクイさん？

それは最後に仲間に加わった、三式チヌのねこにゃーさんたちゲーマーチーム。

揺れるⅣ号の中で、私の側(そば)にあったホワイトボードから、偶然アリクイのマグネットが外れて落ちた。
遅れて、私も認識する。
Ⅳ号の左側から、なぜかバックで走ってきた三式戦車が、そのまま跳(は)ねてた。地面にバウンドして、履帯(りたい)を激しく軋(きし)ませながらようやく止まる。
その側面には、砲弾の跡！
Ⅳ号が揺れたのは、撃たれて跳ばされた三式と、軽く接触したからみたい。
こっちには、幸い大きな損傷はなかった。
でも三式は……ばしゃっ、とやがて白旗が上がる。ああー！
『大洗三式、走行不能！』
蝶野(ちょうの)教官からのジャッジが下された。
『や、やられた～～～！　ゲームだと、もっと簡単だったのにぃ』
ねこにゃーさんから、泣きそうな声が。
『隊長の西住(にしずみ)です！　ケガは⁉』
『みんな、大丈夫～。……敗因は、間違ってバックギアに入っちゃったことみたい』
真っ先に心配したみぽりんに、ねこにゃーさんが応答する。
『もうゲームオーバーになっちゃった……。ご、ごめんね西住さん』
『ううん、いいの。その偶然のおかげで、フラッグ車は助かったから。アリクイさんチームの犠牲で、わたしたちはまだ戦えます。ありがとう！』

……そーだよ、みぽりんの言うとおり！
まだ試合は終わってない。
それどころか、敵の攻撃は続いていて――。
『こうなったら……「もくもく作戦」で、活路を見出しますっ！』
ついにみぽりんが、そう決断した。
側で直接指示を聞いてたゆかりんが、「はいっ！」って即座に反応する。
取り出してくるのは赤い、発煙筒だよ。
「もくもく用意！」
そしてタイミングを計るのは、私の役目。無線を通してみんなに通達する。
やがて『もくもく準備完了！』『こちらも完了です』『レオポンチームも完了しました！』って、続々と報告が来た。
レオぽんチームは自動車部の、ポルシェティーガーのこと。「虎に一番近いの！」ってことで、余ってたマグネットをあてがったんだよね。
いや……でもこのデザイン、ただのヒョウさんなんだけどなー。
なんでレオぽん、ってライオンさんみたいな名前で呼ぶんだろ？
ううん、そんなことより――みぽりん考案のもくもく作戦のポイントは、そのレオぽんチームにあったりするの。
「みんなOKだって！」
私はみぽりんに報告を上げた。

『もくもく、始め！』
みぽりんは合図をして、自分もゆかりんから受け取った発煙筒を車外に投げた。
ばしゅ！　って音があちこちからして、あっという間に白煙が、残った七台の戦車を包む。
同時に、敵の攻撃が止まった？
「効果あり、ですかね⁉」
ゆかりんが息を呑む。
隣で華が、張り付いていた照準器から顔を離した。
「これだけの煙幕ですから、狙いが付けられるはずありません」
うん、砲手の華が言うんだから間違いないよー。
だってⅣ号からも、敵の姿はまったく見えないし。
せいぜい目視できるのは、近くの味方の戦車くらいだもん。
だけど、「……手強いな」ってぼそりと言ったのは、麻子だよ。
「無駄弾を撃ってくれればいいのに、それをしないとは」
あ……。
そ、そういう見方もできるんだ？
だけど、もくもく作戦の目的は、時間を稼ぐことだから。
『今のうちに、最初のルートで一気に丘を駆け上がります！　森ルートより危険は増しますが……あえて時間短縮を優先します！』

この隙に、みぽりんが決断を下す。
すると煙の向こうでわらわらと、戦車内から人が降りてきた。
あれは、ポルシェティーガーの自動車部さんたちだよ。
肩には、輪っかにされたワイヤーが担がれてた。その一端をティーガーに、もう一端を手近な他の戦車に引っかける。ううん、Ⅳ号の後ろにも！
――実は、うちの戦車で重いのに一番パワーないのが、ポルシェティーガーなんだって。
それをどうにかカバーして、斜面を一緒に駆け上がるためには、他の戦車で牽引するしかなくて。
『敵が静観に徹しているのは、ポルシェティーガーを抱えたまま、わたしたちが最短コースを取るとは想像していないからです！　煙幕が晴れないうちに全車、パンツァー・フォー‼』
さあ、いくしかない！　私たちは全員、みぽりんの判断を信じるよ。
麻子がⅣ号を走らせる。
ぴん！　とワイヤーが貼ったせいか、その足はいつもより遅かった。
「さすがに重い……」
麻子がつい、エンジンを唸らせながらぽつりと漏らす。
それでもポルシェティーガーをつれて、大洗女子の戦車は前へ進んだ。
って、やばいやばい！　もう煙が晴れちゃうよ～！

『煙幕追加！』
すかさず砲撃の音がした直後、みぽりんが通達した。
えいっ、て前を行く八九式から、バレー部の磯辺さんがアタックみたいに発煙筒を放ったよ。
さらにみぽりんが八九式と、ルノーB1に指示を出す。
『アヒルさん、カモさん！　「パラリラ作戦」です！』
それは他の戦車に比べて、エンジンのパワーが弱いからこそ選ばれた二台。
前の八九式の後部から、ワイヤーが切り離された。そのまま煙をかき混ぜるように、単独でジグザグ走行を始める。
もちろん風紀委員のルノーも、同じ動きをしてるはず。
私からは見えないから、Ⅳ号より後ろの位置かな？
『なによ、この作戦！　わたし不良になったみたいじゃない！』
なんてソド子さんの愚痴が、威勢良く聞こえてきた。あはは。
『お尻が痛い……』
そうぼやいたのは、バレー部のアヒルさんからかな？
だけど、この作戦はけっこう効果的みたい。
煙はうまく拡散して、黒森峰の砲撃が止まったもの。
だけど、牽引する戦車が減ったぶん、私たちの足はがくんと遅くなった。
『あと少しっ』

みぽりんがじれる。
うー、こっちもどきどきしちゃう。告白の返事待ちみたいに、心臓に悪いようぅ。
それでも――どうにがぎりぎり、丘の上まで登り切った。やったあ！
『守りを固めてください！』
でもみぽりんは気を抜かない。おっと、私も気を引き締める。
各戦車はそれぞれ、丘の上から見下ろすように、霧の晴れた下側に向いた。そこにはもちろん、森から出てきた黒森峰の戦車がいる。
ううっ、十台以上はいるよ～！
ほとんど、全部？　あのおっきな、マウスとかいうのがいないのは幸いだけどさ。あれは足が遅いし大柄だから、森を抜けてこられなかったのかな？
なんて思ってるうちに、黒森峰の戦車たちが散開した。
えっ、なになに？
ウソっ、囲まれる？
『相手は数で押してきます！　こちらは……有利な位置取りのうちに、撃ちまくってください！　砲撃始め！』
敵の動きも速ければ、みぽりんの決断も早いよ。私たち大洗女子チーム（おおあらいじょし）は一斉に、丘の上から撃ち始めた。
ひゃ～、すごい音、すごい煙！　撃ち降ろしは、平地よりコツがいるみたいなんだけど、相手から砲身以外を隠して撃てるからいいみたい。

まさに、丘の頂上がまるっと要塞になった感じだよ。
その成果は、すぐに出る。
『黒森峰、パンターの白旗を確認！』
やった！　蝶野教官からのジャッジで、相手を一台やっつけたのがわかる。
ううん、それだけでは終わらないよ。
『続いて黒森峰の、Ⅳ号駆逐戦車も白旗！』
「すごい！　今のは五十鈴殿の砲撃ですよ！」
新しい弾を込めながら、ゆかりんが目を見張った。これで、二台！
でも――。
「発射！　……えっ？」
勢いに乗る華だけど、次の瞬間絶句する。はい？
って、私もその理由を、Ⅳ号の窓越しに見てた。
なに、あれ……。正面から真っ直ぐ、こっちに向かってくる敵戦車が一台。それに、華の撃った弾は当たった。
はず、だよね？
なのに……がいん！　って弾かれた？　えええええ!?
「正面が抜けない……！　あれはっ」
「や、ヤークトティーガーです！　前面装甲250mmは、ダテじゃありませーん！」
悔しがる華の横で、ゆかりんが解説する。

「あれじゃあⅣ号の長砲身でも、Ⅲ突でも真正面からじゃあ無理です！　向こうにとってはまさに、正攻法ですよ！」
『せっかくここまで来たのに、このままだと撃ち負ける⁉』
『さ、さすが黒森峰っ』
『マルタの大包囲戦のようだ……あれは囲まれたマルタ騎士団が、オスマン帝国を撃退したが』
『こっちがここを要塞にすること、見越してたみたい？　ううう』
通信越しに、みんなの嘆きが聞こえてくる。
そこにみぽりんも加わった。
『鉄の心、鋼の掟。それが西住流……だからこそ、奇をてらわず王道で、圧倒してくる』
でも。大丈夫、みぽりんはそれをちゃんと見越してた。
『二輌撃破で、十八対七。もう少し潰したかったけど、頃合いです！　ここから撤退します！』
退路は塞がれているけれど、私たちに毅然と言い放つ。
そのための布石は、すでに仕込み済みだったから。
『カメさんチームへ！　──「おちょくり作戦」始めてください！』

† †

了解、なんて返事はヘッドホンには入ってこない。
それもそのはず。丘の上に集まった戦車は、実は七台中の六台のみ。
……カメさんチームのヘッツァーだけが、いなくなってた。
それは煙に紛れて、ポルシェティーガーを引っ張ってたときからそう。生徒会の三人を乗せたヘッツァーは、単独で私たちから離脱してたの。
そして向こうの無線が届かないほど、離れた位置にまでいるようだけど——Ⅳ号の指示は聞こえてるはず。
だって、私の前にある無線機の周波数は、遠くまで飛ばせるんだもん！
だから。
『黒森峰(くろもりみね)、パンター行動不能！　白旗！』
そんなジャッジが、やがて届いた。
わ、わっ！　これって……。
『生徒会のヘッツァーが、引っかき回してる！』
みぽりんもそう認識する。それが正しいことは、すぐにわかった。
目の前で、包囲していた黒森峰の陣形が乱れる。
その中を、森の中から飛び出して駆け回るのは、間違いなくヘッツァーだった。
遠目でも、車体に貼られたカメさんマークが眩(まぶ)しいよ～。
なんかバンバン相手の履帯(りたい)を狙って、当ててる？
あー、あれは河嶋(かわしま)先輩じゃなくて、会長さんが砲手やってるね。

『ガガッさすが会長！　あえて突っ込んだ方が、同士撃ちになるため、意外と安全なんですね！　ガッ無謀な作戦とばかり思ってましたーガガガ！』
とか、河嶋先輩の嬉々とした通信も、やがて雑音混じりに入ってくるし。
あ、確かに黒森峰がもたついてるのは、互いに撃ち合う形になるのを避けてるせいみたい。
その隙に、なんとヘッツァーが、さらに一台倒しちゃう。
『黒森峰のⅣ号、白旗確認！』
わ、わ！　またジャッジが！
すごいよほんとに～！
『狙い通り……。黒森峰は隊列を組んで正確に動くのは得意だけど、突発的なことには対処できないからっ』
そう、みぽりんが言ったとおり。マニュアルが崩れて、パニックになってる感じだよ。
おかげで、包囲網も崩壊して。
『！　右側の陣形が乱れて……今です！　全車、右方向に突っ込みます！』
車外に頭を出してたみぽりんが、包囲の穴を見逃さない。
麻子がそれに応え、Ⅳ号を駆った。誰よりも早く、一気に坂を下り始める。
『イヤッホー！』
他の戦車からも、そんなノリノリの声が届いた。
とにかく私たちは全速力で、包囲網の外を目指すのよ！

『止まらないで！　この勢いのまま、向こうを振り切ります！』
それはみぽりんの、長期戦を見据えた戦法でもあった。
というか……私たちの勝ち目は、薄い。だからこそ、こちらより装甲が厚いぶん重いっていう、相手の「弱点」をつくの。
長い距離を走れば走るほど、黒森峰の戦車は足回りに負担がかかるし、燃料だって消費するから――。
つまり、私たちは最後まで、フラッグ車のⅣ号だけでも走り続けなくちゃいけない。
なにがあっても。
「やれやれ、スリル満点だな」
要の操縦手である麻子が、ついぼやく。華や味方の弾幕の後押しを受け、鮮やかに黒森峰の戦車の隙間をすり抜けた。
うひー、ぎりっぎり！
だけどⅣ号が道を切り開けば、他のみんなも一気に続くよ。
『やった！』
みぽりんが後方を振り返ってか、包囲網から抜けたことを確認する。
もちろん黒森峰だって、バカじゃない。すぐ追っかけてくるはず。
だけど、それをみぽりんは見越してた。
『みなさん、Ⅳ号にぴったりついてきてください！』
そう一声かけてから、みぽりんたら頭を車内に引っ込めてくる。かわりに戦車長席の、

足元のペダルを踏みしめた。
それは麻子への、連動する背もたれの板を通しての、左右の指示。
右に、左に——タイミングを見計らい、みぽりんがⅣ号の針路をぐにぐにに曲げた。
これは追撃してくる敵の攻撃をかわす、という意味と、もう一つ。
……追撃してくる敵の足回りに、負荷を与えるためなの。
そして、意外と早く結果は出る。
『後ろ、黒森峰はついてこれてません！　もしかして何輌か、故障してる？　やったー！』
最後尾を固めるアヒルさんチームのM3から、喜ぶ一年生が伝えてきた。
おおお、マジ？
だけど一方、その動きはこっちの戦車にも、ある程度影響を及ぼすわけで。
『あっ！　レオポンがぐずりだしたぞ。……ナカジマ、ちょっとなだめてきて！』
自動車部のポルシェティーガーからは、そんな声が。
はい？
「！　冷泉さん、ちょっとだけペース落として！　レオポンチームの動きが遅れてるっ。こっちも故障？」
みぽりんが、戦車長席から後ろを見つつ、麻子に言った。
思わず装填手席から横の扉を開けたゆかりんも、「ぷすんぷすんって、変な音してますね！」って確認する。

だけど、次の瞬間二人とも、ぎょっとしたみたい。
――それは。
「す、すごい。ナカジマさん、壊れたところを走りながら直してる……！」
「さすが自動車部ですね！　頼りになります！」
って、えええ？　ど、どんなことになってんの？
「ああ、バッテリーだけでも走れるようにした成果だな」
そう感心するのは麻子だったよ。え、そうなの？
残念ながら、私の座る通信手席からは見えないけど……ううん、それより。
「だいぶ離しました！」
追いかけてくる敵戦車に狙いを付けようと、華が砲塔を回転させながら、そのことに気付く。
おっとっと。次は私の仕事だよ。急いで、手元の地図に目をやった。
えーと、丘からこっちに駆け下りて、だいたい針路はこうだから……。
「みぽりん、この先に川があるよ！　橋はあるけどかなり遠回りしないとダメみたいっ」
私はルートの報告を上げた。
「どーする？」
「……ルートは、このまま真っ直ぐで！」
橋まで行くよね？　もしくは川を避けちゃう？
そんな意味で私は訊いたんだけれども。みぽりんの判断は、その予想を裏切ってた。

えっ？
「見えてくる川を、みんなで渡ります！」
「川を渡る⁉」
本気ですか？　ってゆかりんもさすがにびっくりした。
だけど、みぽりんの決意は揺らがない。
「大丈夫、ここは自衛隊の演習用につくられたフィールドだから。黒森峰の重戦車ほどじゃないこっちなら、ぎりぎり渡れる深さなはずです！」
喉のマイクでそう告げる。
ええい、みぽりんがそう言うのなら、やるしかないじゃん！
『わ、わかりました！』
『根性ー！』
無線の向こうで、みんなも覚悟を決めたみたい。
麻子もただひたすらに、真っ直ぐⅣ号を走らせた。
そして――すぐに川が見えてくる！
おお、けっこう川幅あるみたい？
「上流には重いポルシェティーガーが、下流には八九式が行ってください。横並びに突っ込んで、車体の軽い八九式が流されないよう、他の車輛で流れを和らげます！」
「……了解」
みぽりんの指示を受け、麻子がⅣ号をくいっ、と曲げる。河原の砂利を踏みしめなが

ら、横に並んだ八九式と、きれいにクロスして入れ替わった。
これで、八九式が下流側のポジションだよね。
他の戦車もその間に、うまくポジション取りできたみたい。
うん、一列横隊の訓練は、教官にみっちり仕込まれたんだから！
「各ハッチ、閉鎖確認！」
って、そーだった。みぽりんに言われて、私たちはわたわたと、それぞれ手近な扉が閉まってるか確認する。
戦車が渡れる深さはせいぜい、砲塔の下くらいまでだけど、装甲の扉が開いてたらそこから浸水しちゃうもんね。
大丈夫、問題なし～。だから、私たちの戦車はそのまま、横並びで川に入った。
ざばんっ！　……うわ、深い⁉
ぐぅわん、って大きく揺れたⅣ号の様子で、私は直感的にそう感じた。水の流れに包まれてる……！
だけど、どうにか鈍足でも、水を押しのけ前に進む。
うん、多少横に滑りながらみたいだけど、履帯が川底をしっかり掴んでる感覚があった。クッション越しでも、お尻に伝わってくるよー。
このまま、いける？
なんて思った、そのとき――。
『か、桂利奈ちゃん、ダメなの？　動かなくなっちゃったよ！』

急に悲鳴が無線に入った。
えっ、今の……一年生の？
はっとして私は、通信手席の視察窓から右手を見た。
そこから真横に、並んで川を渡るルノーB1やⅢ突がいた。そして一番奥にいるポルシェティーガーの巨体の手前に、ちらりとM3リー戦車の姿が。
でも、その動きは止まってる？
「みぽりん！　ウサギさんチームが！」
「！」
私に言われてみぽりんも、外に頭を出してM3を確認した。
M3リー戦車は、ちょうど川の真ん中まで進んだのに、立ち往生しちゃってた。
ど、どうしてー？　まずいよ‼
『ウサギさん！　ギアを上げてみて！』
みぽりんが無線でアドバイスする。
でも、ダメみたい。履帯（りたい）が、派手に水飛沫（みずしぶき）を上げるだけで精一杯？
『こちらレオポン！　一旦バックに入れて、揺り戻せ！』
そう代案を出したのは、さすがの自動車部だったよ。
――けど、それがまったく裏目に出ちゃう。
ぱすんっ！
最後にそんな音を出して、M3戦車の履帯の動きさえ止まった。

ううん、止まったのは履帯だけじゃない。
これって……！
『え、エンジン止まっちゃいましたー！　スイッチを入れても、再スタートしません！
せんぱぁあああい！』
一年生の悲鳴が、最悪の事態を物語っていた。

どうしよう？　どうすれば⁉
さすがのみぽりんも、即決できないみたい。
『やっぱり、ダメみたいです……』
だから覚悟を決めたのは、Ｍ３に乗る一年生たちだった。
『このままだと、黒森峰が追いついてきます！　わたしたちは大丈夫です、隊長たちは早く行ってください！　後で追いかけますから！』
え、そんな……見捨てろ、ってこと？
黒森峰がもうすぐここに来るのは、わかるよ。でも、だからって――！
『！　危ないっ、Ｍ３が傾いてきてるぞ！』
そしてＭ３の隣にいたⅢ突のカバさんチームから、そんな報告が来た。
う、ウソ⁉　私も必死に、窓からふらつくＭ３の姿を追った。
ああっ、やばいよ、あれ！
「このままだと横転しちゃう⁉」
『っ！』
私のヘッドホンに、誰かが大きく息を吸い込んだのが聞こえた。
……それは、みぽりん？
「ここでモタモタしているのは、得策じゃないぞ」

冷静に言うのは麻子。「でもっ」って華が反論する。
「ウサギさんチームが流されたりしたら……！」
「く、黒森峰が来ます！」
外に身を乗り出して、M3と背後を気にしてたゆかりんが報告した。
だけどみぽりんは黙ってた。まるで悩んでるように。
『……一緒だ。あのときと』
ようやく聞こえてきたのは、そんな言葉だったよ。み、みぽりん？
一緒って——あ。私は気付く。
たぶん去年の、同じ決勝戦のこと。みぽりんは水没していく仲間の戦車を助けるために、フラッグ車を離れて……。
あのときと今が、ほとんど同じシチュエーションなんだ！
それでみぽりん、迷ってる？
またフラッグ車を預かる自分が勝手をして、負けたらって？
しかも今回は、私たち大洗女子学園の廃校がかかった試合で——。
でもさ。
「みぽりん。行ってあげなよ」
私は咽喉マイク越しに、一言告げた。
返ってきたのは『!?』っていう動揺の気配だよ。
ううん。みぽりんは……行きたいんでしょ？

去年もそうしたように。
それが、私たちが隊長に選んだ、みぽりんなんだから。
唐突な私の発言に、麻子も華もゆかりんもきょとんとしてた。三人は通信、聞こえてないもんね。
でも私が振り返って戦車長席を見上げれば、その意図はわかったみたい。
以心伝心。私たちは仲間なんだもんっ。
だから。
「大丈夫、こっちは私たちで見てるからさ！」
ね？　ってⅣ号内のみんなに私は笑みを向ける。
外に頭を出してたみぽりんが、席に戻ってきて、私たちの顔を見た。
もちろん私だけじゃなくて、華もゆかりんも麻子だって、気持ちは同じだよ！
「こんなこともあろうかと、予備のワイヤーを持ってきてました！　それとロープも！」
よいしょお！　ってゆかりんが束ねたワイヤーとロープを、みぽりんに手渡した。うわ、ほんと、用意がいいんだから。さすがはゆかりん、「一人サバイバル」だよ！
「時間は稼いでみせますね！」
華がきりきりとハンドルを回して、大砲の角度を調整する。追いかけてきた黒森峰を撃てるように。
麻子はただ、「ん」と短く返答して、親指だけをみぽりんに立てて見せた。
「武部さん、秋山さん。五十鈴さん、冷泉さん……！」

みぽりんが重そうなワイヤーを抱えて、目をうるうるさせる。
もー、まだ早いよ？
「こちらあんこう！　ウサギさんチーム、少しだけ待っててね！　今からうちの隊長が、助けに行きます！」
最後の一押しに、私は無線でそう語りかける。
みぽりんは大きく頷(うなず)くと、戦車長席を蹴って車外に出て行った。
『全車、微速前進！　止まると流れに捕らわれて動けなくなっちゃうから……でもそのま
ま、横一列の状態を維持してください！』
そしてみぽりんが、マイク越しに通達する。
もちろん遠いＭ３リーまで行く方法は、この川の中じゃあただ一つ。
「すごい！　西住(にしずみ)殿、戦車を飛び石のように使って、Ｍ３まで向かってます！」



みぽりんのかわりに戦車長席から頭を出して、ゆかりんが言った。
おおお？　私もその様子を、窓から見る。ほんとだ！
ワイヤーに結んだ軽いロープを腰に繋いで、みぽりんたら戦車の上を跳んでくよ！
「前進することより、仲間を助けることを選ぶとはな……」
Ⅳ号の足を遅く保ちながら、麻子がさすがに呆れ返った。
でもその口元は、苦笑してたよ。もー、素直じゃないんだから。
「みほさんは、やっぱりみほさんですね」
華は嬉しそうに微笑んでた。
だよね！
「だからみんな、西住殿についていけるんです。だからワタシたちは、ここまで来れたんです！」
「ワタシこの試合、絶対に勝ちたいです！　はい！」
装塡手席に戻ってきて、弾を込めながらゆかりんも笑うよ。
「そうですね。みほさんの戦車道が間違ってないことを、証明するためにも」
華ももちろん同意した。
そんなの、私や麻子だって！
「勝つよ！　みぽりんのためにも！　まずはここで踏ん張ろうー！」
「無論だ。負けるつもりはない」
おー！　って、私たちの結束は固い。

ううん、それはあんこうチームだけじゃなくて、他のチームもそう！

「全車、隊長を援護して！　Ｍ３を……ううん、みんな一緒に渡れるように！」

『了解っ！　隊長を守るんだ！』

『後ろに向かって、連続アターック！』

『なによ！　かっこいいじゃないの‼』

ドドドドン！

川の中から、大洗女子の戦車が次々撃った。砲塔がなくて後ろが撃てない、Ⅲ突のカバさんだけ『回転砲塔がうらやましい』なんて、ぼやいてたけどね。

とにかく、ゆかりんも華も大忙しだよ。当てることより牽制を最優先に、撃って撃って撃ちまくる。

どーにか足止めにはなってた。こっちにも敵の弾が飛んでくるけど、大きく外れて、川のあちこちで水柱ができる程度だもん。

ううん、それはなんと、乱入したヘッツァーのおかげもあった。

『うわわわ！　会長、さすがに向こうもバカじゃないです！　これ以上はさすがに無理かと～！』

なんて河嶋先輩の悲鳴が聞こえて、すぐにすたこら逃げたようだけど。

でも、その間にみぽりんが無事、Ｍ３に取り付けたみたい。

そしてロープを引っ張って、結んだワイヤーをたぐり寄せて――。

『こちら西住！　Ｍ３にワイヤーを結び終えました！　みんなで引っ張って！』

や、やったあ！　もちろん私たちは、待ってましたとばかりに全車の速度を上げる。
みぽりんはなんと、Ⅳ号を挟んで逆位置にいる八九式以外の、横一列になってた戦車すべてをワイヤーで繋(つな)いだっぽい。
負荷がかかって、Ⅳ号のエンジンが唸(うな)りを上げた。
窓から見える戦車どうしの間で、一本のワイヤーが順番にぴんと張った。
最後に行き着いたのはもちろん、Ｍ３のところで——ぐぐ、ってＭ３の車体が牽引(けんいん)される。
その直後。
『う、動いた——！　エンジンかかりました！』
一年生の歓喜の声が無線に入った。
わ、やったじゃん！
もちろん私たちは、息を吹き返したウサギさんチームとともに、撃ちながら川を進んだ。急いで、一気に渡っちゃう。
——みんな、無事だよ。川の上手を六台の戦車が登って、川向こうの黒森峰(くろもりみね)を置き去りにする。
残念ながらこっちの砲撃は、当たっても装甲で跳(は)ね返されて、まったく効果はなかったけどさ。
「ありがとう、みんな！」
上手の斜面で足が遅くなった隙に、みぽりんがワイヤーを外して戻ってくる。

「お帰り！」
もちろん私たちは、笑顔で迎えたよ。
ううん、みぽりんは戦車長席に腰を下ろして、軽く胸をなで下ろしただけで切り替える。
「全車、移動します！　目指すは正面の、市街地です！」
そう、ぐずぐずはしてられない。
私たちが目指していた場所は、上手を越えた正面に見えていたから。
そこは、人気のない市街地だった。
――戦車道の演習用につくられた、いわば遮蔽物（しゃへいぶつ）ばかりの場所。
これまで、戦ってるより逃げてる方が多かった、私たちだけど。
「なんとか時間が稼げた。これで市街戦に持ち込める！」
みぽりんの言うとおり。ここが、足で勝負するしかない私たちには、一番有利なフィールドだった。

†

でも、市街地の手前まで来たとき。
「あ。あれ、Ⅲ号だよ！」
私はつい、通信手席で声を上げた。

だって黒森峰の戦車が一台、待ち構えてたんだもん！
確かにそれは、Ⅲ号戦車だよ。うちのⅢ号突撃砲と名前は似てるけど、どっちかって
ゆーとⅣ号にそっくりなヤツ。
まあ、兄弟戦車だからそんなもんかも。形式は、Hかな？　Jかな？
って。あ、あれ？
「つか、一目で戦車の種類がわかっちゃう私って、どうなの⁉」
いつの間に？
……ううん、これって男子的にはポイント高いのかな？　かな？　う～ん。
いや、そんなこと考えてる場合じゃなくて。ま、待ち伏せされてた⁉
「さすが……こっちにも戦力を置いておくなんて、それくらいは当然か」
慌てる私とは違って、みぽりんは落ち着いてたけどね。
でも、あまり楽観視もしてなかった。
「Ⅲ号なら突破できる。けど……まさか一輌だけってことはないはず。そう、お姉ちゃん
なら絶対……！」
え？　そんなみぽりんの予感が、見事に当たることとなった。
……。な、なに、あれ？
壁？
最初は、そんな認識しかできなかった。
数で勝る私たちを見て、市街地に入っていくⅢ号戦車。

でもその向こうにあった建物の壁が、動いてて。
ち、違う！　あれは――。
「こっ、ここでマウスですか――!?」
ゆかりんが叫んだ。あ、あああああ！
あれって、あの二回り以上も大きな、規格外の敵戦車じゃん!!
その姿を前に、『ウソ――！』『卑怯だぁ！』『でかすぎる!?』って、さすがにみんな動揺する。
うん、間近で見たその迫力は……圧倒的すぎるよ！　なんであんなの、動いてんの!?
もう車じゃなくて、まるで鉄でできた「家」じゃん！
マウスなんてかわいい名前じゃなくって、ハウスでいーよ！
「市街地に、マウスを持ってくるなんて……！」
みぽりんはちょっと別な意味で驚いてたみたいだけど。そ、そうだよね？
だってこんな建物がいっぱいなところに、あんなでっかくて、足の遅い戦車なんか……。まともに動き回れるの？
――なんて疑問は、次の瞬間掻き消された。
すんごい、音がした。
それはマウスの大砲が、火を噴いた音。
ごばっ！　って、地面に大穴が空いた。市街地に迫る私たちの、ちょうど中央に着弾する。

それだけで——近くにいた、車体の軽い八九式が跳ね、ごろごろと転がった。
ウソお⁉
『や、やられた～！　いえ、ま、まだやられてません、大丈夫ー！　か、回転レシーブっ』
八九式のアヒルさんチームから、どーにか無事な声が届く。上で汚れたその姿で、奇跡的に履帯でうまく着地してた。
でも、当たってないのにこの威力だよ！
「これが、マウス……！」
さすがのみぽりんも息を呑んでた。
けど、呆然としてる場合じゃない！
「み、みぽりーん！　どうすんの⁉」
「っ！　とにかく、街の中に入るしか……今更引き返すことは不可能です！　それに拓けたここより、市街戦の方がわたしたちに有利です！　なんとしてもマウスの懐に入ってください！」
みぽりんがみんなに通達する。
——要は、突っ込むしかないってこと。ひょえええ！
『でかいからって、いい気にならないでよ！　むしろ大きいぶん、当てやすいんだから！』
ソド子さんが威勢良く、ルノーに砲撃をさせた。

うん、とにかく撃ちながら、街に辿り着かなくちゃ！

だけど。

カーン……。ルノーの放った一発は、マウスにちゃんと当たったのに、甲高い音で弾かれちゃった。

うわ、あ、あんなのアリぃ⁉

そして逆に、マウスのでっかい大砲が、二回目の咆哮を上げる。

今度は――あああああっ！

すごい音に耳がやられる中、ルノーB1が吹っ飛んでた。

一瞬で、私の見てた窓越しの視界からいなくなる。『きゃぁあっ！』ってソド子さんの悲鳴さえ、無線の向こうで掻き消えた。

かわりにやがて聞こえてきたのは、蝶野教官からの冷静な一言のみ。

『……大洗女子、ルノーB1bis、白旗！』

「！　カモさんチームが、やられちゃった⁉」

ソド子さんたちは？　なんて心配してる暇もない。『おのれ！』って今度はⅢ突が反撃したよ。

Ⅲ突の攻撃力なら、あるいは……なんて幻想は、すぐに掻き消された。

やっぱり金属音とともに、弾はあっさり弾かれて。

「ぜ、ぜんぜんダメじゃん⁉」

私は思わず嘆いちゃう。
次の瞬間、またマウスの大砲が吼えた。
……ああ――っ、Ⅲ突が‼
背の低いⅢ突が、爆発とともにぐるぐると水平に回った。履帯が千切れ飛び、地面を滑る。やがて止まってから、白旗がぴょこんと飛び出た。
そんな、そんなっ！
あっという間に、これで――？
『大洗女子、Ⅲ突行動不能！　白旗確認！』
『む、無念〰〰〰っ。我らの歴史に今幕が下りた……無血落城？　それだ！』
『……ゴモヨ、パゾ美、大丈夫？　あーもうっ、まだ戦えたのに～！　なによ、あんな大きな図体してなにがマウスよー！』
カバさんやカモさんからは、元気な声が返ってきたけど、蝶野教官のジャッジがそれらを掻き消した。
連続で、二台もやられたよ！　残りは、四台。
ううん、別行動してる生徒会のヘッツァーを入れれば、どうにか五台だけどさ。
「マウス一輛で、こんなにあっさり……！　むしろ、ここまで誘い込まれたのはわたしたちの方なの？」
みぽりんがいっそう、愕然としてた――。

ううん、違う。
「フラッグ車を潰されなければ、まだいけます！　とにかく、市街地の中へ！」
みぽりんは諦めてなんかいなかった。そうだよね、『諦めないこと、逃げ出さないこと』だもんね！
「全車、マウスに一斉攻撃！　砲身を狙ってください！」
その指示に従って、残った四台の戦車は、とにかくマウスの大砲を狙ったよ。
これで、効果は……なーい！　うわわわ、やっぱりカーンって、跳ね返しちゃうじゃん！
やばいやばいやばいやばい！
そしてマウスから、反撃の砲弾が発射された。すごい、土煙～！
幸い今回は、どの戦車にも当たらなかったみたい。
「まるで歯が立たないのですか⁉」
華が思わず、うわずった声を出した。でも、みぽりんは別の反応をする。
「装甲は抜けなかったけど、向こうの狙いはそらせた……今！　パンツァー・フォー！」
そっか。さっきの集中砲火は、あくまでこっちが市街地に入るまでの、わずかな隙をつくるもので。
撃ったばかりのマウスは、さすがにすぐには対応できない。
その間に私たち、大洗女子の四台の戦車が真っ直ぐに、市街地に踏み込むよ。
——そこを邪魔するように立ちはだかったのは、マウスの側にいた、敵のⅢ号戦車だけ

ど。

『あ、今のうちだ！』

うん？　今の、自動車部のレオぽんチーム？

って、Ⅳ号の斜め前を走ってたポルシェティーガーが、そのまま撃った。

普通は走りながらの砲撃は、命中率が下がっちゃうからしないんだけどさ。

……あ、当たったー⁉

ほんと、偶然って感じみたい。撃ったレオぽんチームからも、『やったー！』とか、すごく喜んでるのが聞こえてくる。出会い頭の一発、ってあるよね～。

『黒森峰（くろもりみね）、Ⅲ号戦車に白旗！』

相手には、白旗のジャッジが下った。

おおお、これで敵は……十五かな？　私はホワイトボードのマグネットをざっと数える。

だけど問題はその中の、一発では倒せない、規格外の一台にあるわけで……。

ようやく私たちは、市街地のアスファルトで固められた路面を踏みしめた。

そのときにはマウスが長い砲身を、ゆっくり動きながら向けてくる。

や、やばい！

『うひー！』

狙われたのはさっきⅢ号を倒した、ポルシェティーガーだよ。自動車部は大急ぎで、手近な建物の陰に車体を隠した。

だけど、マウスは構わず撃つ。……た、建物がまるごと、吹っ飛んじゃったー！
ポルシェティーガーの姿が丸見えだよ！
もちろんすぐにポルシェティーガーは、その位置から逃げ出した。
「マウス、すごいですね……。重量188トンはダテじゃありません！　足は遅いですが、前も後ろも、どこも抜けるとこがないですよう！」
ゆかりんがあっけにとられながらも、感心する。もー、そんな場合じゃないってば。
だって狙われるのは、レオぽんチームだけじゃないもん。
今度は……あわわわっ、私たちⅣ号!?
「！」
麻子(まこ)が慌ててバックに切り替え、間一髪移動した。
直後、さっきまでいた場所を、撃たれた建物の瓦礫(がれき)が埋め尽くす。あ、危ないー。
せっかく身を隠せる市街地に入ったのに、ぜんぜん有利になってないよ。やばくない？
なんて、私は思わず振り返る。装塡手席(そうてんしゅ)のゆかりんの向こうにいる、みぽりんをつい見つめた。
けど……なに？　みぽりんは、なにか考え込むような顔をしてて。
「……。違う、かも」
そんな呟(つぶや)きを、ぽつりと漏らした。
Ⅳ号内の他のみんなは聞こえなかったみたいだけど、私は無線越しにどうにか拾ったよ。

な、なに？

「みぽりん？」

「そうだ、西住流なら……このマウスさえも、囮にしてっ。お姉ちゃんは、裏を掻いてるはず！　沙織さん！」

突然みぽりんが、私の下の名を呼んだ。

はい！　私は振り返った恰好のまま、反射的に背筋を伸ばす。

「ど、どーしたの、みぽりん？」

「うん、あのね。そういえば、これまで黒森峰のフラッグ車、見た？」

「へ？　それは」

えーっと。訊かれて初めて、私は記憶の中を探る。ホワイトボード上の地図にも目をやり、十五個の敵戦車を示すマグネットを確認するけど。

「そういえば、見てないかも？　フラッグ車って、お姉さんのティーガーだよね？」

形は私にだって判別できるよ。

ううん、それ以前に、目立つフラッグがついてるはずだし。

つい麻子や華、ゆかりんにも視線を送った。

忙しそうにⅣ号を操る麻子は、否定の動きに首を振る。華もゆかりんも同様だよ。

——ってことは。

「やっぱり」

みぽりんが確信する。

そして。

††

『なにをもたもたしてる！　叩き潰せ！　図体だけがでかいウスノロだぞ！』

そのとき、ヘッドホンに聞き慣れた相手からの通信が入った。

あ、河嶋先輩？　えっ、じゃあ――。

「ヘッツァーです！　生徒会のカメさんチームが、合流してきましたー！」

真っ先に視認したのは、装塡の合間に外を見てたゆかりんだよ。

確かに、カメさんマークのついた戦車が走ってきてた。

これで、こっちはプラス一台！　気は抜けない状況だけど、心強くて泣きそうになる。

でも、黒森峰を攪乱してたヘッツァーが、こっちまで来たってことは。

『ぐずぐずするな！　残りの黒森峰の戦車が、すぐ後から来るぞ！』

……わわわっ、だ、だよね⁉

河嶋先輩の言うとおり、ここでマウスをなんとかしなくちゃっ。

でも――みぽりんの出した答えは、まるで違った。

「ヘッツァーに、この場の指揮を任せます！　他のチームは全車、カメさんチームに従って、マウスの足止めをしてください！」

いきなりみんなに、そう伝達する。えっ、み、みぽりん？

「あんこうチームのみ、単独行動でこの場を離れます。……いえ、決着を付けてきます！　麻子さんっ！」

そして麻子に向かって呼びかけた。たんっ！　と軽快に、戦車長席のペダルを踏むよ。

さすがに麻子もぎょっとした。「右……？　マウスから離れて、街の中心部へか？」って、一瞬ためらう。

ううん、戦車長の命令は絶対だもん。

だからすぐに麻子は指示に従って、Ⅳ号を急発進させた。

だけど、どういう？

私にも、もちろん麻子や華、ゆかりんにだってみぽりんの意図がわからない。

「決着って、みぽりん？」

『ええい、任されてやるが、どーいうことだ西住ぃ!?』

私と河嶋先輩が、同時に訊いたよ。

って、すぐにカメさんチームの方は『うわわわ！　遮蔽物を利用して、走りまくって撹乱しろ！　絶対に、当たるな——！』って、マウスの対応に大わらわになっちゃったけど。

「考えてたの。なぜ、今までフラッグ車を見かけなかったのか、って」

ようやくみぽりんが、きびきびとⅣ号の周囲に目を光らせながら、私たちに語り出す。

「お姉ちゃんなら、西住流なら……マウスがここで待ち伏せしてたのさえ、すべて計算尽くで。わたしたちの行動を完全に、最初から読んでたとしたら、じゃあフラッグ車を配置

するなら？」
「へ？」
「……フラッグ戦は、互いのフラッグ車を守り通した方が勝ちだから。数で圧倒する黒森峰は、フラッグ車を戦闘に参加させなくてもいい。むしろこちらの攻撃の手が、一番届きそうにない場所に隠せばいいの。それこそ、目立つマウスすら囮にして」
囮？
あ、あのマウスが？
「実際、理想的な場所だと思う」
走るⅣ号から街を見て、みぽりんは続けた。
「遮蔽物の多いここなら、姿を隠すには最適だし、囲まれてもやりようはあるよ。うん、だからこそ数で劣るわたしたちも、ここを決戦の場所にしようって考えたんだもの。いや、違う……。不利をカバーするため、じゃない。たぶんお姉ちゃんは、ここでなら『一輌でも十分戦える』って思ったんだ。だから」
市街地の真ん中、なんて場所に潜んだ？
——その答えは、やがてⅣ号の目の前に現れる。
「！　ほ、ほんとにいましたっ！　ティーガーⅠです！」
ゆかりんが叫ぶ。お、おおおお？
マジじゃんっ。あれは、黒森峰のフラッグ車だよね⁉
間違いない。その威圧的な形状を、私も見間違えたりしない。そして、本のフラッグ

が、真っ直ぐ掲げられていた。
ティーガーⅠも、やってきたこっちを認識する。ゆっくりとした動きで正面を、Ⅳ号の方に向けた。
それは、まるで余裕の現れのように感じられた。実際、きっとそうなんだろう。
一方、私たち大洗女子チームは追い詰められてた。
慌てて射線から逃げるⅣ号に、『わー！』とか『潰される～！』とか、無線で悲鳴が届いてきた。
ただ、その中にはっきりと、あんこうチームに向けてのメッセージが混ざる。
『冷泉さん！　あとは頼んだわよ……あの約束は守るから！』
え、これって、ソド子さん？　やられたカモさんチームからの声援だった。
私には、約束の意味はわからなかったけど。
「麻子！　なんかソド子さんが、約束は守るからがんばれーって」
「！　……やる気、出た」
麻子の表情が、ぱあって輝く。とたんにぐん、ってⅣ号が加速した。
おおわわわ？　アスファルトを蹴って市街地の、狭い路地に突入する。
それはもちろん、狙いを付けてくるティーガーⅠの裏を掻くため。
ときには車体の装甲を壁でこすり、履帯を軋ませ、それでもⅣ号はばく進した。
うまく路地を回り込んで、ティーガーⅠの背後へと——。

あ、あれっ？　いない⁉
「麻子さん、左に敵！　ってペダルを激しく踏みしめて、みぽりんがブレーキを命じた。
だだん！　ってペダルを激しく踏みしめて、急停止っ！」

「麻子さん、左に敵！　急停止っ！」
だだん！　ってペダルを激しく踏みしめて、みぽりんがブレーキを命じた。
その判断のおかげで、つんのめって停車したⅣ号の鼻先を、砲弾が掠めて終わる。
って、ティーガーⅠ⁉　慌てて旋回したⅣ号から、私もその姿を捉えた。
あっちも、こっちが回り込むのを予想して、狙い撃ちできる位置に移動してたんだ！
えええええ。
それどころか華が、「撃ちます！」って反撃したけど――だ、ダメ！
当たっても、正面装甲には弾かれちゃう。
私は、嫌でも背筋が凍った。同時にみぽりんの言ってたことを、ようやく理解する。
あのティーガーⅠはフラッグ車だから、やられちゃいけないから、ここで隠れてたんじゃない。
強いから、一台のみで、ここにいるんだ。
「勝てない……？」
ぼそって、みぽりんが呟いたのを、私はヘッドホンで聞き逃さなかった。
ううん、他のみんなだって。
みぽりんは……たぶん、声が震えてた。
「だって、あれはわたしの、憧れのお姉ちゃんで。才能のないわたしと違って、骨の髄まで西住流そのもので。そもそもわたしは、考えたこともなかった。お姉ちゃんと、こうし

て戦い合うだなんて」
……違う、違うよみぽりん！
「みぽりん！　諦めちゃ、ダメ！」
「っ！」
思わず私は声を上げてた。
それは直接、そして喉のマイクを通して、しっかりとみぽりんに伝わるよ。
「そうだ」
しっかりと頷いたのは、まだ必死にⅣ号を走らせる、麻子だった。
「まだ早い。それに私たちは諦めてないぞ」
「麻子……！」
「そ、そーですよ！　どんなときでも逃げ出さないこと、ですよ！」
さらにゆかりんまで。「あ」って、みぽりんが反応する。
「……。そうだった。わたし」
「一人だと逃げ出したくなることはあります。でも……みほさんは一人じゃないですよ。
ええ」
華がそう言って、照準器から顔を離し、振り返る。
その手を後ろにいた、みぽりんの手に置いた。
同じようにゆかりんも、支えるように手を重ねる。
ううん、ここにいる四人だけじゃなくって――。

『へこたれないでくださーい、西住(にしずみ)隊長ー！』
無線から、そんな励ましがみぽりんに送られた。
マウスと戦ってる、ウサギさんチームの一年生!?
『逃げることは簡単ですけど、逃げたら絶対後悔します！　わたしたちは、それを知ってますから！　だからっ』
『こんなの、強豪校のスパイクに比べたらぜんぜんだ！』
今度はバレー部の、アヒルさんチームだった。
『逆リベロだ、隊長！』
いや、なんか、意味はよくわかんなかったけど……？
『ヘッツァーはまだまだいけるぞ！　がんばれ柚子(ゆず)ちゃん！』
生徒会の河嶋(かわしま)先輩が、運転してる小山(こやま)先輩まで励ましてた。
『ポルシェティーガーのエンジンも、まだ音を上げてないってば！』
レオぽんチームの自動車部からも、頼もしい言葉がくる。
ほんとはみんなマウス相手に、必死の戦いをしてるはずなのに。
「華さん、優花里(ゆかり)さん……みんな！」
そんな無線での声を聞き、みぽりんが息を呑(の)んだ。
そーだよ。みぽりんは、私たち大洗女子(おおあらいじょし)の隊長で、みぽりんにしかできない戦い方をしてきたんだから――。

「ごめんなさい！　わたし、忘れてた。みんながいるんだって。一人で戦ってたんじゃないんだって！」

あれ？　泣いてた？　なんだか鼻声が、ヘッドホンに聞こえてきたよ。

でもみぽりんは気持ちを切り替えてか、ぐいってジャケットの袖で目元を拭うと、しゃんと自分を引き締めた。

「それに、みんながいるからこその、わたしなりの戦い方があるはずだって！　……沙織さん、市街地内の地図を確認して！　うまく地形を利用できるポイント、ない？」

そして立ち直ったみぽりんが、真っ先に私に訊いた。おおっ？

え、えーと。

「ちょっと待ってね、すぐ捜す！」

私は手元にあった地図を引っかき回した。ホワイトボードに貼ってるのじゃなくて、もっと詳細な方を見る。市街地は……これだ！

で、今いるところは中心にある、この辺り？　私は現在位置を把握する。

黒森峰のフラッグ車と出くわしたのは、大通りの交差点。そこを中心に、Ⅳ号は裏の路地を駆け抜けてた。

もちろん同じく、敵フラッグ車のティーガーⅠも。

いや、向こうは必死に走るこっちの動きを予測して、悠々と構えてる？

こんな場所で、なにが利用できるんだろ？

近くには公園があるわけでもない。通りにはただ、建物が並んでるのみ。それらは、

どーやらプラウダ戦のときみたいに、戦車が入れるほどの入り口をぽっかり開けてるわけでもない。
「……ダメ、みぽりん！　見つかんないない！」
私は地図から顔を上げて、窓の外を見て言った。
「路地以外に、通れそうなとこはないよー！　大通りの建物の前も、石でできた段差があるばっかりだし！」
まるで公共施設へのアプローチみたいに、幅の広い階段だけが戦車の行く手を阻んでた。
だけど。
「‼　ありがとう、沙織さん！」
ふいにみぽりんが、感謝した。へっ？
どうやらなにか思いついたようだけど——「麻子さん、反転して！」って告げる。
Ⅳ号が狭い路地で、鮮やかに切り返した。向かうのは、大通り？
いや、でも。それだと相手に丸見えになるから、こっちが不利だよ！
……なんて思ってたら。
「優花里さんっ、発煙筒ってまだ残ってる？」
「はい！　こんなこともあろうかと、パート2です！」
じゃん！　って感じでゆかりんが、赤い発煙筒を一本取り出した。
「予備に持ってきた、最後のです！　さっそく使いますか？」

「お願い！　大通りに飛び出したタイミングで、煙幕を張って！」
「了解です〜！」
ゆかりんが横の扉を開けて、腕だけを外に突き出した。そこに握られてるのはもちろん、発煙筒だよ。
もくもくと煙が吹き出して、大通りへと姿を見せたⅣ号の動きに合わせ、拡散する。
ティーガーⅠが狙いを付けようとしたけれど、煙のおかげか撃ってはこなかった。
……いつかと同じく、「無駄弾は使わない」ってことかな。
それをみぽりんは見越してたみたい。
「この隙に、麻子さん！　バックして！」
「？　この位置でか？　後ろは、段差じゃなかったか？」
麻子がさすがにびっくりする。そう、そうだよ！
ティーガーⅠを正面に捉えた、ここから真後ろには、建物と通りの間にできた石段があるはず。
だけど、みぽりんの狙いはむしろ――。
「それがいいの！」
断言した。
すると麻子も、もう迷わない。煙が包み込んでるうちに、Ⅳ号を一気にバックさせる。
がこがこんっ！　うわわわわっ、が、がたがたするうう〜〜〜！
石段を駆け上がり、Ⅳ号がお尻を上げた状態で、しっちゃかめっちゃかに揺れた。すご

い、斜めになっちゃってるよ⁉
でも、この意味を私たちは、煙が晴れて理解する。
角度がついたこの状態で、真正面に、敵ティーガーⅠの姿を捉えた。これって、斜め上から撃つ格好⁉
「華さん！　撃てッ！」
「はい！」
すでに弾は込められてて、華が撃った。
そうだよ、正面の装甲は抜けなくても、こうして斜めの角度からなら……？
だけど、ダメ。敵は、まるで予測してたかのように急発進して、着弾のポイントをずらした。
ああー！　当たったけど、やっぱり装甲抜けてない！
せいぜい火花と、煙がうっすら相手に纏わり付いた程度で。
ううん、みぽりんの作戦は、まだ終わってなかった。
「まだ！　優花里さん、急いで！」
その証拠に、ゆかりんに再装塡を鋭く促す。
「装塡、ＯＫです！」
もちろんゆかりんは、それに応えた。一呼吸で砲弾を叩き込む。
同時にみぽりんが、足元のペダルを踏んでいた。

ごっ！　ものすごい音を立てて、麻子（まこ）がⅣ号を走らせる。
それは……石段の傾斜を利用した、急加速？
あまりの速度で、ティーガーⅠの反撃さえもぎりぎりでかわした。
その勢いのまま、Ⅳ号がティーガーⅠに迫る！
「麻子さんっ、相手の側面に突っ込んで！」
「……最後だから、履帯（りたい）が切れてもいいな？」
麻子が言いながら、Ⅳ号を路面の上で滑らせた。ひー！　なにこれ、視界がぐーるぐる！
ティーガーⅠを正面に捉（とら）えたまま、車体だけが横滑りしてる？
それはさすがのティーガーⅠでも、対応できない速度みたいで。向こうの砲塔（ほうとう）が、慌ててこっちを追いかけるのだけで、精一杯だった。
そのときにはもう、Ⅳ号戦車はティーガーⅠの側面に肉薄する。
ううん、ごぎゃっ！　って鈍い音がして、直後に衝突音で揺れた。
Ⅳ号が、ティーガーⅠにぶつかったの！
鉄の塊同士が弾かれ合い、Ⅳ号のものらしき履帯が切れて、窓の外で飛散した。
それは、Ⅳ号の限界。無茶（むちゃ）をさせた結果だった。
でも――必死に掴（つか）んだ、最初にして最後の勝機！
「華（はな）さん、ゼロ距離射撃――――っ‼」

みぽりんが喉を嗄らした。華は返事すら忘れて、砲塔を回転させる。モーターの音がⅣ号内に、恐ろしくゆっくりと響いた。

だって。同様に、目の前ではティーガーⅠの大砲が、私たちの方へと動いていて。

それでも偶然、Ⅳ号の砲身が先に敵を捉えた。

「この一発は、みんなの想いを込めた一発……！」

ふ――――。華の静かな呼吸音が、エンジン音でやかましい中、はっきり聞こえた。

次の瞬間。

――ド、ドンッ‼

二つの砲撃音が、わずかにずれて重なった。

でもそれはまだ、Ⅳ号に向ききってなかった。撃った煙と衝撃だけが、拡散する。

先に撃ったのは……ティーガーⅠ！

それを切り裂き、Ⅳ号の一発が正確に、ティーガーⅠの側面を至近距離から叩いてた。

ごっ！　ってティーガーⅠのごつい車体が、一瞬跳ねる。アスファルトの通りの上を、あわや横転するかのような勢いだ。

が、どうにか持ち直し、履帯の足で着地する。

それでも、これで「決まり」だった。

見えた――。あの、白い旗が。

ティーガーⅠの上ではためくフラッグの横に、白旗がひょっこり顔を出してた！

やっ、た……。

私、たち。
『黒森峰フラッグ車、ティーガーI沈黙！　……大洗女子学園の勝利！』
呼吸することすら忘れた私のもとに、そんなジャッジが届けられる。
「か、かかか、かっ」
勝った？　って、私はうまく言えないまま、車内のみんなに伝えようと振り返る。
だけど私が通信手としての最後の仕事をこなせなくても、もう誰もがわかってた。
「優勝、です……！」
ゆかりんが呆然としながら、どうにかそう言う。
うー！　私もようやく、まともに口が動くようになってきたよ。
「やったよ、みぽり――ん！」
側にいたら、絶対抱きついてたと思う。
だけど戦車長席までは遠かったから、かわりに隣の麻子に飛びついて、頬ずりしちゃったっ。
麻子ってば握りしめてたレバーを離して、ただずるずると、シートの背もたれに崩れたけどね。あはは、さすがに気が抜けちゃった？
「……勝ちました。わたくしたち、勝ったんですね！」
華も遅れて感激し、泣きそうな顔で口元を押さえた。
その後ろではみぽりんが、まだ実感がわいてないようで。
「勝った、んだよ、ね？」

なんて、きょとんとしてた。
だから。
「うん！」
私が頷く。ううん、一緒に、他のみんなも！
そう——ついに、勝ったんだよ。
私たち、大洗女子学園は‼

四 エピローグ　白無垢の戦士、のはずじゃないの⁉

『優勝だ！　これで、学園の廃校もなくなる……ぐすっ。か、会長～！　柚子ちゃぁあああん！　うわぁあああ――ん！』

『人生は、太陽の動きと似ている！　これが夜明け、すなわち勝利というものか！』

『やったよ、桂利奈ちゃーん！　学校守れたー！』

『チェッカーフラッグだ！　ばんざーい！』

『これで、バレー部の復活も間違いなしだ！　いや、来年も戦車道とダブルローテだっ！』

『ボクたちは来年、がんばろー！　今度はもっとゲームでウデを磨くぞ～』

たくさんの興奮した声が、無線越しに聞こえてくる。

『なによ、やるじゃないの！　冷泉さん、約束は守るわ。あとであなたの遅刻データ、全部消しといてあげるから』

最後には風紀委員の、ソド子さんからそんな言葉も？

「うわっ。……麻子ってば、ソド子さんと遅刻取り消しを約束してたの？」

「まあな」

麻子ったら、幼なじみの私でも見たことがないくらい、超笑顔になってた。

「あとでソド子に抱きついてしまいそうだ」

「……。感謝するんだったら、ちゃんとフルネームで呼んであげたら？　ソドみどり子……あれ？」

じゃない、なんだっけ？　ソド子さんの本名⁉　わ、忘れちゃった……。

――なんてやり取りをしながら、私たちあんこうチームの五人は、狭いⅣ号内から外に出る。

だけど、地に足を降ろしたとたん、ふにゃふにゃとふらついたコが一人。

って、みぽりーん！

「わわっ、大丈夫？」

「う、うん。なんだか、力が……入らなくて」

「あらあら、みほさんったら」

私と華(はな)が咄嗟(とっさ)に支えた。それは、気持ちわかるかも。全力を尽くしたもんね。

「しっかりしろ、隊長」

「西住(にしずみ)殿？」

麻子とゆかりんは苦笑してた。

ほんとみぽりんって、戦車の中と外じゃあ、ぜんぜん違うんだからー。

どうにか一人で立ったみぽりんは、ふとその戦車の方を見上げる。

Ⅳ号戦車。私たちの、最後まで一緒にがんばってくれた、「六番目」の仲間。

……すっごい、ぼろぼろな姿だった。

すすだらけで、あちこちへこんでて、履帯(りたい)は千切れ飛んでるし――みんなで描いたあん

こうマークも、もう判別できないほど。
いつしかみんなで、みぽりんと同じく、Ⅳ号を眺める。
「この戦車でティーガーを倒したんですね」
感慨深げにゆかりんが言った。ぽん、とその手で愛おしそうに、Ⅳ号をねぎらう。
「お疲れ様でした……」
ほんと、ゆかりんって戦車が大好きなんだね。
って、私たちも、だけど。
その手の上に、試合前と同様に、私がそっと手のひらを重ねる。続いて華と麻子が……
最後に、「がんばったね」ってみぽりんが手を置いた。
と、そのときがちゃんっ、て鉄の音が。
私たちははっと振り向く。そこに、白旗を揚げた黒森峰のティーガーⅠがあった。
今のは、その扉が押し開かれた音。ティーガーⅠの中から、乗っていた一人が出てくる。
フラッグ車を指揮してた、みぽりんのお姉さん！　わ、わっ。
「……完敗だな」
ゆっくりと近づいてきたお姉さん、西住まほさんがそう言った。
みぽりんはなんだか、信じられないって顔でぽかんとしてた。
「優勝おめでとう」
向こうから笑顔で手を差し出されて、ようやくみぽりんが反応した。「お姉ちゃ

んっ」ってたどたどしく呼びながらも、握手を返す。
なんだろ？　お姉さんの雰囲気が、前会ったときと違うような？
ううん、それは私が気付いてなかっただけなのかも。
この人はみぽりんと同じで、戦車のことだと凜としてるけど――ほんとはすごく、優しい人で。
「みほらしい戦い方だったな。あれは、西住流ではできないやり方だ」
「！　わ、わたしは、みんなに助けてもらっただけだから」
ゆっくりと、みぽりんが言葉を紡ぐ。
けれど、それをまほさんは否定しなかった。
「そうか。みほは、見つけたんだな。自分の戦車道を」
「あ……う、うん！」
「みほは、それでいい」
そしてまほさんは、ぽんとみぽりんの頭を撫でた。おおお？
「でも、たまには実家に帰ってこい。お母さんが心配してたぞ」



……やっぱりね。私は微笑み合う二人を前に、こっそり頷いてた。

だってさ、姉妹なんだもん。ぜーったい、わかり合えると思ってたんだから！　うんっ。

――かくして、ぼろぼろの戦車の回収作業が始まり、私たちも観客席の前に集められる。

始まるのはもちろん、表彰式だよ！

『優勝！　大洗女子学園！』

「は、はい！」

大きなスクリーンの下に整列した、大洗女子と黒森峰の選手たち。

その中から呼ばれて隊長のみぽりんが、一歩前へと進み出た。ぎくしゃくと緊張した足取りながらも、どうにか表彰台に辿り着く。

そして待ってたのは、審判をしてた蝶野教官だよ。

風にはためく立派な優勝旗が、笑顔の教官から渡される。

その瞬間、わっ、て観客席から拍手がわいた。

「おめでとう！」

「ハラショー！」

私はイケメンさんを捜すのも忘れて、ただただじん、って感動してたけど。

……あれ？　観客席の前の方に、見知った顔がいくつかあるよ？

そこは、どうやら関係者席みたいなのになってるみたい。あの、ダージリン様が拍手してた。わっ、見てくれてたんだ！

さらに隣には、背の高いノンナさんに肩車された、カチューシャさんまで？

それに、ちょっと離れたところにいるのは、一回戦を戦ったケイさんじゃない？　なんか指笛を鳴らしてた。はー。

って、あ。その後ろに、黒いリボンの女の子が。あれはアンツィオ高校の、アンチョビさん！　すごい、戦ってきたみんなが、最後はこうして祝福してくれて。

これが、戦車道なんだ……！

ううん。それだけじゃなくて――なんと黒森峰（くろもりみね）の選手たちが、わらわらと私たちの方へやってくる。え、え？

「胴上げよ！　ほら！」

「せーのっ」

わ――――っ！　私たち大洗女子（おおあらいじょし）の面々が、順番に宙を舞った。私ももちろん、胴上げされるよ。うわ、ちょっと怖いけど、気持ちいい～！

最後にはみぽりんが、優勝旗を抱えたまま、わっしょいわっしょい飛ばされた。

優勝旗を落とさないよう必死すぎて、みぽりんたら地面に解放されても、あわあわしちゃってたけどね。あはは。

もー。ってな感じで、助けてあげようと私は近寄るよ。

でもその前に、みぽりんを支えたコがいた。……え、黒森峰の？

あれは、エリカって副隊長！
ここに来てまだ突っかかろうって気なの？　とか、私が思わず腕まくりする勢いで、駆けつけようとしたそのとき。
「認めるわよ」
エリカってコはみぽりんに、そう言ってた。えっ？
「……あなたは確かに、隊長の格だわ。嫉妬してたのよ、私。あなたの後釜（あとがま）みたいな形で、副隊長になったから」
「エリカさん……」
「それが許せなかった。あなたになら、わかるでしょ。私は……そんな器じゃないのに」
エリカは、なに？　すごくしおらしい雰囲気だよ。
そこには、実は理由があって――。
「ありがと」
ぼそり、と彼女はそう付け足した。
「一年前の、あのとき。私を水没した戦車から、助けに来てくれて。だから私はまだ、戦車道をやってられる」
え、ええええええええ？　じゃあ去年の決勝戦で、みぽりんが助けに行った相手って、エリカさん!?
って、いつしかエリカさんたら、ぽろぽろ泣いてた。
そして。

「あなたが戦車道をやめてなくて、よかった」
……それは唐突な言葉だったけど、すごく感情の伝わる一言。
なんで、エリカさんがつんけんしてたかわかった気がする。ずっと、引け目に感じてたんだ。自分のせいでみぽりんが、戦車から逃げたんじゃないかって。かわりにエリカさんが、その穴埋めをしなきゃって。
みぽりんは――まるでみほさんにされたように、はにかみながらエリカさんの頭を撫でた。
「よかったですね」
私みたく、すべてを見てたゆかりんが呟く。
「やっぱり西住殿の行動は、間違ってなかったんですよ」
うん。だね！　それは今、ここにいるみんなが証明してること。
華が応援に来てた和服姿のお母さんと、嬉しそうに話し込んでた。
麻子はソド子さんに思い切り抱きついて、嫌がられてる。あはは～。
で、みぽりんはようやく立ち直ったエリカさんに、「次は負けないわよ」って宣言されてた。
「はい！」
みぽりんは元気に頷く。
これが、みぽりんの……私たちの、戦車道なんだ！
私――戦車道やってて、ほんとによかった――――！

†

そして私たちは、大洗町へ意気揚々と凱旋するよ。

イルカのマークがシンボルの、大洗駅に戦車を載せた列車が着く。そのまま私たちは、応急修理をしただけの八台の戦車を降ろした。

って、うわー！　す、すごい人の群れ！　なにこれ？

いや、全員……私たちの帰りを待っててくれた、人たち？

駅から商店街の道路に出ると、その両脇を埋め尽くした人々が、歓迎の声と拍手で出迎えてくれる。その中を戦車は一列になって進むよ。

みぽりんは河嶋先輩に命じられて、先頭を行くⅣ号の上で、優勝旗を持って立たされてた。ぺこぺこぺこぺこ挨拶するから、あんまり威厳はないけどね～。

ま、それがみぽりんらしくていっか！　あはは。

それにしても、ほんとすごーい！

「私たち、それだけのことしたんだね～」

この中にイケメンさんがいないかな？　なんて通信手席から顔を出して手を振りながら、私はにまにましちゃう。

だってこれって、もうモテるしかないよね？　だって、決勝戦はばっちりテレビにも映ったんだし！　……あーん、同時に何人もからコクられたら、どーしよ～。

ってゆーか、わ！　なんか、私の名前が書かれた横断幕もあるよ⁉
横断幕を手に集まってくれてたのは、あれれ？　私も知ってる顔。大洗の旅館「肴屋(さかなや)本店」さんとこの、おじさん？
それに、その将棋とか囲碁仲間の、ご年配の方々だよ。子供の頃、遊びに行った肴屋本店さんのロビーで、よく集まってるのを見たことある。
なんだか年上の人ばっかだけど……え？　私って、年上キラーだったの？
やーん！　ほんともう、困ります、モテすぎみたい！
「ありがとー！　武部沙織(たけべさおり)！　商店街の看板娘だって、やっちゃいますよ～！」
なんてつい調子に乗って、言っちゃったー。えへへ。
そんな商店街を抜けて、学園艦(がくえんかん)の停泊する大洗港までやってくると――あれ？
すごい！　私たちを出迎えるように、おっきな仮設スクリーンが建てられてた！
そこでは今日の試合の様子が、流れてた。あー、たぶん生放送でやった後の、ダイジェスト番組をリピート再生してるのかな？
ふふ、私も寮でバッチリ予約録画済みだよー。
でも。
「えっ？」
私は直後、信じられないものを目撃する。
なっ……。
ちょ、ちょっと待って――⁉

『♪アアアン、アン！　アアアン、アン！』

「きゃー！　なに、なんで？　あんなの放送されてるの〜〜〜〜っ‼」

　私は思わず絶叫した。

　だって、だってだって！

　画面端に『大洗女子（おおあらいじょし）学園勝利の軌跡（きせき）』って現れたそこには、私たちがプラウダ校との対戦時にヤケで踊った、あの「あんこう踊り」のシーンが！

　ウソ――――！　あ、あんなのカメラで撮られてたの⁉

　そして、なぜか私が一番アップで映ってて。

　あああああああああああ。

「やだもー！　お嫁に行けなぁい！」

　がくっ……。私は通信手席に、崩れ落ちた。

　なんで、よりによって、あんな〜〜〜〜！

「てゆーか、私の婚約はどーなんの？　優勝して、これがきっかけでイケメンと結ばれるはずだったのにいいい！」

「婚約って、ま、まだ言ってたんですか？」

　なぜかゆかりんがびっくりしてた。はい？

「沙織（さおり）さん……脳が」

　華（はな）はなんか、変なこと言う。

　ノー？　違うよ、私は常にカレには、イエスな女の子だよっ。

「仕方ない。ダメなら私がもらってやるか」

麻子(まこ)がそんなこと言った。

……あのね、それは嬉(うれ)しいけど、女の子同士は結婚できないんだよ？

てゅーか麻子は絶対、私のご飯目当てなだけだよね？

「だ、大丈夫だよ。沙織さんなら、きっといつか素敵な人が現れるから。……たぶん」



みぽりんだけが励ましてくれたけど——あの、「たぶん」って響きがすごく、打ち消すと思うんだ。
うー！　もうっ、こーなったら手段は一つ！
「もう一回、来年も優勝しよっ、みんな！」
私はがばりと跳ね起きて、力強く宣言した。
「そして今度こそ、彼氏ゲットで婚約だもんー！」
そう、もーそれしかないじゃん！
それが私たちの、ううん、私の戦車道だよ！
……今度は絶対、あんこう踊りはしないから！　そう誓いながら……。ううう。

あとがき

ノベライズ版『ガールズ＆パンツァー』、ついに完結です！
今回は最後ということもあり……なんと沙織ちゃん視点だけでなく、華と麻子の視点で決勝戦前夜のオリジナルストーリーを補完してみました。
●華視点――「ＷＯＰ」は実在のゲーム「ＷＯＴ」がモチーフです。しかし中身は別物なので、ご注意ください。要は「ダージリン様語録」をすべて出したかったのです（笑）。
●麻子視点――一つ、謝罪を。二巻で「ソド子は二年生」となっているのですが、間違いです。ソド子は三年生でした。二巻重版ぶんから訂正しています。すみません！
●沙織視点――決勝戦の展開は、アニメからかなり変更しています。「沙織ちゃんが主人公の物語」として私が独自に再構築しました。賛否あると思いますが、いかがでしたか？
●全体の基本構想は「今まで書き切れなかったキャラたちを、できるだけ出そう」です。
●また、実際に大洗町に足を運びましたので、お世話になったあの「肴屋本店」さんも出してみました。勝手に（苦笑）。大洗町はとてもいいところでしたよ～。
ガルパン自体は新作ＯＶＡに続編の劇場版とまだまだ続きますが、私が関わるのはここまでです。アニメ打ち上げにも参加できて、楽しかったですよ。ありがとうございました！

２０１３年６月　ひびき遊

著者

ひびき遊（ひびき・ゆう）

関西在住の玩具マニア。先日、ようやく大洗に足を運んできました！　しかし当然のように商店街内の玩具屋を覗き、復刻版エクスカイザーの新品を見つけて、思わず買ってしまったり。なにをしに行ったのやら……。

イラストレーター

島田フミカネ（しまだ・ふみかね）

メカ少女に定評のあるイラストレーター。代表作に『ストライク・ウィッチーズ』など。『ガールズ＆パンツァー』ではキャラクター原案をつとめる。

本文イラスト

京極しん（きょうごく・しん）

滋賀県出身のイラストレーター。

代表作は『ほうかご百物語』（電撃文庫）、『もて？モテ！ある日突然モテ期になった！』（MF文庫J）など。

娘TYPE（角川書店）にて『ストライクウィッチーズ』公式コミックを連載するなど幅広く活動。

同人サークル「INFINITY DRIVE」を主宰。

ガールズ＆パンツァー3

著者名……ひびき遊
発行者……三坂泰二
発行所……株式会社メディアファクトリー
http://www.mediafactory.co.jp/

2013年6月30日　電子書籍版　ver.1.0.1